

ながさかてんのうじ
長坂天王寺遺跡

平成13年3月

宇都宮市教育委員会

序

宇都宮市北西部の鞍掛山に源を発する姿川は、市域西部を南流し、思川に合流します。この姿川流域は宇都宮市内でも有数の遺跡密集地ですが、特に縄文時代のもは豊富で、大谷寺洞穴遺跡・根古谷台遺跡・上欠団地遺跡など、本市を代表する縄文集落跡も多くみられます。

長坂天王寺遺跡もこの姿川流域に営まれた縄文集落の一つですが、縄文土器や石器がよく出土することから、その存在については比較的古くから知られていました。今回の発掘は寺院の建築にともなうものであり、推定される遺跡全体からすればその一部が調査されたにすぎませんが、縄文時代中期の竪穴住居跡10軒に加えて貯蔵用とみられる多数の土坑が確認され、土器や石器も多数発見されました。当時の村の様子や暮らしぶりを知る上で、非常に貴重な資料を得ることができたものと考えております。

この度、これらの成果を報告書として発刊する運びとなりましたので、各方面におかれまして広くご活用いただけますことを期待するものであります。




最後になりましたが、調査にあたりご指導いただきました諸機関・諸先生並びに、終始ご協力いただきました地元関係各位に対しまして、深く感謝の意を表する次第であります。

平成13年3月

宇都宮市教育委員会

教育長 高梨 眞佐岐

例 言

1. 本書は、栃木県宇都宮市下荒針町に所在する長坂天王寺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、宗教法人大運寺移転新築工事に伴う事前調査として実施した。
3. 調査にあたっては、宇都宮市教育委員会が主体となり、宗教法人大運寺（代表役員双樹正道）から委託を受けて山武考古学研究所（所長平岡和夫）が実施した。
4. 遺跡の所在地・調査期間・調査面積・担当者については下記のとおりである。
所在地：栃木県宇都宮市下荒針町字七久保3,925-1外
調査期間：平成11年6月14日～平成11年10月19日
調査面積：3,054㎡
担当者：湯原勝美（同研究所調査研究室）
5. 本書の執筆は、第Ⅰ章を柴木誠（同教育委員会文化課）、第Ⅱ章以下を湯原が担当した。
6. 遺構番号は、調査現場で付したものをそのまま使用した。遺構番号の表記には下記の略号を用い、各種別ごとに通し番号を付した。
竪穴住居跡 (SI) 掘立柱建物跡 (SB) 焼土跡 (FP) 溝跡 (SD) 土坑 (SK) 小谷 (SX)
遺物集中地点 (大グリッド番号/10A区)
7. 遺構実測図中の北方位は、すべて国家座標にもとづいた座標北を示す。
8. 遺構の土層説明で用いた土色名は、『新版標準土色帖』〔小山・竹原1996〕にもとづく。
9. 遺構実測図における遺物の出土位置については、土器を●、石器類を▲、自然石を△、金属製品等を■で示した。
10. 遺構・遺物実測図における網点（スクリーントーン）は、下記の内容で使用した。
 炉・焼土跡、石器磨痕、陶器施軸範囲  横断土器断面  石器敲打痕
11. 掲載した遺構・遺物の縮尺については、各頁ごとに表示した。なお、写真図版の遺物縮尺は1/3を基本とし、それ以外のものについては各個に表記した。
12. 出土遺物および図面・写真などの資料は、宇都宮市教育委員会が保管している。
13. 発掘調査から報告書刊行にいたるまで、下記の方々および諸機関からご指導とご協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

安部芳郎 黒田美知子 篠原 正 刀川和夫 橋本澄夫

栃木県教育委員会文化課 栃木県土木部用地課 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター

宗大運寺 栃大林組 栃総研 大林道路舗 衛生土運 開成測量部 栃新成田総合社

宇都宮短期大学

発掘調査参加者 秋場 裕 安生トシ 安生洋子 井口邦雄 岩見和典 宇賀神幸子 内川 隆

亀田スエ子 河野純一 国分孝子 相良恵子 篠崎真澄 篠原八重子 鈴木 胖 双樹弘道

高橋富美子 竹沢タマ 竹沢吉太 長谷川健二 福田 弘 三上 渡 吉澤 一 渡辺フミ

渡辺みゆき

整理調査参加者 大竹美奈子 片岡美和子 末廣弘子 藤井陽子

（人名五十音順、敬称略）

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
A. 周辺の遺跡	3
B. 本遺跡とその周辺	5
第Ⅲ章 調査の概要	6
第1節 調査の方法	6
A. 発掘調査	6
B. 整理調査	6
第2節 調査の経過	7
第3節 層序	8
第Ⅳ章 遺構と遺物	11
第1節 縄文時代	11
A. 竪穴住居跡	11
B. 焼土跡	35
C. 土坑	35
D. 遺物集中地点	59
E. 遺構外出土遺物	62
第2節 中・近世	75
A. 掘立柱建物跡	75
B. 溝跡	76
C. 土坑	83
D. 遺構外出土遺物	85
第Ⅴ章 まとめ	88
第1節 縄文時代	88
第2節 中・近世	89

挿図目次

第1図	周辺の遺跡分布図	2	第33図	SK18出土遺物・SK26出土遺物、 SK19・同出土遺物	43
第2図	遺跡周辺の地形と断面図	4	第34図	SK20・同出土遺物(1)	46
第3図	グリッド設定概念図	6	第35図	SK20出土遺物(2)	47
第4図	試掘トレンチ及び本調査区設定図	8	第36図	SK21・同出土遺物、 SK22・同出土遺物	48
第5図	調査区周辺の地形図	9	第37図	SK23・同出土遺物(1)	49
第6図	地質柱状図	9	第38図	SK23出土遺物(2)	50
第7図	遺跡全体図	10	第39図	SK24・同出土遺物、 SK25・同出土遺物、SK27	52
第8図	北側調査区遺構配置図	12	第40図	SK28、SK29・同出土遺物(1)	54
第9図	中央・南側調査区遺構配置図	13	第41図	SK29出土遺物(2)、SK30	55
第10図	SI01・同出土遺物	14	第42図	SK30出土遺物、 SK31・同出土遺物、 SK32・同出土遺物	56
第11図	SI02・同出土遺物(1)	15	第43図	SK33・同出土遺物、 SK34・同出土遺物、SK35	58
第12図	SI02出土遺物(2)	16	第44図	遺物集中地点(10A区)	60
第13図	SI03・同出土遺物	18	第45図	遺物集中地点(10A区)出土遺物(1)	61
第14図	SI04・同出土遺物	19	第46図	遺物集中地点(10A区)出土遺物(2)	62
第15図	SI05・同出土遺物	20	第47図	遺構外出土遺物(1)	63
第16図	SI06・同出土遺物	21	第48図	遺構外出土遺物(2)	64
第17図	SI07	22	第49図	遺構外出土遺物(3)	66
第18図	SI07出土遺物(1)	24	第50図	遺構外出土遺物(4)	68
第19図	SI07出土遺物(2)	25	第51図	遺構外出土遺物(5)	69
第20図	SI07出土遺物(3)	26	第52図	遺構外出土遺物(6)	70
第21図	SI08・同出土遺物(1)	28	第53図	遺構外出土遺物(7)	71
第22図	SI08出土遺物(2)	29	第54図	遺構外出土遺物(8)	72
第23図	SI09・10	30	第55図	遺構外出土遺物(9)	73
第24図	SI09出土遺物(1)	31	第56図	SB01・同出土遺物	74
第25図	SI09出土遺物(2)	32	第57図	SB02	76
第26図	SI10出土遺物	33	第58図	SD01・同出土遺物、SD02	77
第27図	FP01、SK02・同出土遺物、 SK03・同出土遺物、 SK04・同出土遺物(1)	34	第59図	SD03、SD04、SD05	78
第28図	SK04出土遺物(2)、 SK05・同出土遺物、 SK08・同出土遺物	36	第60図	SD03、SD04、SD05出土遺物	80
第29図	SK09・同出土遺物、 SK10・同出土遺物	38	第61図	SD06	81
第30図	SK11・同出土遺物、 SK12・同出土遺物	39	第62図	SD07・同出土遺物	82
第31図	SK13・同出土遺物、 SK14・同出土遺物	40	第63図	SK01・同出土遺物、SK06、SK07	83
第32図	SK15・16、SK15出土遺物、 SK17、SK18・26	42	第64図	遺構外出土遺物	84

表目次

表1	周辺遺跡一覧表	3
表2	石器観察表(1)	86
表3	石器観察表(2)	87

写真図版目次

- P L 1 1. 遺跡遠景
 2. 北側調査区全景
 P L 2 1. 中央調査区全景
 2. 中央調査区全景
 3. 南側調査区南側全景
 4. 西側調査区全景
 5. 南側調査区全景
 P L 3 1. SI02全景
 2. SI01全景
 3. SI03全景
 4. SI04全景
 5. SI05全景
 P L 4 1. SI06全景
 2. SI07全景
 P L 5 1. SI07遺物出土状況
 2. SI07遺物出土状況
 3. SI08全景
 4. SI08遺物出土状況
 5. SI09全景
 P L 6 1. SI09遺物出土状況
 2. SI09遺物出土状況
 3. SI10遺物出土状況
 4. SI09・10セクション
 5. SI10全景
 P L 7 1. FP01全景
 2. SK02全景
 3. SK02遺物出土状況
 4. SK03全景
 5. SK03遺物出土状況
 6. SK04全景
 7. SK05全景
 8. SK08全景
 P L 8 1. SK09全景
 2. SK10全景
 3. SK11・12セクション
 4. SK11全景
 5. SK12全景
 6. SK13全景
 7. SK14全景
 8. SK15・16全景
 P L 9 1. SK17全景
 2. SK18・26全景
 3. SK19全景
 4. SK20全景
 5. SK21全景
 6. SK22全景
 7. SK23全景
 8. SK23遺物出土状況
 P L 10 1. SK24全景
 2. SK25全景
 3. SK27全景
 4. SK28全景
 5. SK29検出状況
 6. SK29全景
 7. SK29セクション
 8. SK29セクション
 P L 11 1. SK29セクション
 2. SK29セクション
 3. SK29完掘
 4. SK30全景
 5. SK31全景
 P L 12 1. SK32全景
 2. SK33全景
 3. SK34全景
 4. SK35全景
 5. 遺物集中地点(10A区)遺物出土状況
 6. 遺物集中地点(10A区)全景
 7. SK01全景
 8. SK01遺物出土状況
 P L 13 1. SB01・02全景
 2. SD01全景
 3. SD01セクション
 4. SD01遺物出土状況
 5. SD01遺物出土状況
 6. SD02全景
 7. SD02セクション
 8. SD03~05全景
 P L 14 1. SD03~04セクション
 2. SD03・05全景
 3. 古屋敷全景
 4. SD03・05検出状況
 5. SD06検出状況
 6. SD06全景
 7. SD07全景
 8. 作業風景
 P L 15 SI01・02・03・04出土遺物
 P L 16 SI05・06・07出土遺物
 P L 17 SI07出土遺物
 P L 18 SI07・08出土遺物
 P L 19 SI09出土遺物
 P L 20 SI09・10、SK02・03出土遺物
 P L 21 SK04・05・08・09・10出土遺物
 P L 22 SK11・12・13・14・15・18・19出土遺物
 P L 23 SK20・21出土遺物
 P L 24 SK22・23出土遺物
 P L 25 SK23・24・25・26出土遺物
 P L 26 SK29出土遺物
 P L 27 SK30・31・32・33・34出土遺物
 P L 28 遺物集中地点(10A区)出土遺物
 P L 29 遺構外出土遺物(1)
 P L 30 遺構外出土遺物(2)
 P L 31 遺構外出土遺物(3)
 P L 32 遺構外出土遺物(4)
 P L 33 遺構外出土遺物(5)
 P L 34 遺構外出土遺物(6)
 P L 35 SB01、SD01・03・04・05出土遺物
 P L 36 SD07、SK01、
 遺構外出土遺物(中・近世)

第Ⅰ章 調査に至る経緯

本遺跡は、宇都宮市西部域を代表する縄文集落跡の一つとして古くから知られた遺跡で、昭和58年発刊の『宇都宮の遺跡—宇都宮市埋蔵文化財等遺跡詳細分布確認調査報告書—』では「長坂天王寺遺跡（宇都宮市登録番号156）」として周知されたものである。遺跡は日当たりの良い南斜面に立地し、登録時の現況は大部分が山林と果樹園であった。

この遺跡の一画に開発計画が浮上したのは、平成5年4月のことである。宇都宮市街地の材木町に所在した大運寺が、県道の拡張計画に伴って移転を余儀なくされたものであり、その移転候補地として本遺跡が選定されたことによる。照会を受けた宇都宮市教育委員会では、事業者の大運寺住職・双樹正道氏と協議の結果、まずは予定地の確認調査を実施することとした。

確認調査は平成5年6月28日～7月15日の約半月間で実施した。本堂建設及び墓地造成予定の約10,000㎡を対象とし、幅2mのトレンチを全面に20m間隔で設定した。この結果、疎密はあるものの予定地の半分以上に遺構が及んでいることが判明し、移転に際しては記録保存のための発掘調査が必要となることが確認された。

この確認調査の結果をもとに、平成5年12月～平成6年6月の間、本格調査の持ち方等を含めた取扱い協議を進めたが、事業者側が新たな移転候補地を検討することとなり、本遺跡地への移転計画は一時中断された形となった。

本格調査についての協議が再開されたのは、平成9年6月からであった。この間、事業者側により移転先としていくつかの候補地が検討されたが、やはり本遺跡地が最も相応しいという結論に達したことによる。これを受けて、市と事業者では、本格調査の範囲・持ち方等について協議を重ね、平成11年度内に調査を実施することとした。



第1図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000) 注1

注1 『宇都宮市遺跡地図〔改訂版〕』〔宇都宮市教委1997〕をもとに、国土地理院発行1/25,000『宇都宮西部』（平成12年2月1日発行）に加筆して作成した。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

本遺跡は、宇都宮市の西部、JR宇都宮駅から西へ約6.3kmの地点に所在し、市域西部を南北に貫流する委川の右岸台地上に立地する。地形的には、古賀志山塊から連なって延びる鹿沼台地の東端に位置する。同台地は、北部では比較的平坦な面をなすが、中央以南は谷が複雑に入り組んだ開折台地が形成される。

本遺跡は、南東に向かって延びる標高155m前後の舌状台地上に立地する。同台地は馬の背状の地形を呈しており、頂部の幅は狭い。委川に面した北東側は崖、開折谷に面した南西側は緩い斜面地となっている。また、南西側の台地裾部には、谷に沿って幅の狭い帯状の平坦地が断続的にみとめられる。平坦地の標高は130m前後である。

各時代の遺跡は、台地頂部に存在する僅かな平坦地と、南西側裾部の帯状の平坦地を中心に展開する。台地頂部と委川の現河床との比高は約35m、西側の開折谷との比高は約30mである。

第2節 歴史的環境

A. 周辺の遺跡

市域西部を南流する委川の流域には、低地帯を臨む台地上を中心に縄文時代草創期から近世に至る遺跡が数多く存在する。ここでは本遺跡の主体をなす縄文時代について、周辺の主要遺跡をとおして概観する。

草創期・早期の代表的な遺跡として、委川左岸に位置する大谷寺洞穴遺跡がある。草創期の遺物が層位的に出土したことで知られ、土器にともなって、丸形石斧、局部磨製石斧、打製石斧、半月形打製石器、片刃打製石器、断面三角形の鎌など多量の石器が出土している。また、早期後半の貝殻系土器とともに出土したとされる横臥屈葬のほぼ完全な人骨も発見されている。

前期の遺跡には、聖山公園遺跡(28)がある。同遺跡からは、黒浜式期の大形住居跡4軒、溝で囲まれた平地式の掘立柱建物跡数棟などが検出されており注目される。

表1 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	長坂天王寺遺跡	集落	縄文・中近世	17	船田中原遺跡	集落	古墳
2	羽下薬師堂裏古墳	古墳	古墳	18	長峰遺跡	集落	縄文・奈良
3	羽下遺跡	集落	奈良・平安	19	亀が窪古墳	古墳	古墳
4	上の原古墳群	古墳	古墳	20	上欠円地遺跡	集落	縄文
5	中城跡	城館	鎌倉	21	初綱遺跡	集落	縄文
6	御城跡高塚群	高塚	江戸	22	高尾神遺跡	集落	縄文
7	御城田遺跡	集落	縄文	23	富士山台遺跡	集落	縄文・奈良
8	台ノ内遺跡	集落	縄文	24	亀岡坪遺跡	集落	奈良・平安
9	下荒針西原遺跡	集落	縄文	25	香掛遺跡	集落	奈良・平安
10	サルボ山高塚群	高塚	江戸	26	亀岡前古墳	古墳	古墳
11	大久保遺跡	集落	縄文	27	定使古墳	古墳	古墳
12	台耕上遺跡	集落	縄文	28	聖山公園遺跡	溝・集落・榊塚	縄文・古墳
13	宝性寺跡寺院	寺院	江戸	29	稲荷古墳群(市)	古墳	古墳
14	高田遺跡	集落	縄文・古墳	30	榊の内古墳	古墳	古墳
15	長坂南遺跡	集落・古墳	縄文・古墳	31	観音塚古墳	古墳	古墳
16	羽黒下団地遺跡	集落	縄文				



第2図 遺跡周辺の地形と断面図 (1/5,000) 註1

註1 宇都宮市役所発行1/2,500「IX-HE90-1」「IX-HE 99-2」(平成4年修正)に加筆し、1/2に縮小した。

中期に入ると遺跡数は急激に増加する。高尾神遺跡²²は、阿玉台I b式から加曾利E1式を主体とする遺跡で、住居跡19軒、土坑11基などが検出されている。これに後続する時期の遺跡として、本遺跡¹の南約1kmの地点に上欠団地遺跡²³がある。住居跡67軒、土坑300基以上が検出されており、中期中葉から後半段階を主体とする大規模な集落跡である。また、姿川対岸の台地上、本遺跡から北西約2kmの地点には御城田遺跡²⁴がある。上欠団地遺跡と同様、中期中葉から後期初頭の拠点的な大集落跡で、袋状土坑を主体とする671基の土坑と、これを取り巻く72軒の住居跡が検出されている。トナの夾の屋根裏貯蔵を示す資料や、打製石斧・磨石・凹石・石皿などの出土石器の比率が高く、石器組成の面からみて植物依存の傾向が高かったことが指摘されている〔戸澤・石橋ほか1987〕。

後期になると遺跡数は減少するが、姿川右岸では初網遺跡²⁵、根古屋遺跡などが知られており、初網遺跡では晩期までの営みを見ることが出来る。

B. 本遺跡とその周辺

本遺跡は、「天王山遺跡」の名称で、古くからその存在が知られている。昭和39年には、すでに堀静夫氏による「栃木県の縄文遺跡（其の一）」〔堀1964〕のなかでふれられており、おそらく本遺跡に関する資料としては初出であろう。その後、昭和43年に発行された『栃木県遺跡目録集成』〔栃木県教委1968〕によれば、前期・中期の集落跡で石鏃や石斧などが発見されていることが記述されている。また、昭和47年に刊行された『栃木県の考古学』〔大久・堀1972〕には、宇都宮市内で確認されている縄文時代の主要遺跡5か所のうちの1か所として記載されており、「…前期末から中期初頭にかけた遺跡で、遺物の包含層は畑耕により斜面上のためかなり破壊されているが、諸磯b式・阿玉台式の土器・石器が多出している」と記されている。具体的な遺跡の内容を示すものとしては、昭和59年に発表された五十嵐利勝氏の「栃木県姿川流域の考古学調査²⁶」〔五十嵐1984〕がある。報告された資料の大部分は、同氏により昭和49年に行われたフィールド調査によって表面採集されたものである。これによれば、野島式、茅山式、黒浜式、諸磯a・b式、浮島I・II式、興津式、阿玉台式、加曾利E式、大木8a式などの土器や石器が得られており、早期後半から中期にかけての遺跡であることが報告されている。

今回の調査区からは外れるが、地元では舌状台地の南東先端部を限定的に「天王山」と通称している。従来、長坂天王寺遺跡（市番号156）として周知されているのはこの地域であり、これまでに知られている本遺跡の資料の大半は、同地から表面採集されたものである。また、同地の畑には「埴輪時代貴族之靈供養塔」と刻まれた由来不明の石碑が建っている。これをもとに、かつて同地に古墳が存在した可能性について指摘されているが〔五十嵐1984〕、現状ではこれを支持する資料は得られていない。現存するもっとも近い位置にある古墳は、本遺跡の南約600mの地点にある長坂南遺跡²⁷において確認されている。

また、調査区の南東側には、3段からなる整地された広い平坦面が存在する。地元では通称「古屋敷」と呼ばれている場所で、幕末頃に当地の名主を務めていたとされる安生家の屋敷跡であることが判明した。明治時代に入って同屋敷は廃絶され、近隣に住居を移している²⁸。その後、長年にわたって畑として利用されてきたものである。今回の調査で、同屋敷に付随すると思われる溝跡が数条検出されているが、機能年代を示すような遺物の出土はほぼ皆無である。なお、現在、本遺跡名²⁹の一部ともなっている「寺」の存在については、地元でも伝承が残っておらず不明である。

注1 同家の後裔、分家の方々など数名から聞き取り調査を行った。

注2 現在の名称は、昭和58年10月に発行された『宇都宮の遺跡』〔宇都宮市教委1983〕の中で使用されたものである。

第三章 調査の概要

第1節 調査の方法

A. 発掘調査

本調査の範囲については、平成5年7月に宇都宮市教育委員会が行った試掘調査（1～8T、合計1,190㎡）と、開発区域の変更にもない、今回あらためて実施した追加の試掘調査（1～6T、合計652㎡）の結果をもとに決定された。事業区域・開発区域・本調査区域の範囲および各試掘トレンチの設定位置については第4図に示したとおりである。

本調査の対象となった地区は5地点に分かれており、便宜上、北側調査区（9A～14H区）、中央調査区（2地点、9K～10L区、11L～12M区）、南側調査区（8M～11Q区）、西側調査区（2N～4P区）と呼称した。調査区の座標は、GPS（Global Positioning System 全地球測位システム）を使用し、国家座標を基準に設定した。座標杭は10m間隔で打設し、調査区上に一辺10mの正方形グリッドを設定した。座標杭には、北から南へA・B…、西から東へ1・2…と仮称を付し、各北西隅部の杭仮称をそのままグリッド呼称として使用した。座標の基点とした1A杭の座標数値は、第Ⅴ系、X=62450.000、Y=-210.000である。また、各グリッドには、25分割して一辺2mの小グリッドを設定した。小グリッドには1～25の数字を付し、それぞれ「1A1区」（大・小グリッド）のように表記した。

調査区内の掘り下げは、表土除去に重機（0.7バックホー）を使用した。ほかはすべて人力で行った。

遺構内出土遺物は、可能な限り平面位置および高さを記録して取り上げた。また、遺構外出土遺物については、基本的に小グリッド単位で一括して取り上げた。

遺構実測図は、1/20の縮尺を基本とし、必要に応じて1/10の詳細図を作成した。

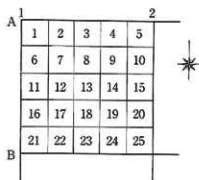
写真撮影には3台のカメラ（モノクロ35mm・カラーネガ35mm・カラーリバーサル35mm）を使用し、調査の各段階で記録を行った。なお、遺跡遠景は、南約500mの地点にある宇都宮短期大学の校舎屋上から撮影を行った。

B. 整理調査

遺物の基礎整理は、洗浄、注記、接合、分類の順で行った。注記は、土器微細片、小形の石器類などを除き、インクジェットプリンターを使用した。注記内容は、遺跡略号「UNT」、調査年「1999」、遺構番号、遺物番号などを併記した。接合は可能な限り行い、土器にはエボキシ樹脂を使用して強度的に必要な最小限の復元を行った。

遺物の実測・拓本は、報告書に掲載する遺物を中心に行った。

遺物の写真撮影には、モノクロ35mmフィルムのほか、一部の復元定形土器についてはカラーネガ35mmフィルムを使用した。



第3図 グリッド設定概念図

第2節 調査の経過

発掘調査は、平成11年6月14日から同年10月19日までの約4か月間にわたって実施した。調査経過の概略については下記のとおりである。

6月期 14日、調査準備。事業者および施工業者と細部について打ち合せ。15日、近隣居住者および城山地区の区長宅へ挨拶。平成5年に掘削された試掘トレンチの一部を精査し、遺構検出面の確認を行う。16日、西側調査区から表土除去を開始する。0.7バックホー1台使用。17日、西側調査区の表土除去を終了する。午後、施工業者と残土処理の件で打ち合せ。残土はすべて場内に積み置きとする。21日、宇都宮市教育委員会文化課の梁木誠指導主事が来跡。調査範囲と調査方法について打ち合せを行う。GPSを使用して座標の取り付けを行う。22日、開発区域の南東側に追加の試掘トレンチを2本(1・2T)設定して掘り下げる。遺構・遺物ともに検出されなかった。23日、中央調査区の表土除去を行う。24日、開発区域北側に追加の試掘トレンチ4本(3~6T)を設定して掘り下げる。25日、3~6Tの試掘を終了する。遺構・遺物ともに台地頂部付近に密集する状況が明らかとなった。北側調査区の表土除去を開始する。28日、人力による作業を開始する。西側調査区の遺構確認を開始する。29日、大規模な黒褐色土の落ち込みを検出する。埋没した小谷の可能性が考えられる。埋没状況の確認のため、地形の傾斜に合わせてサブトレンチを十字形に設定し、掘り下げを開始する。

7月期 1日、南側調査区の遺構確認を開始する。5日、西側調査区の南西側で検出されたローンプロックを主体とする大規模な落ち込みについて、確認のため一部掘り下げを行う。その結果、底面までの深さは約1.7m、覆土は人為堆積、壁には特定の地層(鹿沼軽石層)に沿って掘り広げられた状況がみとめられたため、現代の鹿沼土探掘坑であると判断した。同調査区北端において同様の探掘坑がもう1ヶ所確認されている。6日、西側調査区の全景写真を撮影する。7日、小谷(SX01)のセクション図を作成して、同地区の調査を一旦終了する。遺構は検出されず、小谷からの出土遺物は縄文土器の細片2点のみであった。9日、南側調査区の遺構の掘り下げを開始する。12日、梁木指導主事の立ち会いのもとで、予定外の現状変更である洗車場部分(31.5㎡)の表土除去を行う。遺構・遺物は検出されなかった。重機作業を

すべて終了する。16日、西側調査区の全体図の作成を行う。同地区の調査を終了する。21日、グリッド杭・BMの打設を完了する。23日、南側調査区の全景写真を撮影する。本日、梅雨明け。27日、中央調査区2ヶ所の全景写真を撮影する。29日、北側調査区の遺構確認を開始する。30日、梁木指導主事が来跡し、南側および中央調査区の調査状況について視察する。

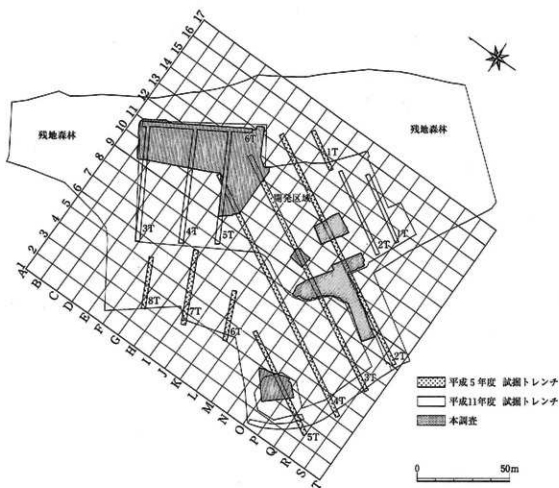
8月期 1日、北側調査区の遺構確認を継続する。切り株は抜根せずに残したため、その除去にやや手間取る。9日、遺構確認を終了する。北東側を中心に多数の遺構と遺物を検出する。遺構は密集しており、重複が随所に見とめられる。南側および中央調査区の全体図の作成を行う。10日、北側調査区の遺構調査を開始する。12~16日、お盆のため現場作業は休止。26日、梁木指導主事が来跡して視察する。また、来月予定されている遺跡見学会の件について打ち合せを行う。

9月期 1日、北側調査区の遺構調査を継続する。遺構の重複が著しい。16日、午後、遺跡見学会を開催する。事業者サイドから要望のあったもので、本事業の関係者20数名を対象に行った。18日、北側調査区の全体図の作成を行う。28日、遺構の掘り下げを終了する。梁木指導主事が来跡して調査状況の視察を行う。29日、北側調査区の全景写真を撮影する。30日、発掘器材の後片付けを行う。

10月期 5日、遺構実測図の作成を終了する。6日、遺跡全体図を再編する。7日、梁木指導主事が来跡し、発掘調査の終了確認を行う。8日、出土遺物および発掘器材の搬出を行い、現地事務所を撤収する。19日、残務整理および終了関係書類の作成をもって発掘調査を完了する。



北側調査区作業風景



第4図 試掘トレンチ及び本調査区設定図 (1/2,000)

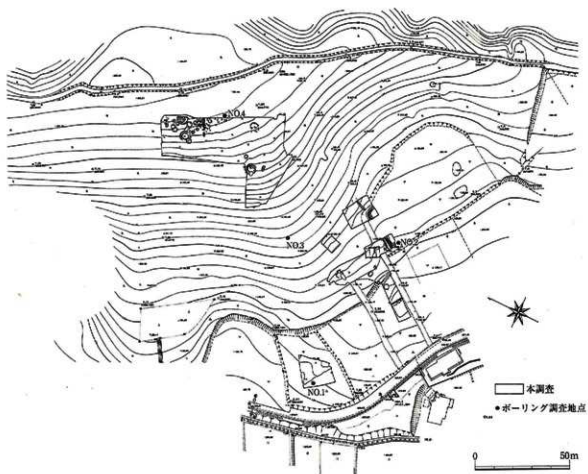
第3節 層序

調査区の層序は、工事に先立って行われた地質調査の結果〔北関東興発1999〕をもとに図示した(第5・6図)。

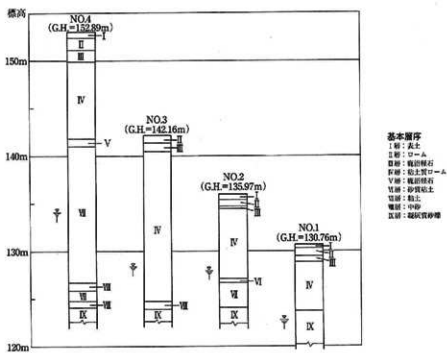
台地の上部は、ローム層(Ⅱ・Ⅳ層:層厚10m前後)で厚くおわれ、層間には鹿沼軽石層(Ⅲ・Ⅴ層:層厚0.27~1.15m)を1~2層はさむ。砂質粘土~粘土層(Ⅵ・Ⅷ層:層厚0~16.30m)を介して、下部には段丘礫層である凝灰質砂礫層(Ⅸ層)が標高124m前後でほぼ水平に堆積しており、その上面には部分的に中砂(Ⅹ層:層厚0.60~0.80m)の堆積がみとめられる。

基本的に上部のⅡ~Ⅵ層は、Ⅷ層の堆積以後に形成された地形にそって堆積している。なお、ローム層(Ⅱ層)からは遺物は検出されていない。

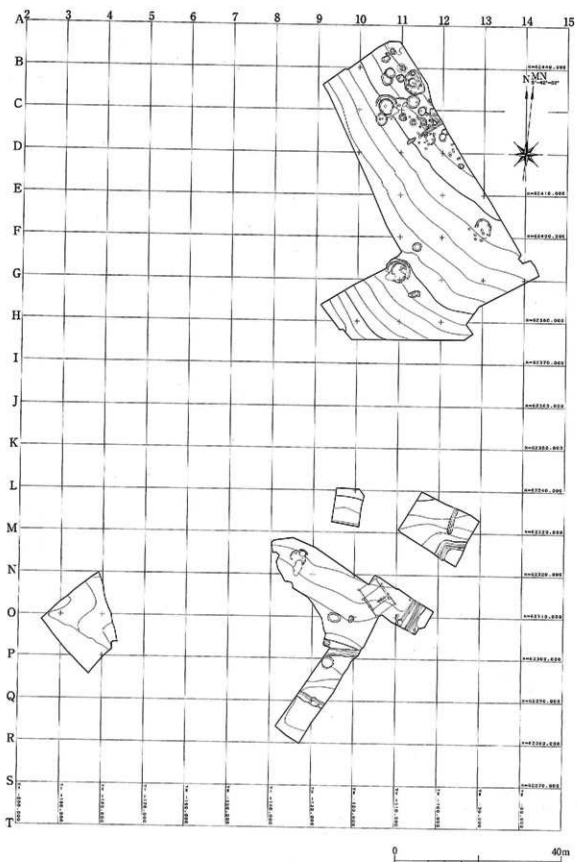
各時代の遺構は、表土(Ⅰ層)を除去したローム層(Ⅱ層)上面で検出が可能であった。



第5図 調査区周辺の地形図 (1/2,000)



第6図 地質柱状図 (垂直1/400)



第7図 遺跡全体図 (1/900)

第Ⅳ章 遺構と遺物

第1節 縄文時代

縄文時代中期の集落跡を主体に検出されている。遺構は、竪穴住居跡10軒、焼土跡1基、土坑32基、遺物集中地点1か所である。出土遺物は、中期中葉から後葉のものが大半を占めるが、これにわずかながら早期、前期前半、中期前葉の遺物が加わる。遺構と遺物の分布は、大まかに台地頂部付近（北側調査区）と南西側裾部（南側調査区）の2地点に分かれるが、数量的には前者が圧倒的である。

A. 竪穴住居跡

SI01（第10図、P.L3・15）

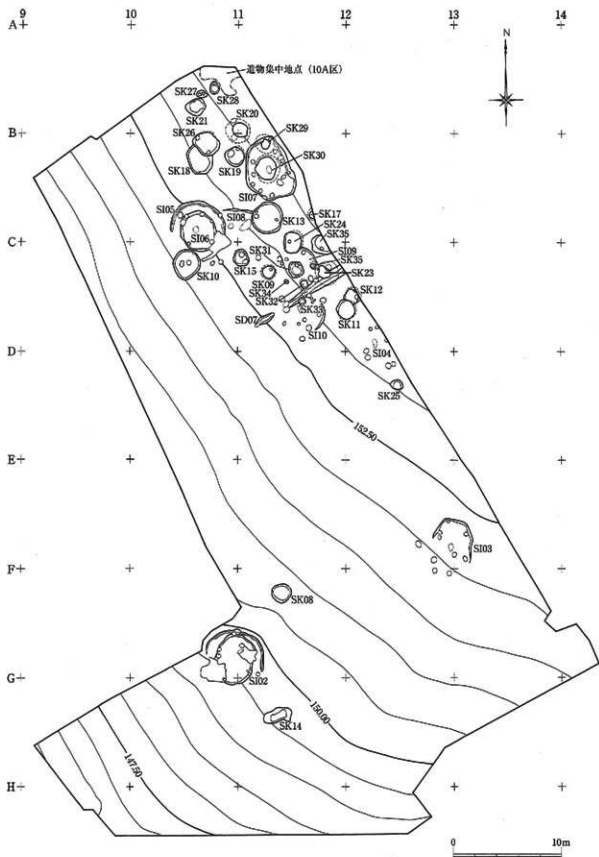
南側調査区の8M区に位置し、勾配6.0°の緩斜面上に構築される。南西側約1/3は削平されてすでに遺存しない。隅丸方形を呈するもので、北東側（山側）には壁から0.50～0.70m離れて弧状の溝が併走する。後述するSI02と同様、いわゆる二段床構造〔今橋1985〕をもつ住居跡の可能性が高い。風倒木による擾乱が2か所あり、遺構の全貌は明らかでないが、残存する下位床面の規模は、長さ3.58m×短径（2.15）m、深さ0～0.29mである。柱穴は下位床面からP1～4が検出されている。擾乱によって南側の柱穴が失われているが、基本的に方形配列された4本柱であったと推測される。炉は検出されていない。覆土は鹿沼軽石（Kanuma Pumice、以下KP）のブロックを含む黒褐色土の単層で、焼土や灰、炭化木片などの混入はみとめられなかった。遺物は、覆土中からわずかに後述するⅣ期の土器（1～4）が出土している。ほかにチャートの剥片1点がある。

1は深鉢の口縁部で、口唇部直下の隆帯上には細い竹管状工具による円形の刺突文列が施される。2は胴部で、円形の刺突文列をともなう隆帯上には単節縄文が施される。1・2は同一個体と思われる。3・4は沈線による鋸歯状文が描かれる。4は地文に単節縄文が施されるもので、胎土に雲母片を含む。

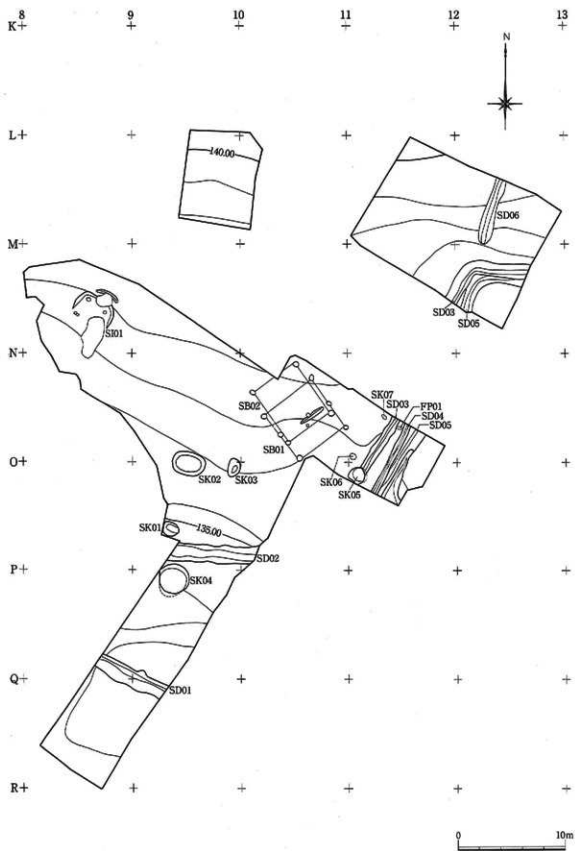
SI02（第11・12図、P.L3・15）

北側調査区の10F・11F区に位置し、勾配9.0°の斜面上に構築される。壁および床面が2段検出されており、いわゆる二段床構造を有する住居跡と考えられる。上位床面は、南側約1/2がすでに削平されて遺存しないが、平面形はおおむね円形を呈するものと思われる。残存する規模は、東西5.20m、深さ0～0.25mである。壁際には、幅0.12～0.25m、深さ0.05～0.09mの溝が断続的にめぐっている。床面の幅は0.10～1.00mと同様でなく、北側が狭く東側と西側が幅広となる。下位床面は、南北に長い楕円形を呈しており、規模は長さ4.35m×短径3.15m、深さ0.05～0.19mである。柱穴は下位床面からP1～5、上位床面からP6・7が検出されている。それぞれの規模と配置状況からみて、基本的に下位床面の壁際に方形配列されたP1～4もしくはP1～3・5からなる4本柱であったと推測される。明瞭なかたちでの炉は検出されていないが、下位床面の北東側、P1に近接した位置から焼土跡が1か所検出されている。位置的に偏っており、掘り窠みがほとんどなく被熱の度合いもわずかであることから、日常的に使用される地床炉とはやや異なる印象がある。覆土はローム粒子を多く含む黒褐色土の単層である。遺物は、覆土中からⅣ期の土器（1～14）と石器（15～18）が出土している。ほかに剥片4点（チャート2点、瑪瑙1点、頁岩1点）がある。

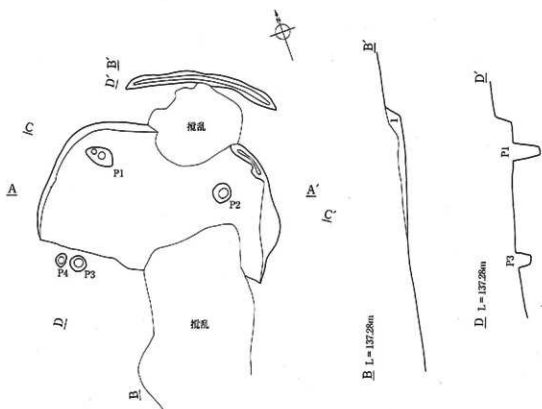
1は深鉢の波頂部で、隆帯上には単節縄文が施される。2は口唇部直下に交互刺突文が施される。3は平行沈線によって文様が描出される。4は沈線をともなう隆帯と重畳する沈線による鋸歯状文によって文様



第8図 北側調査区遺構配置図 (1/350)



第9図 中央・南側調査区遺構配置図 (1/350)



A L = 137.28m

A'



SI01

1. 三層土: KP77077 (44-250) 5R.

C L = 137.28m

C'

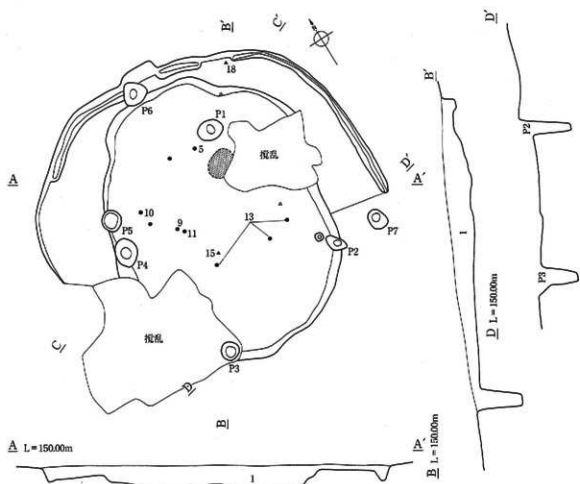


0 (1/60) 2m

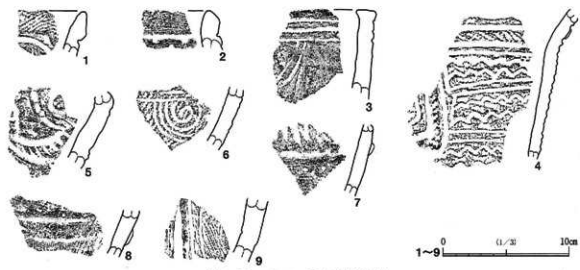


0 (1/3) 10cm

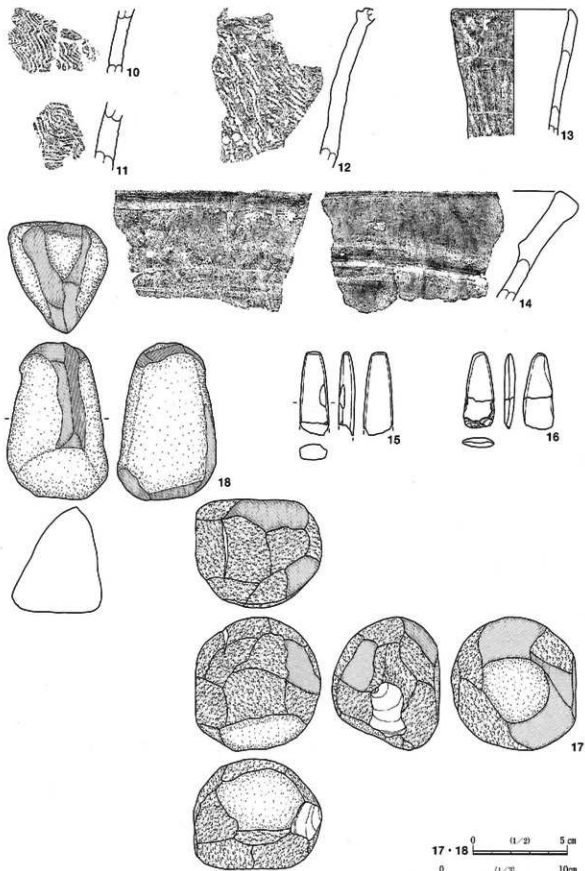
第10圖 SI01・同出土遺物



SI02
1. 栗褐色土 0-2枚? (41-2m) 多数。



第11图 SI02・同出土遺物(1)



第12図 SI02出土遺物(2)

が構成される。単節縄文を地文とし、隆帯上にも施文される。5は2本一組の沈線によって曲線のな文様が描かれ、刻み目と刺突文によって加飾される。6は3本一組の沈線によって渦巻状の文様が描出される。7・8は横位にめぐる隆帯が付される。7は隆帯の片側に単独で刺突されたC字爪形文列をとまう。8は隆帯下に複数並列された平行沈線が施される。9も同様の平行沈線が施されるもので、沈線により背を二分された低い隆帯が垂下する。隆帯には平行沈線がともなう。10・11は櫛歯状工具による曲線文が垂下する。12は原体不明の縄文が縦方向に回転施文される。13は小形の深鉢である。いわゆるコップ形を呈するもので、体部は無文である。14は浅鉢で、口縁部内面に段を有する。4・14は雲母片、9・13は赤褐色粒を胎土に含む。

15・16は小形の磨製石斧である。15は典型的な定角式の形状をもつもので、刃部を欠損する。細粒砂岩製。16は断面形が薄く扁平なもので、刃縁を欠損する。蛇紋岩製。17は磨石と敲石の複合したものである。球形に近い多面体を呈するもので、表皮が残る一部を除いて、ほぼ全面に磨面もしくは敲打面がみとめられる。石材はアイサイト（石英安山岩）。18は磨石である。三角柱状を呈するもので、稜角の部分を実定的に使用している。このうち正面中央の稜角については、左右両面から磨っており、結果として鈍い刃部らしきものが整形されているが、刃部としての使用痕はみとめられない。石材は安山岩。

SI03（第13図、P.L3・15）

北側調査区のE12・E13区に位置し、勾配5.0°の緩斜面上に構築される。南西側約1/2は削平されてすでに遺存しない。不整形円形を呈するもので、掘り込みは浅い。残存する床面の規模は、長径（2.90）m×短径（3.50）m、深さ0～0.11mである。柱穴はP1～8が壁際にめぐり、このうち六角形に配されたP1～3・5・7・8の6本が基本となるものと思われる。地床炉は床面のほぼ中央から検出されている。掘り込みは浅い。遺物は、覆土中からわずかに中期の土器（1～4）が出土している。ほかにチャートの剥片2点、自然石14点（総重量0.27kg）がある。

1は深鉢の胴部で、沈線をとまう細く低い隆帯が施される。2は細く低い隆帯が付される。3は単節縄文が施文される。4は底部で、底面にはわずかに網代痕が残る。3は胎土に赤褐色粒を含む。

SI04（第14図、P.L3・15）

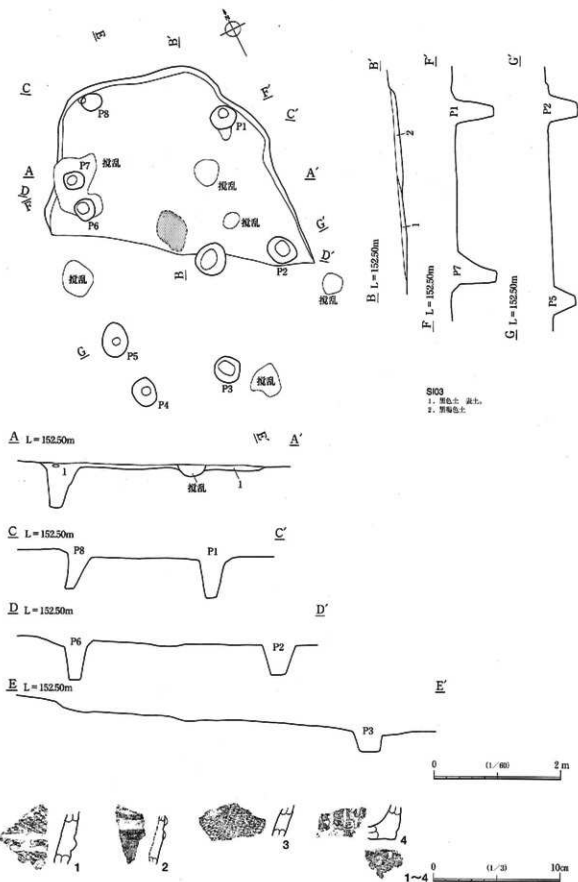
北側調査区の12C区に位置し、勾配6.0°の緩斜面上に構築される。北東側約1/3は調査区外となる。掘り込みの浅いもので壁と床面の大半はすでに失われている。柱穴はP1～7が検出されているが、配列は不明である。柱穴の内側から掘り込みの浅い地床炉が検出されている。遺物は、IV期の土器（1～3）と石器（4・5）が出土している。ほかに重さ55.00kgの大粒の石を含む自然石4点（総重量55.53kg）がある。

1は口縁部文様帯に沈線による横長の長方形区画をもつもので、区画内には角張った渦巻文が配される。2は刻み目をとまう半隆起線によって文様が描出される。3は小波状口縁となる浅鉢で、口唇部の頂部には深く深い沈線によって渦巻文が施される。赤彩がみとめられる。3は胎土に赤褐色粒を含む。

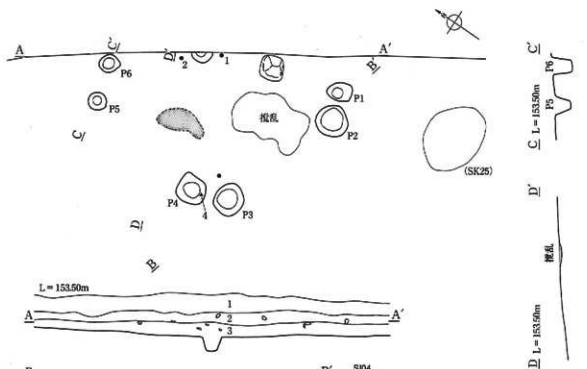
4は定角式磨製石斧で、基部を欠損する。砂岩製。5は磨石である。稜角の部分を実定的に使用している。石材は石英。

SI05（第15図、P.L3・16）

北側調査区の10B区に位置し、勾配7.5°の緩斜面上に構築される。SI06と重複してこれを切る。南西側約2/3はすでに削平されて遺存しないが、おおむね南北に長い楕円形を呈するものと思われる。残存する壁高は0～0.24mである。柱穴はP1～6が検出されているが、基本的に方形配列された4本柱であったと推測される。地床炉は中央やや北西寄りに位置する。遺物は、覆土中からIV期の土器（1～3）と石器（4）が少量出土



第13图 SI03・同出土遺物



B L = 153.50m

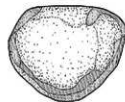
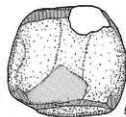
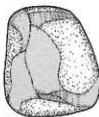
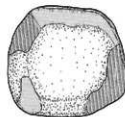
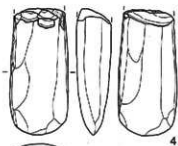


B'

SI04

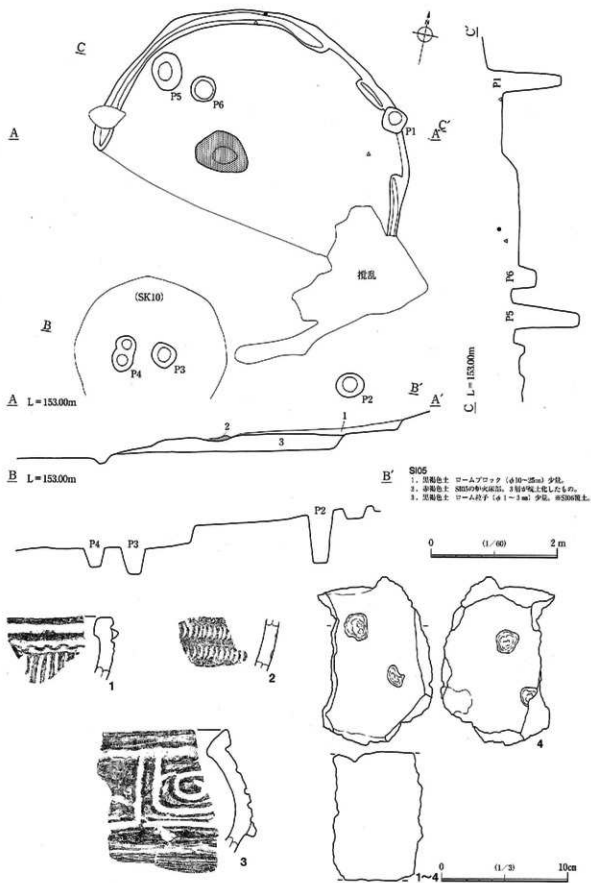
1. 原土上 炭土。
2. 原土上 炭土。炭土層下の原土中。
3. 原土上 炭土層下 (約 2~4m) 少炭。

0 (1/60) 2m

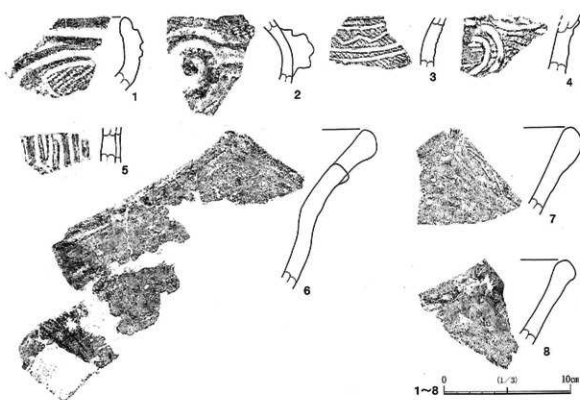
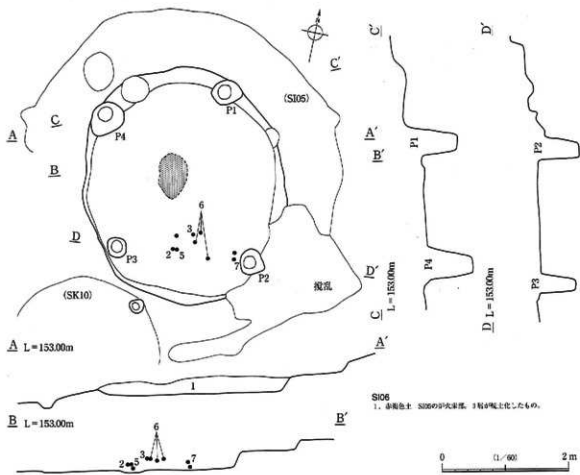


0 (1/25) 5cm
0 (1/35) 10cm

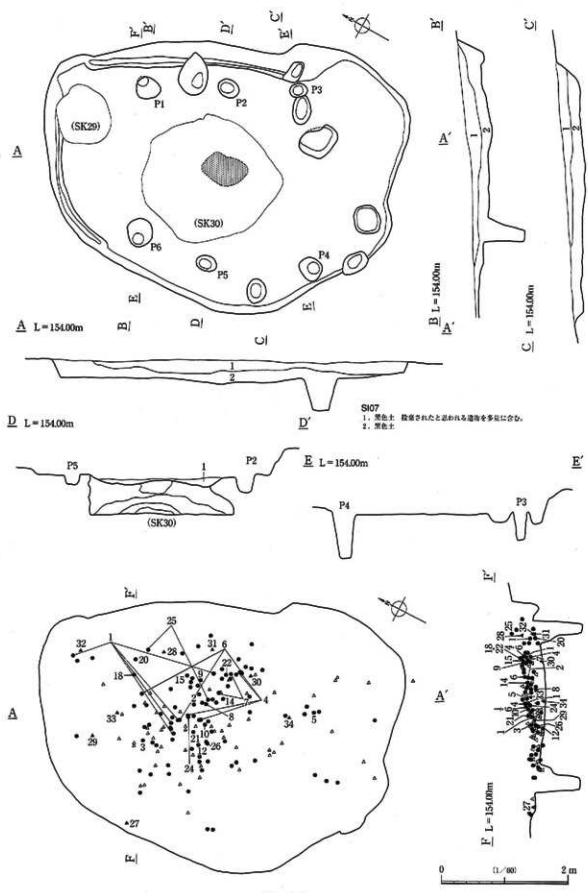
第14図 SI04・同出土遺物



第15図 SI05・同出土遺物



第16図 SI06・同出土遺物



第17図 S107

している。ほかに自然石44点（総重量122kg）がある。

1は深鉢で、口唇部直下には交互刺突文が施文され、その直下には縦線沈線が施文される。2はC字爪形文列が施文される。3は口縁部文様帯には沈線による横長の長方形区画が施され、区画内には角張った渦巻文が配される。3は胎土に雲母片を含む。

4は凹石である。大半を欠損するが、正裏面に凹痕がみとめられる。安山岩製。

SI06（第16図、P L 4・16）

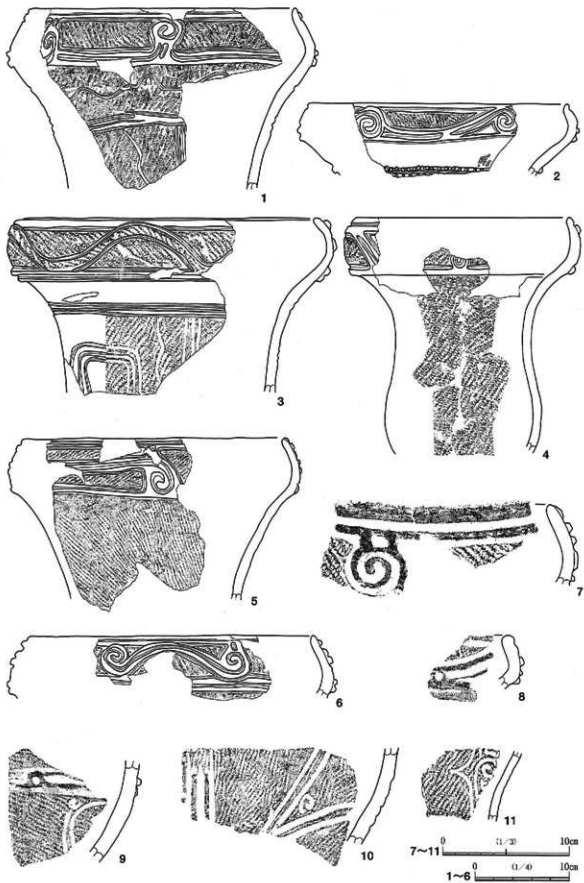
北側調査区の10B区に位置し、勾配7.5°の緩斜面上に構築される。遺構上部はすでにSI05に切られているため遺存しない。南北にやや長い楕円形を呈する。床面の規模は、長径3.40m×短径3.00m、深さ0.08～0.25mである。柱穴は壁際からP1～4が検出されており、台形状に方形配列される。地床炉はほぼ中央に位置する。遺物は、覆土中からⅣ・Ⅴ期の土器（1～8）が出土している。ほかにチャートの剥片1点、自然石45点（総重量1.10kg）がある。なお、南東側は風倒木による擾乱の影響を受けており、遺構内出土遺物としたものに一部混乱が生じている可能性がある。

1は深鉢で、口縁部文様帯は沈線により背を二分された隆帯によって文様が描出される。2はボタン状に突出した渦巻文が貼り付けられる。3は沈線による鋸歯状文が描かれる。4は2本一組の沈線によって曲線的な文様が描出される。5は器面全体に隙間なく半隆起線文が施されるもので馬高系の土器と思われる。6～8は波状口縁となる無文の浅鉢である。6～8は雲母片、4は雲母片と赤褐色色粒を胎土に含む。

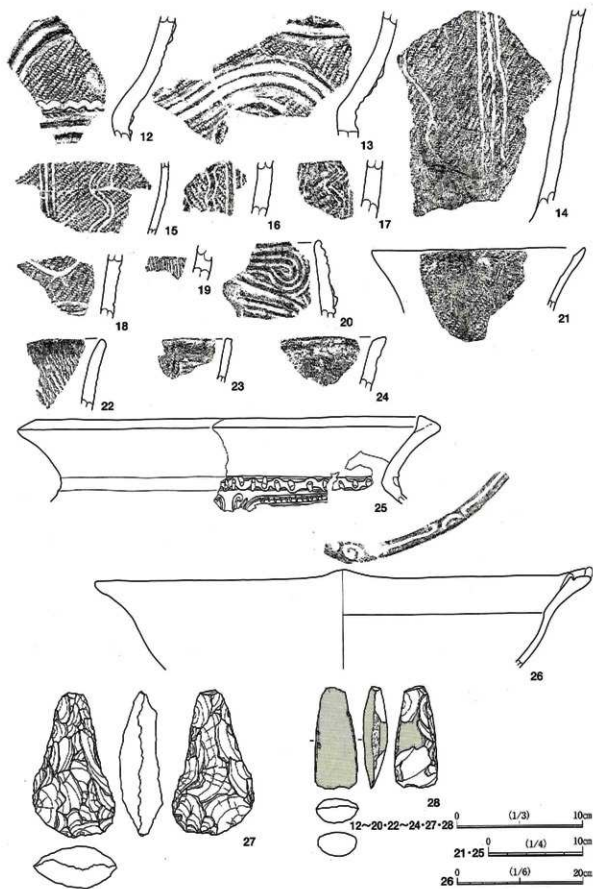
SI07（第17～20図、P L 4・5・16～18）

北側調査区の11B区に位置し、勾配4.5°の緩斜面上に構築される。SK29・30と重複してこれを切る。南北に長い不整楕円形を呈するもので、南東側と北東側にはそれぞれ大小の張り出し部のようなものがみとめられる。床面の規模は、長径5.35m×短径3.70m、深さ0.08～0.58mである。住居内のピットは壁際を中心に13基検出されており、このうち上層構造に関係すると思われるものはP1～6である。P1・3・4・6は掘り込みの深いしっかりしたもので、基本的にこの4本による方形配列であったと推測される。P2・5は各柱間に位置しており、掘り込みは浅い。地床炉はほぼ中央に位置している。掘り込みは浅いが、被熱痕は顕著である。なお、地床炉周囲の床面は一段低く陥没してみられるが、床面下に存在するSK30の覆土が、居住にともなう踏み締まったものと考えられる。遺物は、覆土中からⅤ期を主体とする土器（1～26）と石器（27～34）が多量に出土している。ほかに剥片10点（チャート4点、瑪瑙2点、玉髓1点、鉄石英1点、頁岩2点、安山岩1点、凝灰岩1点）、重さ25.00kgと48.00kgの大粒の石2点を含む自然石297点（総重量100.10kg）がある。

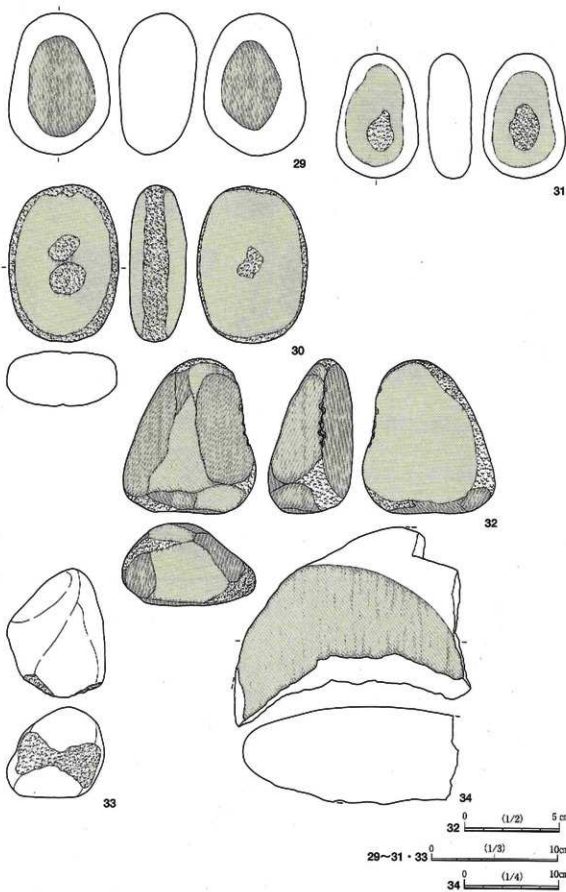
1～7はキャリパー形を呈する深鉢である。1～3は胴部に区画帯を有する。1は地文である0段多条の単節RL縄文の上から沈線による鋸歯状文が描かれる。2・3は無文帯となるが、このうち2はいったん施文された縄文を磨り消したものである。胴部との区画には、1・3は3本一組の沈線が、2は円形の刺突文列をともなう細い隆帯が配される。1・2・4～7の口縁部文様帯には、沈線により背を二分された隆帯によって渦巻状の文様が描かれる。3は縄文が施された隆帯によって波状文が描出される。いずれも隆帯には沈線がともなう。1・5・6は0段多条の単節縄文を地文とする。1～3・5・6は赤褐色色粒を、4・7は凝灰岩粒を胎土に含む。8～10は同一個体の可能性がある。沈線をとともなう2本一組の細い隆帯と2本一組の沈線によって文様が描出される。隆帯には小さな円形刺突文が、沈線には渦巻文がともなう。胎土に赤褐色色粒を含む。11は沈線によって刺突文が付加された渦巻文が描かれる。12・13は同一個体の可能性がある。3本一組の細い隆帯によって曲線的な文様が描かれ、12には沈線による鋸歯状文がみられる。14・15は胴部に3本一組の沈線が垂下す



第18図 SI07出土遺物(1)



第19図 SI07出土遺物(2)



第20図 SI07出土遺物(3)

る。16・17は、14・15とはほぼ同様の文様が平行沈線によって施される。18は沈線による曲線文が描かれる。胎土に赤褐色粒を含む。14・18は0段多条の単節縄文を地文とする。19は櫛歯状工具による条痕文が施される。20は半隆起線によって渦巻状の文様が描かれるもので、複弧文土器と思われる。胎土に赤褐色粒を含む。21～24は粗製土器と思われる一群である。21・23は単節縄文、22は原体不明の縄文が施文され、24は無文である。23は雲母片を、24は赤褐色粒を胎土に含む。25は鉢と思われる。口縁部は無文で、頸部には交互刺突文が施される。直下の胴部上半には、刻み目をともなう2本一組の沈線によって文様が描出される。胎土に赤褐色粒を含む。26は小波状口縁となる浅鉢で、口縁部内面は有段となる。幅広の口唇部には、太く深い沈線によって渦巻文と「U」字状文が配され、その間を細長い「S」字状文が連結している。赤彩がみとめられる。

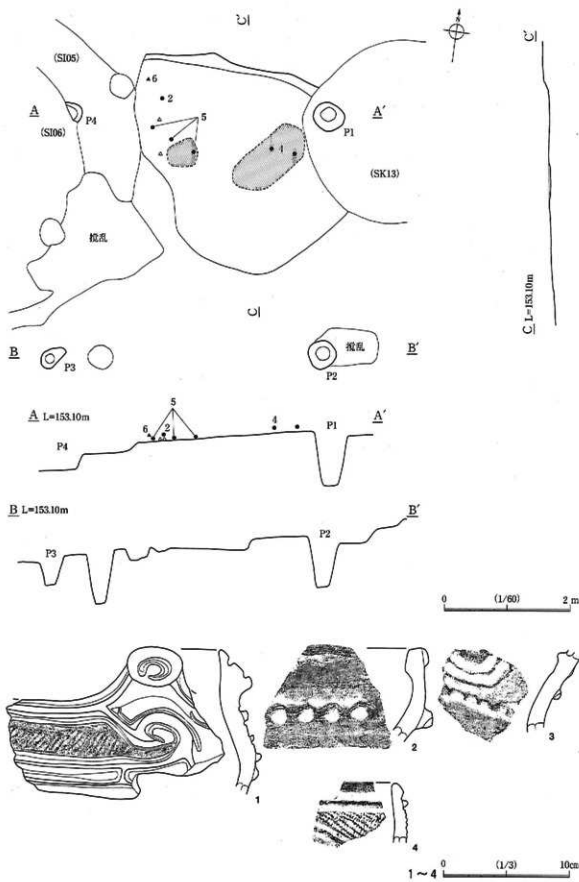
27は楕形の打製石斧である。厚みのある剥片を素材とする。偏刃となるもので、刃部調整は粗い。未製品の可能性がある。頁岩製。28は小形の磨製石斧である。裏面の一部に素材剥離面が残り、両側縁に敲打痕がみとめられるもので未製品である。正面全体に不自然で顕著な磨痕がみとめられることから、破損した磨石類から素材剥片を得ている可能性が考えられる。砂岩製。29は磨石である。正裏面に磨痕がみとめられる。安山岩製。30～32は磨石と敲石の複合したものである。30は正裏面に磨痕と敲打痕がみとめられる。安山岩製。31は正裏面に磨痕と敲打痕、側縁全周に敲打痕がみとめられる。砂岩製。32はやや特殊で、多面的に複数の磨面と敲打面をもつ。磨面は、面積が広く面をなす部分と狭い稜部の使用とに分けられる。このうち広く面をなす部分については、いずれも曲面的にわずかに凹んだ状況で摩耗している。刃縁には使用によると思われる微細な剥離がみとめられる。敲打痕は稜部に限定的である。石材は安山岩。33は敲石である。下端の稜部に敲打痕がみとめられる。花崗岩製。34は台石である。弱い凸面上には広範囲に磨痕がみとめられる。大半を欠損する。凝灰岩製。

SI08 (第21・22図、P L 5・18)

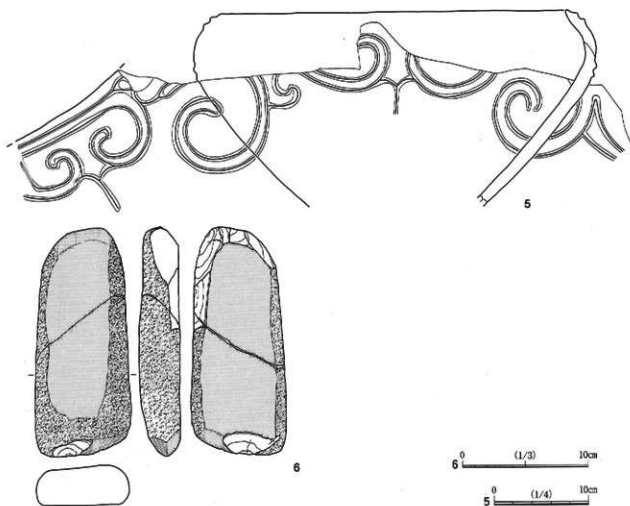
北側調査区の10B・11B区に位置し、勾配7.0°の緩斜面上に構築される。SI05・06、SK13・15・16と重複するが、掘り込みが浅いため、切り合い関係については明瞭に確認できなかった。北側の壁と床面の一部が遺存するのみで、大半はすでに削平を受けて失われている。平面形状は不明である。残存する北側の壁高は0～0.08mである。柱穴は方形配列を基本としてみた場合、図示したP1～4が該当するものと思われる。地床炉は北側から2か所検出されているが、ともに掘り込みの浅いものである。遺物は、IV期を主体とする土器(1～5)と石器(6)が出土している。ほかに重さ57.00kgの大粒の石を含む自然石5点(総重量57.32kg)がある。

1は把手が付く深鉢の口縁部である。把手頂部には沈線による渦巻文が施され、直下の口縁部文様帯には沈線をとまう隆帯によって同じ渦巻文が配される。2・3は隆帯上に指頭圧痕文が施されるものである。2は胎土に赤褐色粒を含む。4は沈線をとまう隆帯によって文様が描出される。5は波状口縁となる浅鉢である。2本一組の細い隆帯によって渦巻状の文様と小さく「Y」字状に垂下する文様が描出される。

6は磨石と敲石の複合したものである。磨面は正裏面と下端にみとめられる。このうち下端については正裏面からそれぞれ斜めに磨っており、結果として鈍角な刃部らしきものが作出されている。刃縁には加撃による剥離がみとめられる。敲打は側縁を中心に磨面以外の全面に及んでいる。上端の一部を欠損する。石材は砂岩。



第21圖 SI08・同出土遺物(1)

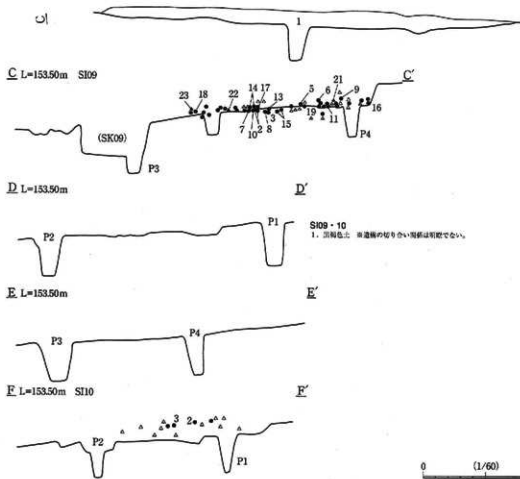
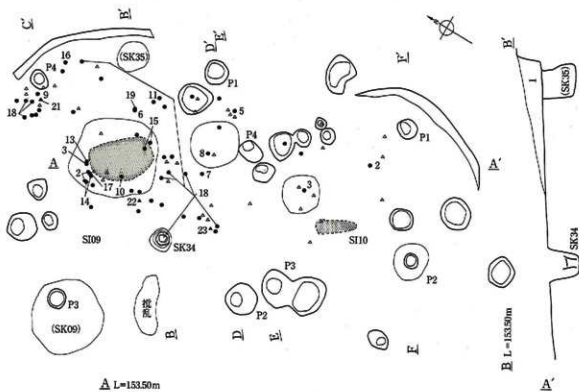


第22図 SI08出土遺物(2)

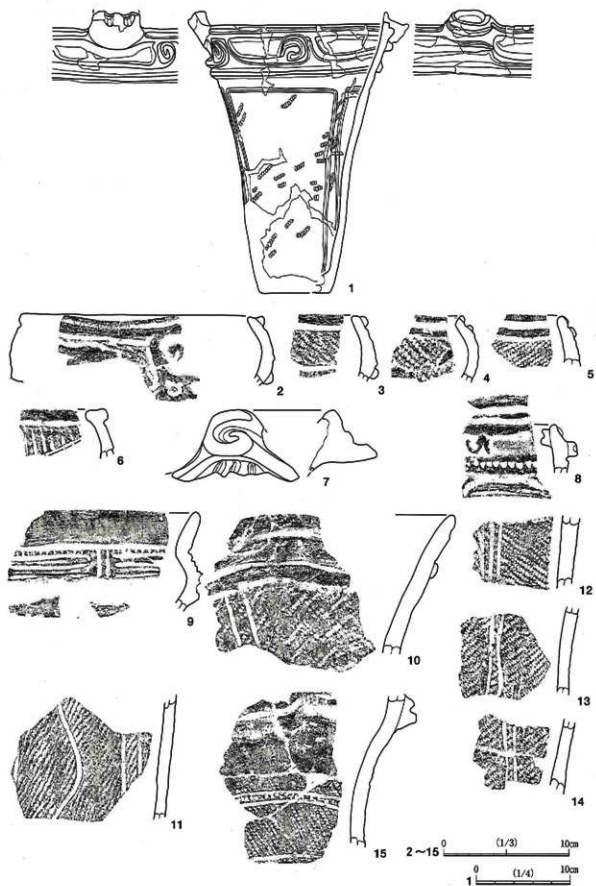
SI09 (第23~25図、PL 5・6・19・20)

北側調査区の11C区に位置し、勾配6.0°の緩斜面上に構築される。SI10をはじめとする複数の遺構と重複するが、切り合い関係からSK09・23・24・31・32・35より新しく、SD07より古いことが判明している。SI10との切り合いについては掘り込みが浅く明瞭にできなかったが、出土遺物からみる限りSI10より新しい遺構であることがわかる。西側約1/2はすでに削平されて遺存しないが、おおむね東西に長い楕円形を呈するものと思われる。残存する東側の壁高は0~0.44mである。柱穴はP1~4が該当するものと思われる。地床が中央やや北東寄りに位置する。掘り窪みは浅く、被熱痕は顕著である。また、SK34は本跡にともなう埋蓋の可能性がある。口縁部と底部が意図的に削り欠かれた深鉢が正位で埋設されており、その上部には鉢の破片が蓋状に覆い被さった状況で検出されている。出土した鉢の破片は、本跡の覆土中から出土した大破片07と接合した。遺物は、V期を主体とする土器(1~18)と石器(19~23)が出土している。ほかに重さ74.00kgの大粒の石1点、15.00kg前後の石3点を含む自然石134点(総重量137.25kg)がある。

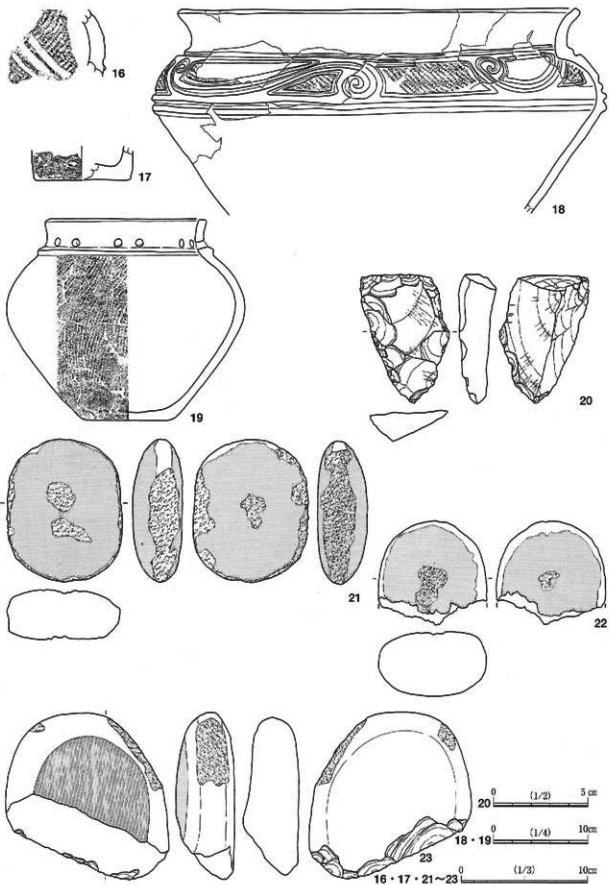
1は2個一對の把手をもつ深鉢である。口縁部文様帯には、沈線をともしない隆帯によって渦巻状の文様が配される。胴部は、縦方向に回転施文された単節RL縄文を地文とし、垂下する2本一組の沈線によって不等幅に4区画される。胎土に赤褐色粒を含む。2・3・5は沈線をともしない隆帯によって文様が描出される。4は地文である単節縄文の上から細い粘土紐を貼り付けて文様とする。6は口縁部文様帯に縦位沈線が



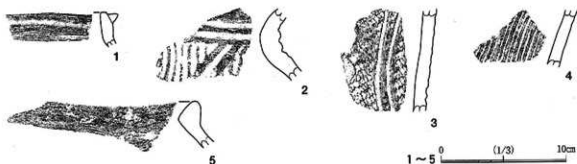
第23図 SI09・10



第24図 SI09出土遺物(1)



第25図 SI09出土遺物(2)



第26図 SI10出土遺物

充填されるようである。7は把手部で、頂部には渦巻文が施される。胎土にわずかに雲母片を含む。8は口唇部直下に細い粘土組による鋸歯状の貼り付け文が配され、その直下にはD字爪形文が施文された断面形状となる隆帯が施される。口唇部には沈線が2条めぐり、胎土に雲母片を含む。9は口縁部無文帯となり、頸部下の肩部に文線帯をもつ。区画と文線は沈線によって描かれ、一部の沈線間には刻み目が施される。10は口縁部が磨り消しの無文帯となる。断面溜鉢状の隆帯によって区画された胴部には2本一組の沈線が垂下する。胎土に赤褐色粒を含む。11~14は胴部に2~3本一組となる沈線が垂下する。11は雲母片、12は赤褐色粒を胎土に含む。15は円形の刺突文列をともなう沈線が横位に施文される。16は沈線をともなう2本一組の細い隆帯が施文される。17は深鉢の底部である。18は鉢である。口縁部と胴部は無文帯となり、頸部下の肩部に文線帯を有する。沈線により背を二分された隆帯によって横「S」字状に連結された渦巻文が描出される。赤彩が施される。胎土に雲母片を含む。19は有孔罎付土器である。胎土に雲母片を含む。

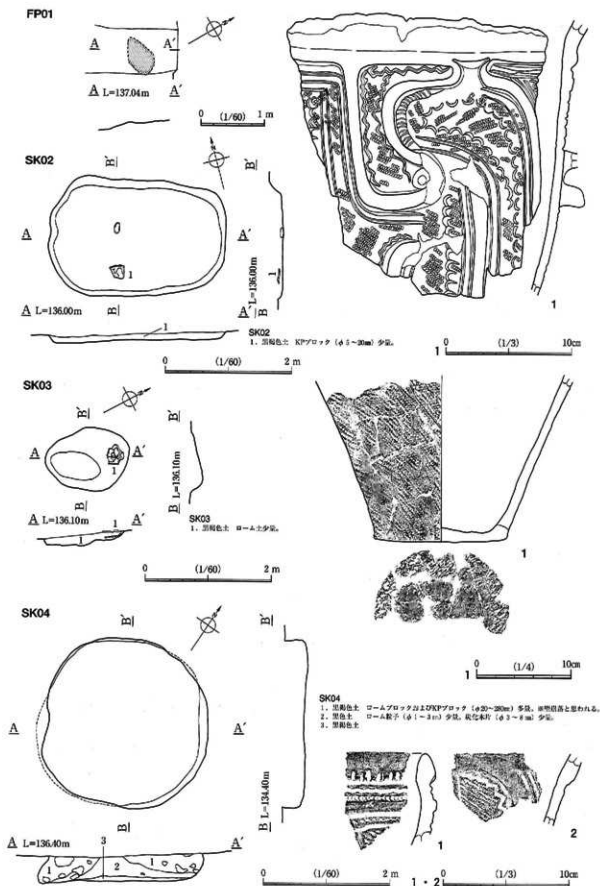
20は不定形石器²⁾である。刃部調整は粗雑であるが、サイド・スクレイパー的な用途が想定される。頁岩製。21~23は磨石と敲石の複合したものである。21は正裏面に磨痕、正裏面中央と上端を除く側縁全周に敲打痕がみとめられる。花崗岩製。22は正裏面に磨痕、正裏面中央に敲打痕がみとめられる。砂岩製。23は正裏面に磨痕、側縁の一部に敲打痕がみとめられる。下端では旧剥離面の鋭利な縁辺をそのまま利用して刃部のな使い方をしている。石材は花崗閃緑岩。

SI10 (第23・26図、P.L6・20)

北側調査区の11C区に位置し、勾配6.0°の緩斜面上に構築される。SI09、SK33、SD07と重複し、これに切られる。西側の大半がすでに削平されて遺存しない状況であり、平面形状については不明である。残存する南東側の壁高は0~0.12mである。柱穴はP1~4が該当すると思われる。掘り窪みの浅い地床炉が中央やや西寄りから検出されている。遺物は、IV期の土器(1~5)がわずかに出土している。ほかに重さ59.00kgの大粒の石を含む自然石39点(総重量67.00kg)がある。

1は深鉢の口縁部で、口唇部直下には断面三角形の隆帯がめぐり、2は縦位沈線が施文される。胎土に海綿骨針を含む。3は平行沈線が施文される。4は櫛歯状工具による条痕文が施文される。胎土に赤褐色粒を含む。5は口縁部が磨り消した器形となるもので無文である。

註1 「剥片を素材とし、二次加工や使用痕が認められ、定形石器でない石器」(高橋・高橋ほか1992)を不定形石器とした。



第27図 FP01・SK02・同出土遺物、SK03・同出土遺物、SK04・同出土遺物(1)

B. 焼土跡

FP01 (第27図、P L 7)

南側調査区の11N区に位置し、SD03とSD04にはさまれるかたちで検出されている。規模は、長径0.62m×短径0.40mである。掘り込みはなく、地山の被熱痕範囲が確認されたのみである。すでに削平されて失われた竪穴住居の地床炉である可能性も検討したが、周囲にはこれに類するような遺構は検出されなかった。出土遺物はない。

C. 土坑

SK02 (第27図、P L 7・20)

南側調査区の9N・9O区に位置する。隅丸長方形を呈し、断面形は浅い皿状となる。底部はほぼ水平で平坦な面をなす。規模は、長径2.80m×短径1.84m、深さ0.26mである。遺物は、Ⅳ期の深鉢(1)と川原石1点(0.75kg)が出土している。

1は深鉢胴部の大破片である。平行沈線をとまう幅広い隆帯が曲線的に垂下し、これにそって沈線による鋸歯状文と単独で刺突されたC字爪形文列、角押文が施文される。そののち、器面上には固く燃った単節LRの縄文が縦方向に回転施文される。縄文原体の幅は約2cmである。胎土に雲母片を含む。

SK03 (第27図、P L 7・20)

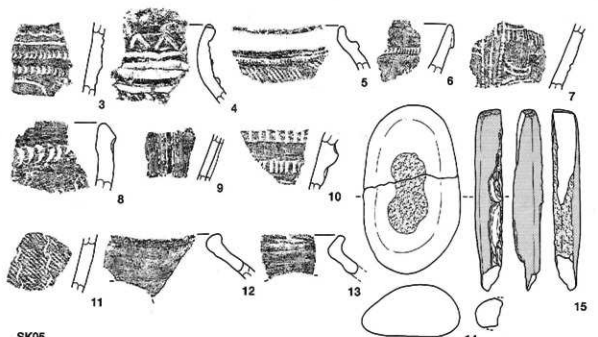
南側調査区の9O区に位置する。不整楕円形を呈し、底部と壁には凹凸が目立つ。規模は、長径1.30m×短径0.97m、深さ0.27mである。遺物は、北東側の底部から揚げたようなかたちで深鉢(1)が1点出土している。

1は深鉢の底部から胴部下半の大破片である。単節LRの縄文を地文とし、底面には網代痕が残る。

SK04 (第27図、P L 7・21)

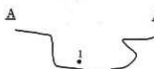
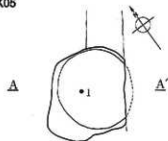
南側調査区の9P区に位置する。上部はすでに削平されて遺存しないが、フラスコ状を呈するものと思われる。規模は、開口部径2.56m×2.43m、底部径2.60m×2.42m、深さ0.47mである。遺物は、覆土中からⅣ期の土器(1~13)と石器(14・15)が出土している。ほかに剥片4点(チャート2点、鉄石英1点、斑瀝岩1点)、自然石1点(2.13kg)がある。

1は深鉢の口縁部で、口唇部直下には刻み目の施された隆帯がめぐり、沈線による鋸歯状文をはさんで、その下には角押文と沈線をとまう隆帯が施される。2は平行沈線と沈線による鋸歯状文をとまう幅広い隆帯が曲線的に垂下するもので、SK02-1に酷似する。3は角押文をとまう隆帯と沈線による鋸歯状文が施文される。4は口唇部に細い粘土粒によって鋸歯状の貼り付け文が施され、直下には沈線による「八」字状の文様が横に連続して施文される。その下には沈線をとまう細い隆帯が2条めぐり、5は胴部上半が内湾して窄まり、口縁部が短く直立する器形となる。口縁部は狭い無文帯となり、直下には角押文をとまう細い隆帯がめぐって胴部文様帯と区画する。6は口唇部直下に角押文をとまう隆帯がめぐり、7は結節沈線によって文様が描出されるもので、刻み目状の刺突文列をとまう。8は口唇部直下に幅広い角押文が施される。9は細い隆帯が垂下するもので、半截竹管状工具を鈍角に使ったと思われる平行する列点状刺突文をとまう。10は幅広い角押文をとまう隆帯が施文される。11はS字結節を有する単節LRの縄文が縦方向に回転施文される。12・13は同一個体と思われる。胴部上半が内湾して窄まり、口縁部が短く外反気味に立ち上がる器形となる。全体の器形は不明ながら、胴部上半に壺状の開口部を有するものようである。



3~15 0 (1/3) 10cm

SK05

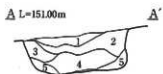
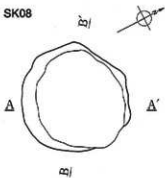


0 (1/60) 2m



1 0 (1/4) 10cm

SK08



A L=151.00m



0 (1/60) 2m

SK08

1. 土製盆土
2. 土製盆土
3. 土製盆土
4. 土製盆土
5. 土製盆土



1・2 0 (1/3) 10cm

第28図 SK04出土遺物(2)、SK05・同出土遺物、SK08・同出土遺物

確認できる部位は無文で、赤彩がみとめられる。砂粒の少ない緻密な胎土で、わずかに雲母片を含む。1・2・5・7・8・11は雲母片、10は雲母片と赤褐色粒、6は海綿骨針を胎土に含む。

14は敲石である。正面中央に敲打痕がみとめられる。安山岩製。15は石棒と思われる。全体に丁寧な研磨が施され、上端部とその周囲の稜角は平坦に面取られる。破損して欠けた部分には敲打痕と剥離がみとめられることから、何らかのかたちで再生を試みたものと考えられる。粘板岩製。

SK05 (第28図、P L 7・21)

南側調査区の110区に位置する。SD03に切られる。フラスコ状を呈するものと思われる。規模は、開口部径1.64m×1.42m、底部径1.28m×1.18m、深さ0.59mである。遺物は、覆土中からⅣ期の浅鉢1が1点出土している。ほかに自然石30点(1.82kg)がある。

1は浅鉢の底部である。胎土に多量の雲母片を含む。

SK06 (第28図、P L 7・21)

北側調査区の11F区に位置する。円形を呈するもので、壁は一部内湾して立ち上がる。規模は、開口部径1.72m×1.70m、底部径1.62m×1.36m、深さ0.66mである。遺物は、覆土中からわずかにⅣ期の土器(1・2)が出土している。ほかにチャートの剥片1点、自然石17点(0.15kg)がある。

1は深鉢の口縁部で、口唇部には沈線が1条めぐる。2は沈線と0段多条の単節縄文がみとめられる。1は胎土に赤褐色粒を含む。

SK09 (第29図、P L 8・21)

北側調査区の11C区に位置する。SI09に切られる。底部北東側のピットはSI09の柱穴(P3)である。フラスコ状を呈するものと思われる。規模は、開口部径1.14m×1.00m、底部径1.28m×1.14m、深さ0.54mである。遺物は、底部付近からⅣ期の土器(1~4)が出土している。ほかにチャートの剥片1点、自然石32点(2.55kg)がある。

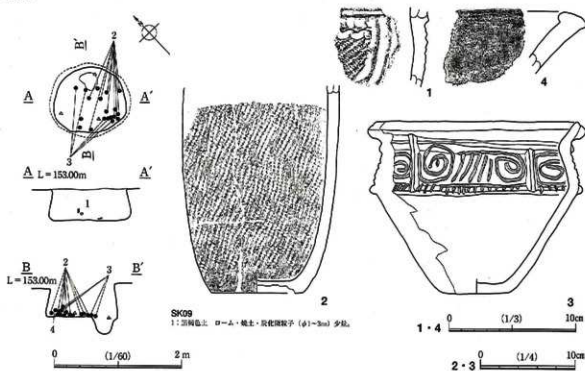
1は深鉢の胴部である。沈線と角押文をともなう隆帯が施文され、沈線による鋸歯状文が一部併走してみられる。2は底部から胴部の大破片で、単節RLの縄文が施文される。3は鉢である。口縁部は狭い無文帯となり、頸部直下の肩部に文様帯を有するもので、刻み目が施された断面三角形の隆帯によって胴部無文帯とを区画している。文様帯は縦位の隆帯によって横長の長方形に区画される。その中には沈線による渦巻文が2個づつ配され、その間を4本の縦位沈線が埋めるかたちとなる。4は浅鉢の口縁部で、赤彩がみとめられる。2~4は胎土に赤褐色粒を含む。

SK10 (第29図、P L 8・21)

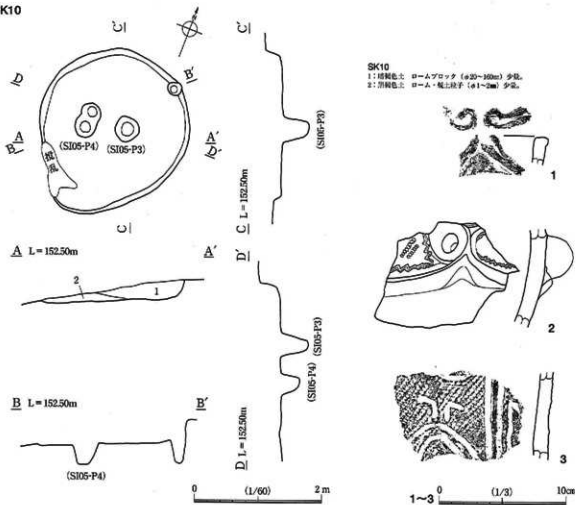
北側調査区の11G区に位置する。ほぼ円形を呈するが、掘り込みが浅いため断面形は明瞭でない。底部は平坦である。規模は、開口部径2.68m×2.36m、底部径2.54m×2.22m、深さ0.39mである。切り合い関係は不明であるが、底部中央にSI05の柱穴(P2・3)が存在する。遺物は、Ⅳ期の土器(1~3)が出土している。ほかに自然石6点(0.76kg)がある。

1は深鉢の波頂部である。2は胴部で、沈線による鋸歯状文をともなう隆帯が施文されており、屈曲部では一部環状をなす。3は沈線をともなう細い隆帯と2本一組の沈線によって文様が描出される。3は胎土に雲母片を含む。

SK09

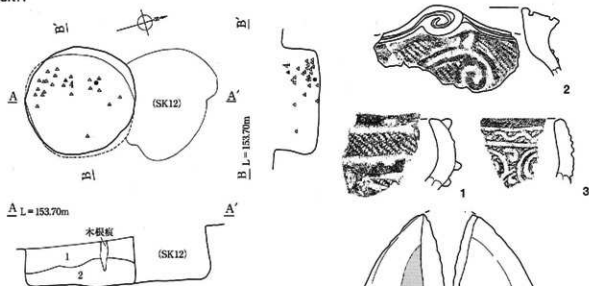


SK10



第29図 SK09・同出土遺物、SK10・同出土遺物

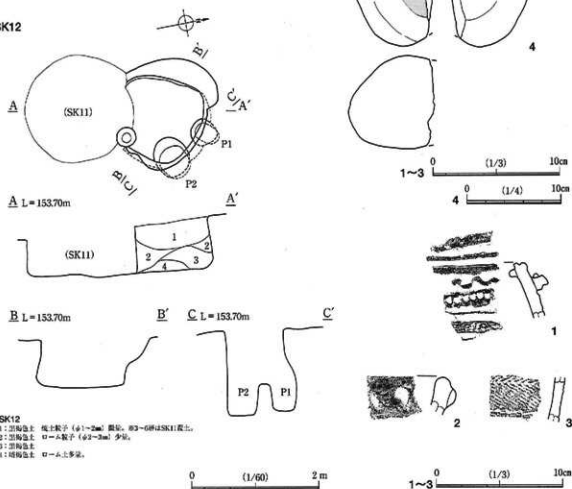
SK11



SK11

1: 土塊出土。下段から段々の石が多数に出土。厚1・2cm(SK11)出土。
2: 土塊出土。ローム状の石 (φ2-3cm) 多数。

SK12

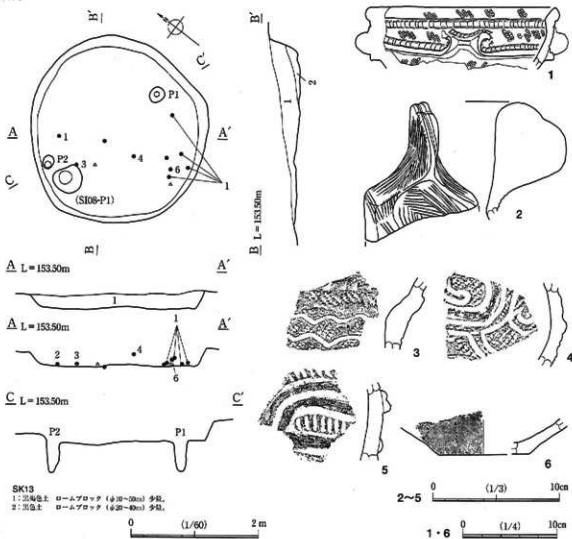


SK12

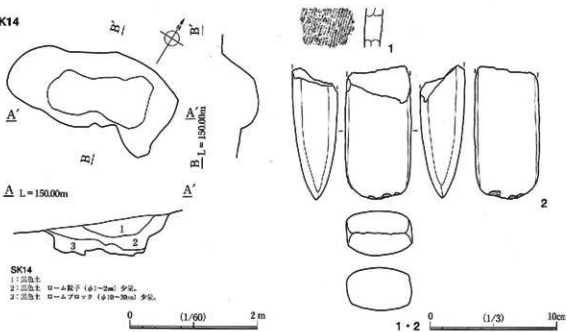
1: 土塊出土。板土敷子 (φ1-2cm) 散見。厚3-6mm(SK11)出土。
2: 土塊出土。ローム敷子 (φ2-3cm) 少見。
3: 土塊出土。
4: 土塊出土。ローム土多数。

第30図 SK11・同出土遺物、SK12・同出土遺物

SK13



SK14



第31図 SK13・同出土遺物、SK14・同出土遺物

SK11 (第30図、P L 8・22)

北側調査区の12C区に位置する。SK12を切る。円形を呈するもので、壁はわずかに内傾して立ち上がる。規模は、開口部径1.76m×1.62m、底部径1.78m×1.56m、深さ0.76mである。遺物は、V期の土器(1~3)と石器(4)が出土している。ほかに自然石54点(19.85kg)がある。

1は深鉢の口縁部で、キャリパー形を呈すると思われる。口唇部には沈線が1条めぐり、直下には沈線をとまなう隆帯が施される。2は口縁部に小突起をもつもので、突起頂部には渦巻文が施文される。胴部は0段多条の単節縄文を地文とし、2本一組の細い粘土粗によって渦巻状の貼り付け文が施文される。3は沈線によって鋸歯状文や渦巻文などが描出される。1~3は胎土に赤褐色粒を含む。

4は石皿と凹石が複合したものである。正面には磨痕、裏面に凹痕がみとめられる。大半が欠損しているため状況は不明であるが、磨痕はほぼ平坦な面をなす。安山岩製。

SK12 (第30図、P L 8・22)

北側調査区の12C区に位置する。SI11に切られる。やや角張った円形を呈するもので、壁は内傾して立ち上がる。フラスコ状であった可能性が高い。規模は、開口部径1.72m×(1.14)m、底部径1.34m×(1.22)m、深さ0.90mである。底部には小ビットが3か所あり、このうちP1・2は外側へ向かってやや斜めに掘り込まれる。P1は開口部径0.40m×0.40m、深さ0.32m、P2は開口部径0.62m×0.52m、深さ0.44m、P3は開口部径0.30m×0.30m、深さ0.28mである。遺物は、IV期を主体とする土器(1~3)が出土している。ほかに黒曜石の剥片1点、自然石8点(0.52kg)がある。

1は深鉢の口縁部で、口唇部直下には細い粘土粒による鋸歯状の貼り付け文が配され、その下にはD字爪形文が施文された断面方形の隆帯が施される。口唇部には沈線が2条めぐり、SI09-8と酷似する。2は口縁部で、口唇部直下には指頭丘痕文が施された隆帯がめぐり、3は胴部片で、結束(第1種)された原体によって羽状縄文が表現される。前期の羽状縄文系土器と思われるが、胎土に繊維はみとめられない。1・2は胎土に雲母片を含む。

SK13 (第31図、P L 8・22)

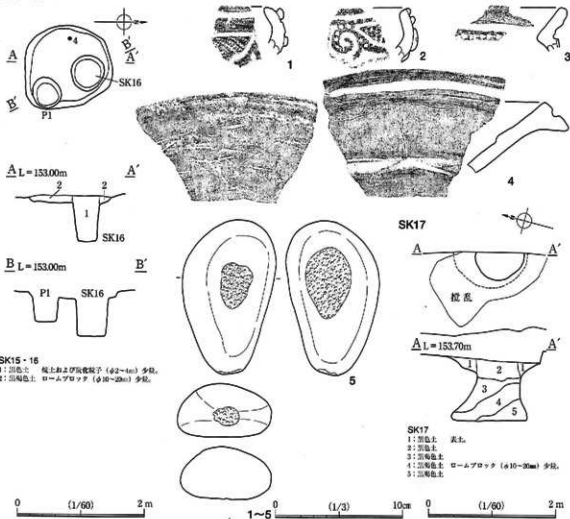
北側調査区の11B区に位置する。SI08に切られる。規模は開口部径2.94m×2.82m、底部径2.64m×2.56m、深さ0.45mである。底部には小ビットが2か所あり、P1は開口部径0.26m×0.20m、深さ0.50m、P2は開口部径0.20m×0.16m、深さ0.54mである。遺物は、V期の土器(1~6)が出土している。ほかに自然石56点(3.29kg)がある。

1は深鉢の口縁部である。口縁部文様帯は上下を角押文をとまなう隆帯によって区画され、内部は同隆帯から連続する渦巻状の小突起によって4単位に区画される。器面全体に単節縄文が施文される。2は波頂部である。台形状の波頂部にハート形を呈する板状の突起が斜めに付く。木口状工具による条痕文が施される。3は角押文をとまなう隆帯と沈線による鋸歯状文が施文される。隆帯上には縄文が施される。4は沈線をとまなう隆帯と2本一組の沈線によって曲線状の文様が描出される。5は沈線により背が二分された隆帯によって文様が描出されるもので、空間には縦位沈線が充填される。6は浅鉢の底部である。1・2は赤褐色粒、3・4は雲母片を胎土に含む。

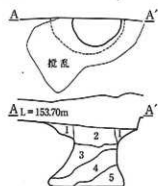
SK14 (第31図、P L 8)

北側調査区の10C区に位置する。大きな風倒木跡の上に構築されたもので、不整形楕円形を呈する。底部および壁は不整形である。規模は、開口部径2.70m×1.34m、底部径1.60m×0.82m、深さ0.65mである。遺物

SK15・16



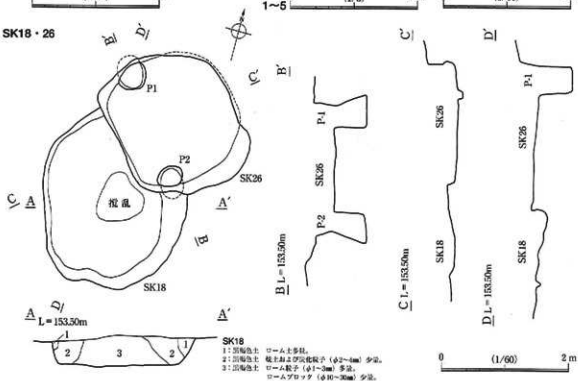
SK17



SK17

- 1: 赤色土 表土。
2: 赤色土
3: 赤褐色土
4: 赤褐色土 ロームブロック (φ10~20m) 少量。
5: 赤褐色土

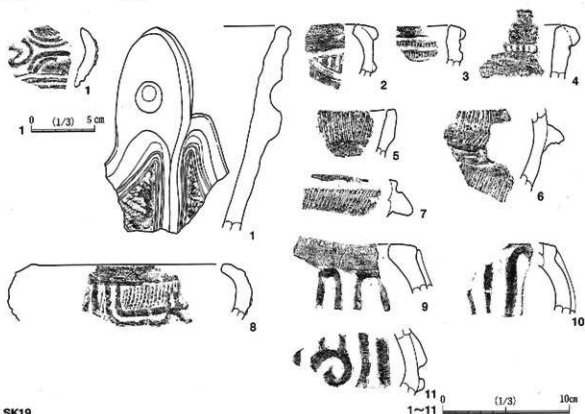
SK18・26



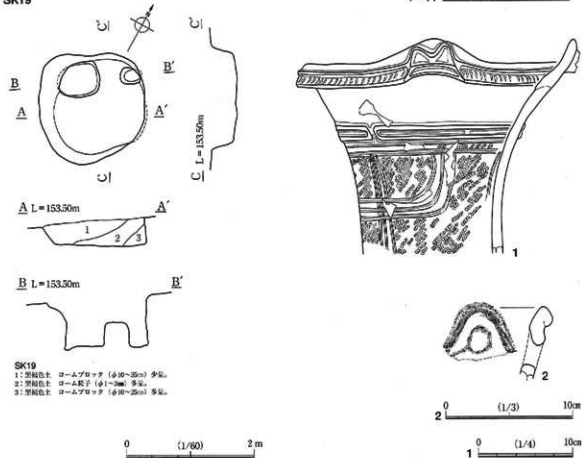
第32図 SK15・SK16、SK15出土遺物、SK17・SK18・26

SK18

SK26



SK19



SK19

1: 螺殻断面 コームアロワツ (φ10~25cm) 少量。
 2: 螺殻断面 コームアロワツ (φ1~3cm) 少量。
 3: 螺殻断面 コームアロワツ (φ10~25cm) 少量。

第33図 SK18出土遺物・SK26出土遺物、SK19・出土遺物

は、わずかに中期の土器①と石器②が出土している。ほかにチャートの剥片1点、自然石49点(0.44kg)がある。

1は櫛歯状工具による条痕文が施文される。胎土に赤褐色粒子を含む。

2は定角式の磨製石斧で、基部を欠損する。砂岩製。

SK15 (第32図、P L 8・22)

北側調査区の11C区に位置する。円形を呈するもので、断面形は浅い皿状となる。規模は、開口部径1.52m×1.30m、底部径1.36m×1.16m、深さ0.18mである。柱穴状を呈する小ピットを1か所ともなう。P1は開口部径0.50m×0.42m、深さ0.52mである。遺物は、V期の土器(1~4)と石器⑤が出土している。ほかに自然石4点(0.14kg)がある。

1は深鉢の口縁部で、沈線をとともなう隆帯が施される。2は沈線をとともなう隆帯によって渦巻状の文様が描出される。隆帯上には小さな円形の刺突文が施文される。3は頸部に沈線と角押文がみとめられる。4浅鉢で、口縁部内面に段を有する。幅広の口唇部には太く深い沈線が1条みとめられる。1・2は赤褐色粒、3・4は雲母片を胎土に含む。

5は礫石である。正裏面中央と先細りとなる下端に敲打痕がみとめられる。安山岩製。

SK16 (第32図、P L 8)

北側調査区の11C区に位置する。SK15を切る。円形で、柱穴状を呈する。規模は、開口部径0.52m×0.50m、底部径0.44m×0.44m、深さ0.63mである。出土遺物なし。ほかに自然石2点(0.31kg)が出土している。

SK17 (第32図、P L 9)

北側調査区の11B区に位置する。北東側約1/2は調査区外となる。フラスコ状を呈する。規模は、開口部径0.76m×(0.42)m、底部径1.14m×(0.56)m、深さ0.77mである。出土遺物なし。

SK18 (第32・33図、P L 9・22)

北側調査区の18B区に位置する。SK26と切り合うが新旧関係は不明。不整形円形を呈するもので、壁は外傾して立ち上がる。床面は凹凸がある。規模は、開口部径(2.82)m×2.30m、底部径(2.42)m×1.80m、深さ0.23mである。遺物は、覆土中からV期の土器①がわずかに出土している。ほかに自然石4点(0.60kg)がある。

1は深鉢の口縁部である。沈線と細い粘土紐貼り付けによる2本一組の隆帯、沈線により背を二分された隆帯によって文様が描出される。一部に細い縦位沈線の充填がみとめられる。

SK19 (第33図、P L 9・22)

北側調査区の10B・11B区に位置する。不整形を呈するもので、壁は部分的に内傾して立ち上がる。フラスコ状の可能性が有る。規模は、開口部径1.84m×1.82m、底部径1.50m×1.50m、深さ0.43mである。底部北側には小ピットが2か所あり、いずれも外側に向かって掘り込まれる。P1は開口部径0.66m×0.54m、深さ0.37m、P2は開口部径0.34m×0.26m、深さ0.38mである。遺物は、覆土中からV期の土器①がわずかに出土している。ほかに瑪瑙の剥片1点、自然石60点(2.27kg)がある。

1は深鉢の胴部から口縁部の大破片である。口縁部に小突起を有し、口唇部直下にはD字爪形文が施された突帯がめぐる。胴部は無文帯となり、胴部には3本一組の沈線文によってクラック状の文様が描出される。

2は円孔が穿たれた把手部である。1・2は胎土に雲母片を含む。

SK20 (第34・35図、P L 9・23)

北側調査区の10A・11A・11B区に位置する。フラスコ状を呈する。規模は、開口部径1.52m×1.32m、底部径2.16m×2.14m、深さ0.99mである。底部北西側と南西側には小ピットが2か所あり、いずれも外側に向かって掘り込まれる。P1は開口部径0.50m×0.32m、深さ0.27m、P2は開口部径0.54m×0.48m、深さ0.78mである。遺物は、覆土中からV期の土器(1~6)と石器(7~13)が出土している。ほかに自然石485点(136.36kg)があり、いずれも下層付近から出土している。直径15cm前後の石が多い。本跡が埋没する以前に北東側(台地頂部)から投棄されたものと推測される。

1・2は深鉢の口縁部である。沈線により背を二分された幅広の隆帯によって渦巻状の文様が描出される。3は沈線により背を二分された隆帯によって剣先文が付加された渦巻文が描出されるものである。口唇部には沈線がめぐり、小突起を有する。4は口縁部文様帯を縄文の施された隆帯によって区画するもので、区画内には沈線による渦巻文が配される。5は頸部にめぐる幅広の沈線によって口縁部無文帯と胴部縄文帯とを区画する。6は地文として単節縄文が施文される。

7は小形の磨製石斧である。大半を欠損する。細粒砂岩製。8は不定形石器である。サイド・スクレイパーもしくは打製石斧の未製品である可能性が考えられる。頁岩製。9~12は磨石と礫石の複合したものである。9は正面と右側縁に平坦な磨痕、上端の稜部に敲打痕がみとめられる。砂岩製。10は正面に平坦な磨痕、側縁の稜部に敲打痕がみとめられる。圧砕岩製。11は正裏面と左右側縁に磨痕、正裏面中央に敲打痕がみとめられる。安山岩製。12は正裏面に磨痕、正裏面中央に敲打痕がみとめられる。安山岩製。13は石皿と凹石の複合したものである。裏面に凹痕が複数みとめられる。安山岩製。

SK21 (第36図、P L 9・23)

北側調査区の10A区に位置する。不整形を呈するもので、断面形は凹凸の目立つ皿状となる。規模は、開口部径1.52m×1.20m、底部径1.32m×1.14m、深さ0.30mである。底部北西側に小ピットが1か所あり、P1は開口部径0.24m×0.18m、深さ0.18mである。遺物は、中期の土器(1・2)と石器(3・4)がわずかに出土している。ほかに自然石22点(4.80kg)がある。

1・2は櫛歯状工具による条痕文が施文される。1は胎土に雲母片を含む。

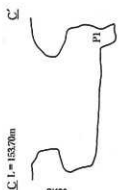
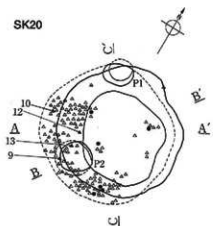
3は礫石である。棒状を呈するもので、上下両端に敲打痕がみとめられる。輝石安山岩製。4は台石である。正面に平坦な摩耗痕がみとめられる。大半を欠損する。石英斑岩製。

SK22 (第36図、P L 9・24)

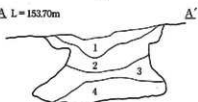
北側調査区の11B区に位置する。北東側約1/2は調査区外となる。フラスコ状を呈する。規模は、開口部径1.70m×(0.80)m、底部径1.58m×(0.88)m、深さ0.88mである。底部南西側には小ピットが1か所あり、P1は開口部径0.34m×0.34m、深さ0.32mである。遺物は覆土中からV期の土器(1~7)が出土している。ほかに自然石42点(4.80kg)がある。

1~4はキャリパー形の深鉢である。1・2は口縁部文様帯には背を沈線で二分した隆帯によって渦巻状の文様が施文される。3・4は縄文の施された隆帯によって液状の文様が施文される。5は口縁部がやや外反気味に立ち上がるもので、単節縄文が施文される。6は口縁部が短く直立するもので、頸部には沈線がめぐり、7は鉢と思われる。単節縄文を地文とし、頸部には沈線による鋸歯状文が2条めぐり、1~5、7は胎土に赤褐色粒子を含む。

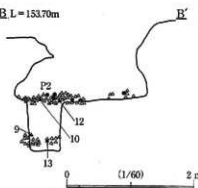
SK20



A L = 153.70m

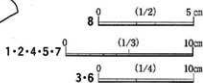
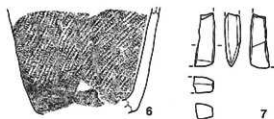
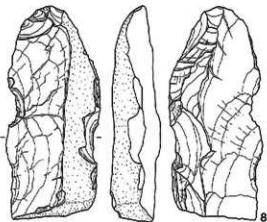
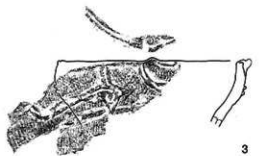
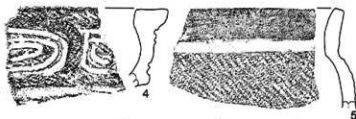
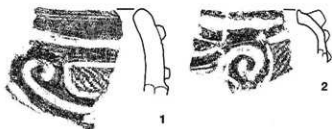


B L = 153.70m

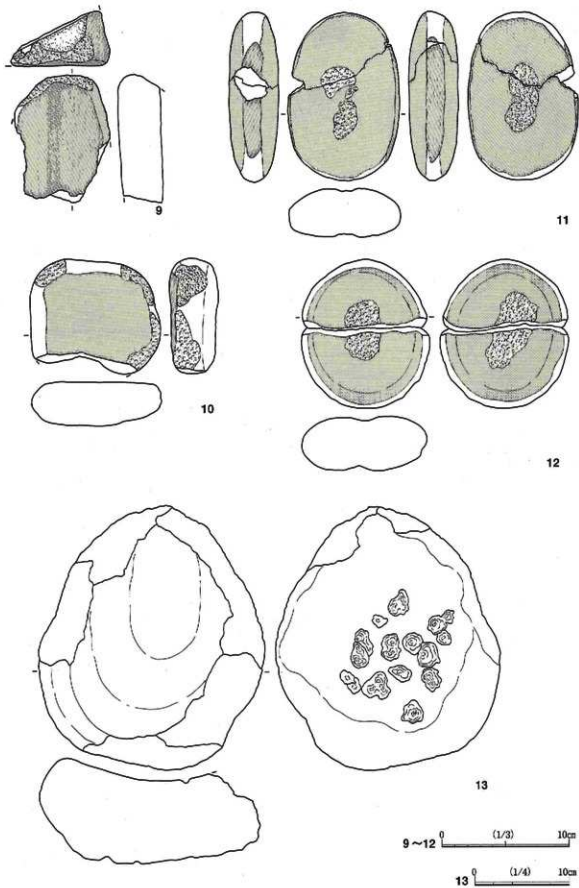


SK20

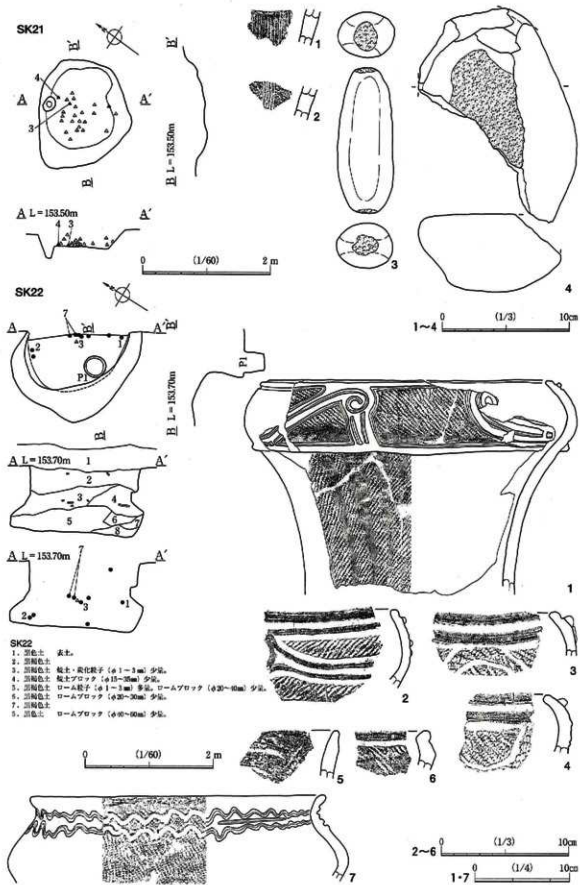
1. 黑色土: 0-A7000 (415-50m) 少見;
2. 黑褐色土: 0-A7000 (41-3m) 少見;
3. 黑褐色土: 0-A7000 (41-3m) 多見;
4. 黑褐色土: 0-A7000 (40-100m) 少見;



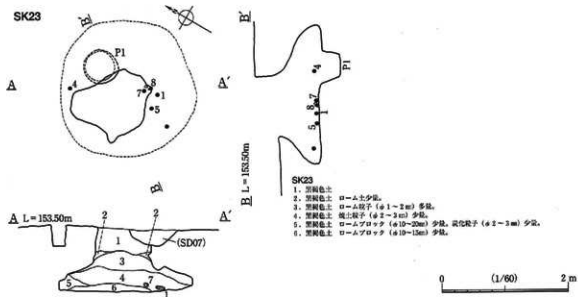
第34图 SK20・同出土遺物(1)



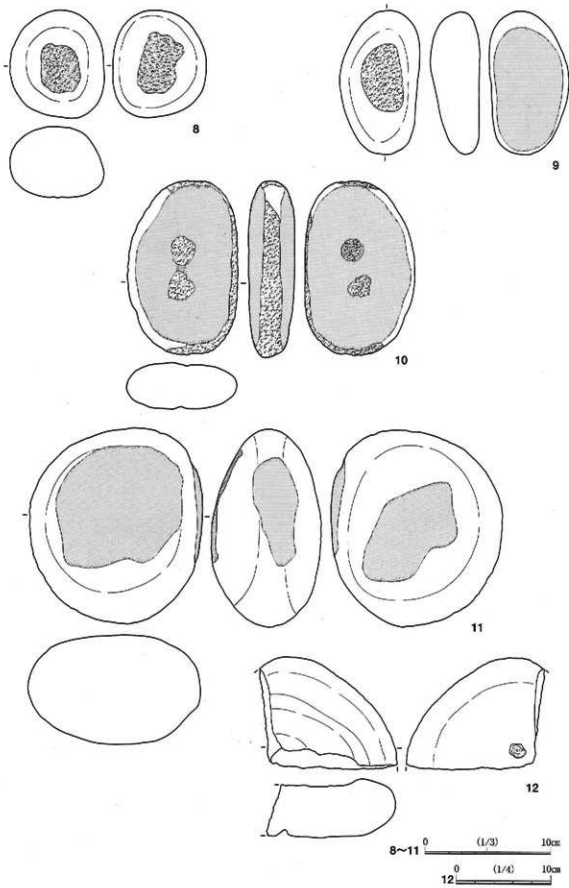
第35図 SK20同出土遺物(2)



第36図 SK21・同出土遺物、SK22・同出土遺物



第37図 SK23・同出土遺物(1)



第38図 SK23出土遺物(2)

SK23 (第37・38図、P L 9・24・25)

北側調査区の11C区に位置する。フラスコ状を呈する。規模は、開口部径1.20m×0.90m、底部径2.10m×2.10m、深さ1.15mである。遺物は、底部付近からⅣ期の土器(1~7)と石器(8~12)が出土している。ほかに自然石23点(6.89kg)がある。

1~4は口唇部直下に交互刺突文が施される。1は2個一対の把手をもち、口縁部文様帯には沈線による渦巻状の文様が配される。2は同じく橋状の把手が付くものであるが、上にも孔があいて中空状を呈する。器面上には摺糸文が施文される。3・4は同一個体と思われる。口縁部文様帯には、交互刺突文を上下2段に配し、その間には細い粘土紐による鋸歯状の貼り付け文が施文される。隆帯は結節沈線によって背を二分される。5は波頂部下に施された把手である。沈線によって渦巻状の文様が描出される。6は2本一組の沈線によって渦巻文が施文される。7はコップ形を呈する土器で、破損した深鉢の胴部下半を再利用したものであると思われる。割れ口である口縁部は磨っている。体部には無節縄文が施文される。6は赤褐色色、3~5・7は雲母片を胎土に含む。

8は敲石である。正裏面に敲打痕をもつ。9・10は磨石と敲石の複合したものである。9は正面に敲打痕、裏面に磨痕をもつ。10は正裏面に磨痕、正裏面中央と側縁に敲打痕をもつ。11はやや大形の磨石である。正裏面と右側縁に磨痕をもつ。12は石皿と凹石の複合したものである。裏面に凹痕が1か所みとめられる。大半を欠損する。

SK24 (第39図、P L 10・25)

北側調査区の11B・11C区に位置する。不整楕円形を呈するもので、壁は部分的に内傾して立ち上がる。フラスコ状の可能性が高い。規模は、開口部径2.30m×1.60m、底部径2.04m×1.68m、深さ0.95mである。底部中央やや西寄りには小ピットが1か所あり、P1は開口部径0.32m×0.28m、深さ0.41mである。遺物は、覆土中からⅣ期の土器(1~4)が出土している。ほかに鉄石英の剥片1点、自然石26点(2.83kg)がある。

1は深鉢の口縁部である。摺糸文を地文とし、沈線により背を二分された幅広い隆帯が施される。隆帯には沈線がともなう。2は沈線が施文される。3は口縁部が窄まる器形を呈し、無文である。4は浅鉢で、口縁部内面に段を有する。赤彩がみとめられる。1・4は雲母片を胎土に含む。

SK25 (第39図、P L 10・25)

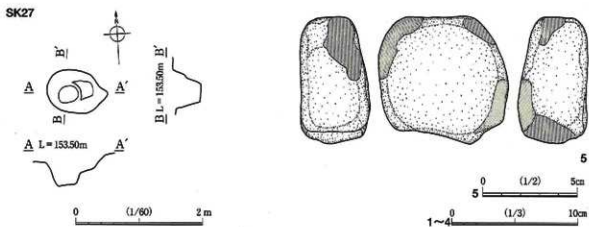
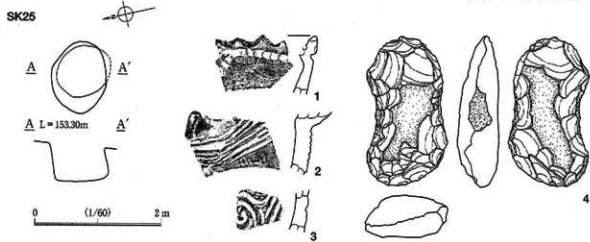
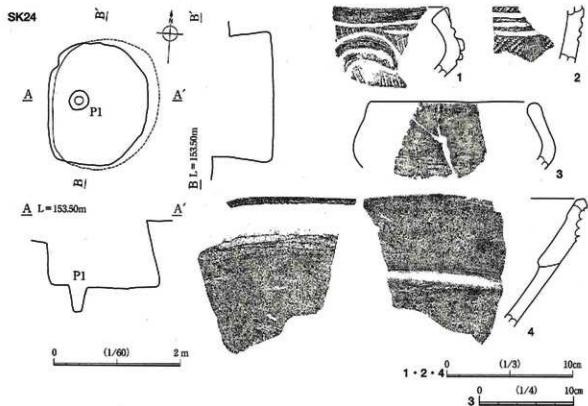
北側調査区の12D区に位置する。不整円形を呈するもので、壁は一部内湾して立ち上がる。規模は、開口部径1.14m×0.88m、底部径0.90m×0.72m、深さ0.62mである。遺物は、Ⅳ期の土器(1~3)と石器(4・5)が出土している。ほかに自然石60点(1.60kg)がある。

1は深鉢の胴部で、指頭圧痕文が施された隆帯には角押文がともなう。2は平行沈線が粗く集散的に施文される。3は沈線により曲線文が描出される。1は雲母片を胎土に含む。

4は分銅形の打製石斧である。長楕円形の川原石を素材とするもので、正裏面の中央に大きく表皮を残す。凝灰岩製。5は磨石である。隅丸方形を呈する川原石を利用したもので、稜部を限定的に使用している。石材は石英。

SK26 (第32・33図、P L 9・25)

北側調査区の10B区に位置する。SK18と切り合うが新旧関係は不明。上部はすでに削平されて遺存しないが、おおむねフラスコ状を呈するものと思われる。規模は、開口部径2.56m×2.18m、底部径2.00m×1.90m、深さ0.51mである。底部北西側と南東側には小ピットが2か所あり、ともに外側に向かって掘り込まれている。



第39図 SK24・同出土遺物、SK25・同出土遺物、SK27

P1は開口部径0.48m×0.38m、深さ0.54m、P2は開口部径0.42m×0.30m、深さ0.56mである。遺物は、Ⅳ期からⅤ期にかけての土器(1~11)が出土している。ほかに鉄石英の剥片1点、自然石82点(14.30kg)がある。

1は深鉢の波頂部である。台形状の波頂部に、さらに円形を呈する板状の突起が斜めに付く。波頂部には平行沈線をともなう隆帯が垂下し、三角形の区画をなしている。2は口縁部で、沈線をともなう隆帯が施され、区画内には縦位沈線が充填される。3は沈線間に刻み目がみとめられる。4は口唇部直下に角押文をともなう隆帯がめぐり、口唇部には縄文が施される。5~7は櫛歯状工具による条痕文が施文される。8は捺糸文を地文とするもので、口縁部はキャリパー形を呈する。地文の上から細い粘土紐によって線状の貼り付け文が施される。9~11はキャリパー形を呈する隆帯貼付文土器(仮称)で、「口縁部の文様帯は全て隆帯貼り付けによって表現されており、沈線を加えて隆帯的に作出したものではない。また、貼付された隆帯脇に沈線が付随しない点も大きな特徴となる。」〔声澤・石橋ほか1987〕とされる土器である^{註)}。

SK27 (第39図、P L 10)

北側調査区の10A区に位置する。不整楕円形を呈し、底部には小さな段を有する。規模は、開口部径0.98m×0.64m、底部径0.32m×0.26m、深さ0.48mである。出土遺物なし。

SK28 (第40図、P L 10)

北側調査区の10A区に位置する。不整楕円形を呈し、底部には小さな段を有する。規模は、開口部径1.18m×0.86m、底部径0.72m×0.66m、深さ0.40mである。出土遺物なし。

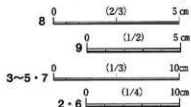
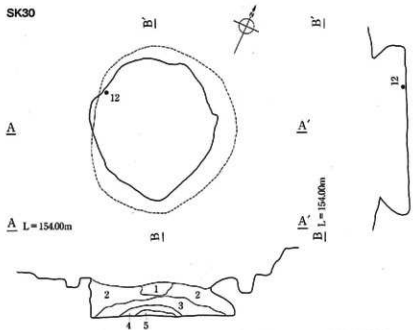
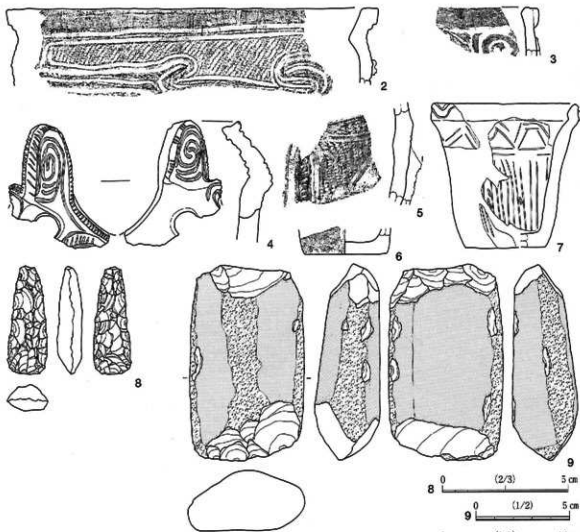
SK29 (第40・41図、P L 10・11・26)

北側調査区の11B区に位置する。SI07に切られる。フラスコ状を呈する。規模は、開口部径0.92m×0.82m、底部径1.94m×1.68m、深さ0.66mである。遺物は、南東側の底部付近からⅣ期の土器(1~7)と石器(8・9)が出土している。ほかに自然石28点(4.22kg)がある。

1は2個一対の把手をもつ深鉢である。口唇部直下の隆帯とその下の波状となる隆帯との間には狭い無文帯をはさむ。これらの隆帯は、いずれも単節縄文が施され、沈線によって背を二分される。頸部には角押文をともなう隆帯がめぐり、そこから3本の隆帯が垂下する。胴部の区画内には沈線による櫛歯状文が重畳に施文される。把手部には1か所沈線による渦巻文が施文される。地文として単節RLの縄文が縦方向に施される。2は鉢と思われる。胴部上半には沈線によって背を二分された幅広い隆帯が施文される。3は細い粘土紐を貼り付けて渦巻状の文様を描出する。4は中央に孔が穿たれた台形状の波頂部で、先端には丸い板状の突起が斜めに付く。刻み目と沈線による渦巻文が施文される。5は刻み目が施された隆帯が垂下する。7は小形の深鉢である。口唇部直下には細い粘土紐によって櫛歯状の貼り付け文が施文される。その下には平行沈線によって三角形の文様が横位に連続施文される。胴部には平行沈線による集合沈線文が施される。6は深鉢の底部である。2・4は赤褐色粒、1・5・6は雲母片を胎土に含む。

8は小形の打製石斧である。9は磨石と燧石の複合したものである。断面三角形となる砂岩の川原石を利用したもので、両側縁と正面中央の稜部に敲打痕、それ以外の正表面には磨痕がみとめられる。上下端は

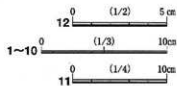
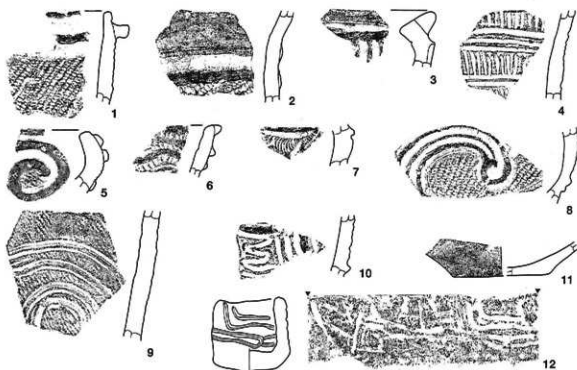
註) 御城田遺跡では、第Ⅴ期(大木Sa式最終段階・加曾利EⅠ式古段階)に位置づけられる〔声澤・石橋ほか1987〕。類似した良好な資料として、千葉県中野遺跡の第5次1号住居址の土器があり、胴部に沈線による壘文文が施された加曾利EⅠ式土器としている〔下総考古学研究会1976〕。



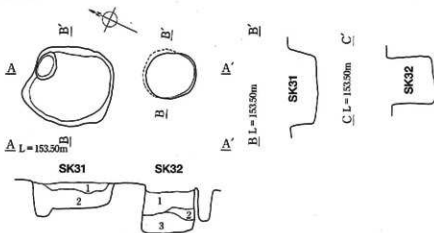
SK30

1. 赤褐色土：出土面が砂質の砂礫、風蝕により土層が侵食したもので、砂礫はみではない。貯まる。
2. 赤褐色土：ローム菓子（φ10~20cm）多数、ロームブロック（φ10~20cm）および灰化木片（φ5~10cm）少量、貯まる。
3. 赤褐色土：貯まる。
4. 赤褐色土：ロームブロック（φ10~20cm）少量、貯まる。
5. 赤褐色土：貯まる。

第41図 SK29出土遺物(2)、SK30



SK31・32



SK31

1. 赤褐色土：赤土層が30cmの厚さ、硬熟による2層が堆積したもので、断面はみではなない。

2. 暗褐色土：ロームブロック（φ10～30mm）多数。

SK32

1. 赤褐色土：ロームブロック（φ10～30mm）少数、炭化木片（φ2～6mm）少数。

2. 赤褐色土：焼土粒子および炭化木片（φ2～3mm）少数。

3. 暗褐色土：ロームブロック（φ30～50mm）少数。

SK31

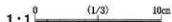
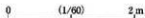


1

SK32



1



第42図 SK30出土遺物、SK31・同出土遺物、SK32・同出土遺物

両面から打ち欠いて刃部を作出している。刃縁にはわずかに使用による摩滅がみとめられる。確認可能な使用痕の新旧関係は、磨痕⇒敲打⇒打ち欠き⇒敲打の順である。磨面は極めて平滑である。

SK30 (第42図、P L 11・27)

北側調査区の11B区に位置する。SI07に切られる。フラスコ状を呈する。規模は、開口部径2.24m×2.00m、底部径2.62m×2.30m、深さ0.60mである。遺物は、覆土中からⅤ期の土器(1~12)が出土している。ほかに剥片2点(チャート1点、頁岩1点)、自然石80点(7.60kg)がある。

1は深鉢の口縁部で、口唇部直下には鈿状に突き出た隆帯が1条めぐる。2は幅広で低い隆帯が2条めぐる。3は太い沈線が施文される。4は3本一組の沈線によって区画されたなかに縦位沈線が充填される。5は口縁部に太い粘土紐による渦巻状の貼り付け文が施される。6は角押文をともなう隆帯によって曲線状の文様が描かれる。7は連続したC字爪形文が施文される。8は3本一組の隆帯によって曲線文が描かれる。9は2本一組となる平行沈線によって渦巻状の文様が描かれる。10は沈線によって鋸歯状文などが描かれる。11は深鉢の底部である。12はミニチュア土器である。体部はわずかに内傾して立ち上がり、口縁部がわずかに窄まる器形となる。体部には2本一組の沈線によって「L」字状や角張った渦巻状の文様が粗く描出される。1・4は赤褐色粒子、7は雲母片を胎土に含む。

SK31 (第42図、P L 11・27)

北側調査区の11C区に位置する。SI09に切られる。不整形円形を呈するもので、壁はほぼ直線的に立ち上がる。規模は、開口部径1.42m×1.24m、底部径1.26m×1.02m、深さ0.45mである。底部北側には小ピットが1か所あり、P1は開口部径0.50m×0.30m、深さ0.13mである。遺物は、中期の土器(1)がわずかに出土している。ほかに自然石5点(0.25kg)がある。

1は深鉢の胴部細片で、沈線が垂下する。

SK32 (第42図、P L 12・27)

北側調査区の11C区に位置する。SI09に切られる。円形を呈し、壁はわずかに内湾して立ち上がる。規模は、開口部径0.78m×0.72m、底部径0.82m×0.76m、深さ0.75mである。遺物は、わずかに中期の土器(1)が出土している。ほかに頁岩の剥片1点、自然石2点(0.02kg)がある。

1は深鉢の口縁部で、沈線をともなう隆帯が施される。

SK33 (第43図、P L 12・27)

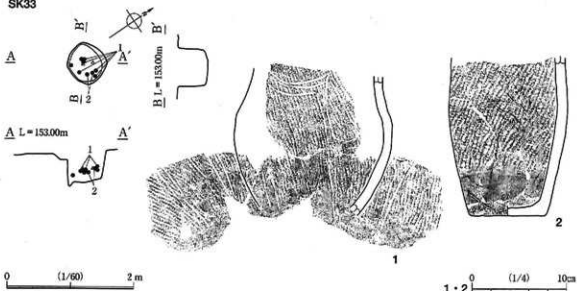
北側調査区の11C区に位置する。SI10と切り合うが新旧関係は不明。円形を呈し、壁は直線的に立ち上がる。規模は、開口部径0.64m×0.62m、底部径0.58m×0.52m、深さ0.50mである。遺物は、Ⅴ期と思われる土器(1・2)が出土している。ほかに自然石47点(0.77kg)がある。

1は深鉢の胴部大破片である。単節縄文を地文とし、2本一組の浅い沈線によって文様が描出される。2は底部から胴部の大破片である。地文として単節縄文が施される。1は赤褐色粒、2は雲母片を胎土に含む。

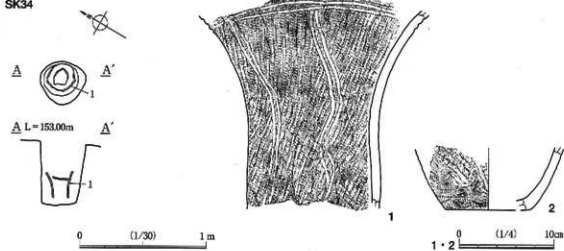
SK34 (第43図、P L 12・27)

北側調査区の11C区に位置する。柱状を呈する。SI09にともなう遺構である可能性が高い。規模は、開口部径0.72m×0.68m、底部径0.54m×0.48m、深さ0.50mである。遺物は、正位で埋設されたようなかたちでⅤ期の深鉢(1)が出土しており、その上部には蓋状に覆い被さった状況で鉢の破片が1点検出されている。

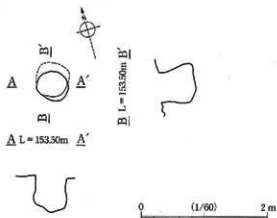
SK33



SK34



SK35



第43図 SK33・同出土遺物、SK34・同出土遺物、SK35

後者はSI09の覆土中から出土したものと接合した（SI09-17）。ほかに覆土上層から深鉢の破片1点(2)が出土している。

1は深鉢の胴部で、口縁部と底部は意図的に割り欠かれている。胴部には2本一組の沈線が垂下する。内面にはオコゲと被熱による器面剥離がみとめられ、煮沸具として使用されたものであることがわかる。2は深鉢の底部付近の破片である。2は胎土に赤褐色粒を含む。

SK35（第43図、P L 12）

北側調査区の11C区に位置する。SI09に切られる。円形を呈し、断面形は袋状を呈する。規模は、開口部径0.52m×0.46m、底部径0.56m×0.50m、深さ0.58mである。遺物は、覆土中からチャートの剥片1点が出土している。

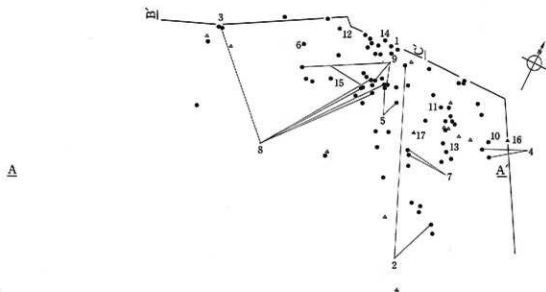
D. 遺物集中地点

10A区（第44～46図、P L 12・28）

北側調査区の10A区北東側から遺物が多量に出土した。いずれも遺構確認面からやや浮いた状態で出土している。層位的には表土層に含まれるものであるが、遺物の分布範囲には、わずかながら径1～3cmほどの焼土ブロックが散見された。出土状況から判断して、これらは調査区外北東側（集落中心部）から斜面に向かって投棄されたものと考えられる。遺物は、IV期からV期にかけての土器（1～15）と石器（16・17）が出土している。ほかに磨石の小破片1点がある。

1は深鉢の波頂部である。斜めにねじれて付く円形の板状のもので、正面中央には円形の凹みが1か所施される。2～4は把手部である。2は沈線文、先端ペン先状の施文具による角押文、交互刺突文、刻み目、正面右側面に施された細い粘土紐による波状の貼り付け文によって加飾される。3は沈線文、交互刺突文、細い粘土紐による鋸歯状の貼り付け文によって加飾される。4は斜めにねじれて付くもので、短沈線が複数並列して刻み目状に施文される。5は鉢と思われる。幅広く厚い隆帯に半肉彫的な施文がなされるが、基本的には沈線によって背を二分された隆帯による渦巻状の文様と交互刺突文が描出されるものである。器面には磨きが施される。6は沈線と貼り付け文によって文様が描出される。7は沈線をともなう隆帯が施文される。口縁部の小突起直下には隆帯による渦巻文が配される。8は地文に熱糸文を施したあと、細い粘土紐による線状の貼り付け文と沈線をともなう隆帯が施文される。9は複線文土器である。口縁部に横「S」字状の隆帯を貼り付け、胴部には平行沈線による曲線的な文様が描出される。口縁部の小突起内面には小さな渦巻文が貼り付けられる。10は波状口縁となる深鉢で、口縁部内面には細い隆帯が1条めぐる。11の胴部には縦帯に複数並列して平行沈線が施される。12は交互刺突文と縦帯沈線が施文される。13は3本一組の沈線によって文様が描出される。14・15は複数並列した半隆起線が施文される。1・2・7は胎土に雲母片を含む。8・9・11は胎土に砂粒を多く含む砂っぽい。

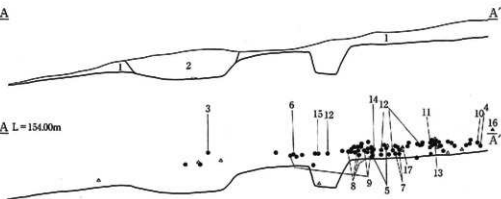
16は打製石斧の未製品の可能性が有る。基部を欠損する。頁岩製。17は砥石と思われる。表面を中心に二次加工が施された大形の剥片で、正面は表皮付きとなる。表面には剥離によって生じた凸部の頂部にのみ平滑な磨面が所々みとめられる。凝灰岩製。



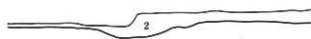
田

川

A



B L = 154.00m



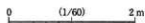
B'

10A区
 1. 赤褐色土：泥土、磁土ブロック（φ10-30cm）散見。
 2. 赤褐色土：ローム状土（φ1-2cm）少し、砂質、砂質土層上。

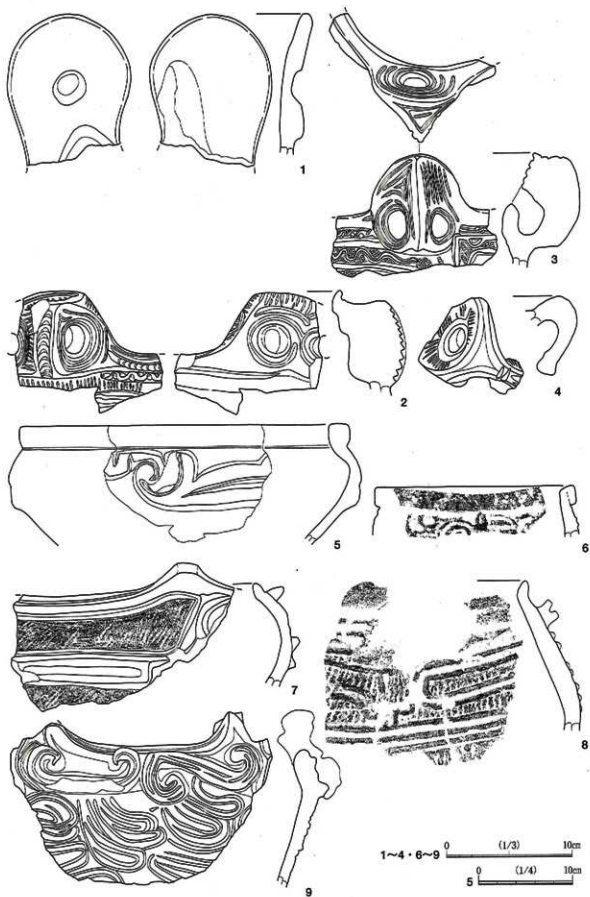
C L = 154.00m



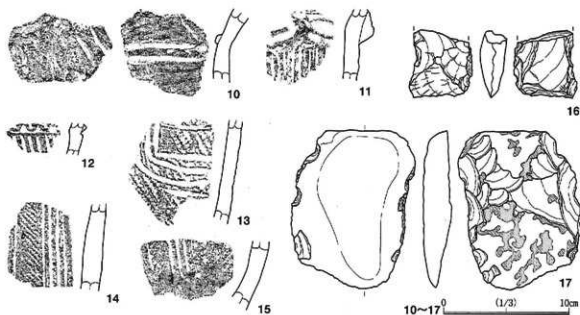
C'



第44図 遺物集中地点（10A区）



第45图 遗物集中地点(10A区)出土遗物(1)



第46図 遺物集中地点(10A区)出土遺物(2)

E. 遺構外出土遺物(第47~55図、P L 29~34)

64・1・2は、I期の土器群である。64は早期前半の桶形原式に比定される深鉢である。肥厚した口縁部は、浅い幅広の凹線によって区画されて無文帯となり、胴部には節が大きく余間隔の広い熱系文が縦位に施文される。1・2は早期後半の条痕文系土器である。胎土に縦線を含み、内外面に貝殻条痕文が施される。

3~12は、II期の土器群である。前期前半の関山式と思われるもので、内外面は磨き調整が施される。3~7は単節縄文、8~10は熱系文が施文される。11・12は横方向の羽状縄文が施文される。3~12は胎土に縦線を含む。

13~15は、III期の土器群である。13は結束(第1種)された原体によって羽状が表現される。14はコンパス文が施文される。15は口唇部が短く外折する器形となる。口唇部直下には単節LRを原体とする縄文原体圧痕が1条めぐり、口縁部には単節LRの縄文帯をもち、その下には縄文原体圧痕と細い隆帯が重層的に施文される。中期前葉の大木7b式に比定される土器である。

16~90は、IV~V期の土器群である。

16・17は角押文をともなう隆帯が垂下する波頂部である。隆帯には刻み目が施される。16は外周部の隆帯に縄文が施される。17は双頭状となる。16・17は胎土に雲母片と赤褐色粒子を含む。

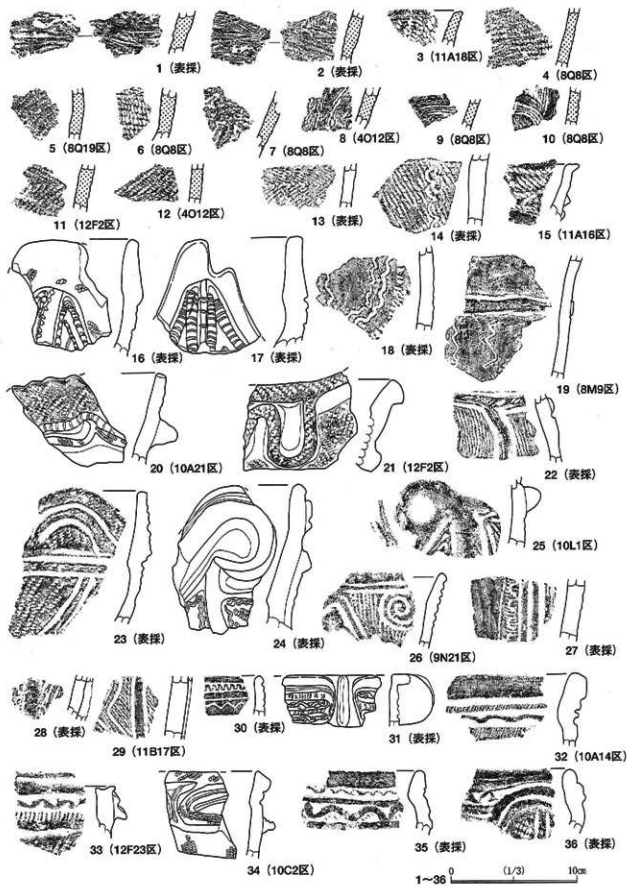
18・19は沈線による鋸歯状文が施文される。18は角押文による区画内に2本一組となる鋸歯状文がみとめられる。19は結節沈線をともなう隆帯がめぐり、鋸歯状文が垂下する。18は雲母片、19は赤褐色粒子を胎土に含む。

20は小波状を呈する隆帯が角押文をともなうものと思われる。口縁部と隆帯には単節縄文が施文される。口唇部には指頭圧痕文が施される。

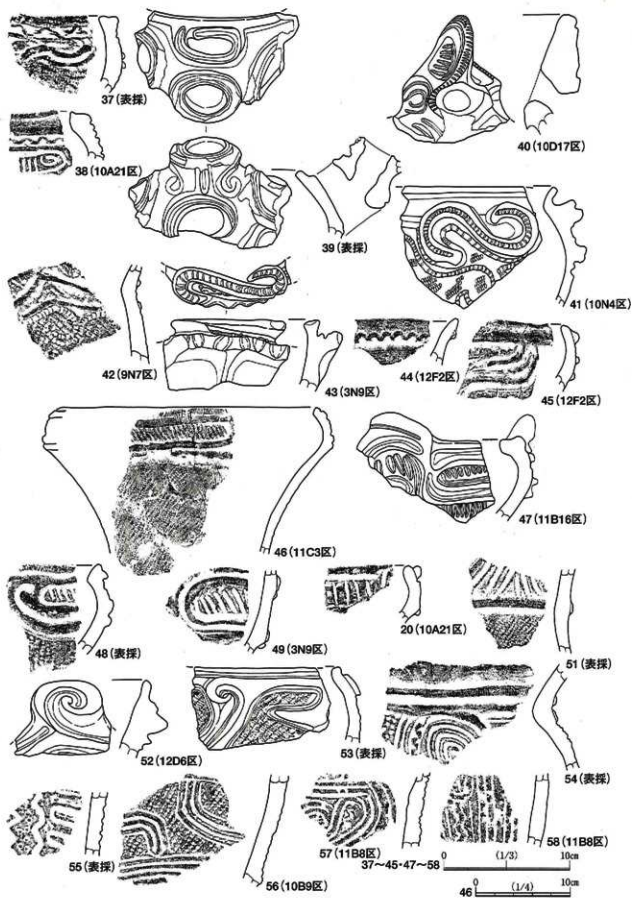
21の口縁部には隆帯による波状の文様が描出される。口唇部と隆帯には地文と同じ単節縄文が施文される。胎土に赤褐色粒子を含む。

22は沈線をともなう隆帯によって文様が描出される。隆帯には地文と同じ単節縄文が施文される。

23は波頂部で、2本一組の沈線によって文様が描出される。



第47回 遺構外出土遺物(1)



第48图 遗構外出土遺物(2)

24・25は幅広で厚みのある隆帯が施される。24は波頂部で、隆帯には沈線による鋸歯状文をともなう。25は隆帯に沈線をともない、屈曲部では環状をなす。24は胎土に赤褐色色粒を含む。

26は沈線によって渦巻文などが描出されるもので、縦位沈線が充填される。胎土に赤褐色色粒を含む。

27は複数並列した半隆起線が垂下し、これに結節沈線文、連続したC字爪形文、単独で刺突されたC字爪文列がともなう。28は垂下する隆帯に単独で刺突されたC字爪形文列がともなう。器面には複数並列した平行沈線が施文される。29は沈線をともなう隆帯が垂下する。器面には複数並列した平行沈線が施され、沈線により文様が描出される。

30～38は交互刺突文が施文される。30は口唇部直下に交互刺突文が施され、その直下に沈線による鋸歯状文をともなう。31は口縁部文様帯に刻み目列と交互刺突文が重層的に施文される。32は口縁部にだけた交互刺突文が施文され、その上下には木口状工具による条痕文が施される。33は口唇部直下に交互刺突文が施され、その直下には刻み目が加えられた隆帯がめぐる。口唇部には太く浅い沈線が施される。34は口縁部に沈線をともなう隆帯によって楕円形状の区画がなされる。隆帯には部分的に刻み目と交互刺突文が施される。35は口唇部直下に交互刺突文、その直下には細い粘土紐貼り付けによる鋸歯状文が付される。地文として0段多条の縄文が施文される。36・37は口唇部直下の交互刺突文と、沈線により背を二分された隆帯によって文様が描出される。38は口唇部直下に交互刺突文、その直下に沈線による渦巻文と縦位沈線がみとめられる。33は雲母片、31・34・37は赤褐色色粒、38は雲母片と赤褐色色粒を胎土に含む。

39・40は把手である。39は中空状の把手で、正面・左右・上下の5か所に円形状の開口部をもち、それぞれ沈線により背を二分された隆帯によって縁取られる。細い粘土紐貼り付けによる渦巻文が2か所付される。40の上部には刻み目の施された丸い板状の突起が斜めに付され、沈線によって渦巻文、鋸歯状文、縦位沈線などが施文される。中央には孔が1か所穿たれる。39・40は胎土に赤褐色色粒を含む。

41・42は角押文によって曲線的な文様が描かれる。41は口縁部に狭い無文帯をもつもので、口唇部直下には角押文が施された横「S」字状の高い隆帯が配される。

43・44は口唇部直下に指頭圧痕文が施された隆帯がめぐる。43は、41と同様の角押文が施された横「S」字状の隆帯が口唇部に配されるもので、口唇部には交互刺突文が施文される。43は赤褐色色粒と雲母片、44は雲母片を胎土に含む。

45・46はキャリバー形を呈するもので、細い粘土紐貼り付けによる隆帯によって文様が描かれる。45は2本一組の隆帯によってクランク文が描出される。46は地文として0段多条の単節縄文が施文される。46は胎土に赤褐色色粒を含む。

47～50は口縁部の区画内に縦位沈線が充填される。47～49は沈線により背を二分された隆帯によって楕円形状の区画が施される。47・50の口唇部には沈線が1条めぐる。47～49は雲母片、50は赤褐色色粒を胎土に含む。

51は隆帯によって区画された上部に複数並列した沈線が施文される。

52は把手部で、頂部には隆帯による渦巻文が配される。胎土に赤褐色色粒と雲母片を含む。

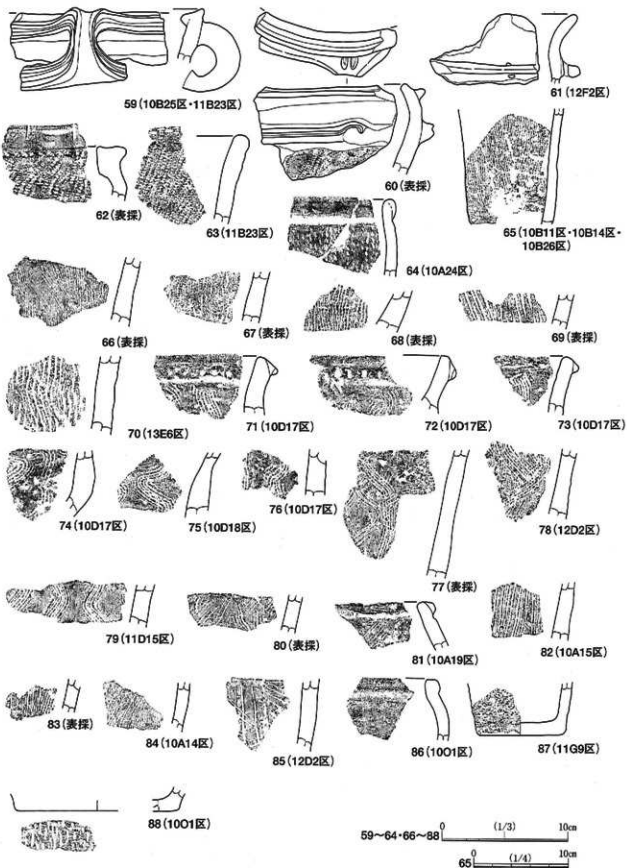
53は隆帯によって立体的な渦巻文が描かれる。0段多条の単節縄文を地文とする。胎土に雲母片を含む。

54・55は円形刺突文が施される。54は交互刺突文をともなう沈線によって渦巻文が描出される。55は沈線によって鋸歯状文などが描出される。54は胎土に赤褐色色粒を含む。

56～58は半截竹管状工具を使って施文されるものである。56は3本一組の半隆起線によってクランク状の文様が描出される。57・58は平行沈線による文様が隙間なく施文される。

59は口縁部に沈線により背を二分された隆帯から連続して楯状把手が付される。胎土は砂っぽい。

60は口縁部無文帯となり、胴部に縄文帯をもつものである。胴部との区画には、小突起が配された断面方



第49図 遺構外出土遺物(3)

形状となる高い隆帯がめぐる。小突起正面には渦巻文、上部には刺突文が施される。口唇部と隆帯上にはそれぞれ沈線が施される。胎土に赤褐色粒を含む。

61は有孔鈔付土器である。

62・63は単節縄文が施文されるものである。62の口唇部には太く浅い沈線が、63の口唇部には網代痕が施文される。62は胎土に雲母片を含む。

65～70は摺糸文が施文される。66～70は胎土に赤褐色粒を含む。

71～82・84は櫛歯状工具による条痕文が施文される。71～80は垂下する曲線文が施文される。このうち71～73・81は口縁部である。71～73は口唇部直下に棒状工具による連続圧痕文が施された隆帯がめぐる。81は口縁部が内傾する器形のもので、口唇部直下の隆帯には条痕文が施される。71～81は赤褐色粒、82・84は赤褐色粒と雲母片を胎土に含む。

83は複数並列する平行沈線が施文される。85は間隔を空けて複数並列する沈線が施文される。83・85は胎土に赤褐色粒を含む。

86は無文の土器である。胎土に雲母片を含む。

87・88は深鉢の底部である。88の底面には網代痕が残る。

89・90は浅鉢で、口縁部内面に段を有する。90の口唇部には沈線が1条みとめられるが、全周するものではなく何らかの文様の一部と解される。90は胎土に雲母片を含み、赤彩がみとめられる。

91は耳栓である。中央部に小孔を穿つもので無文である。胎土に赤褐色粒を含む。

92は凹基無茎の石鏃である。チャート素材とするもので、調査区からはこれ1点のみの出土である。

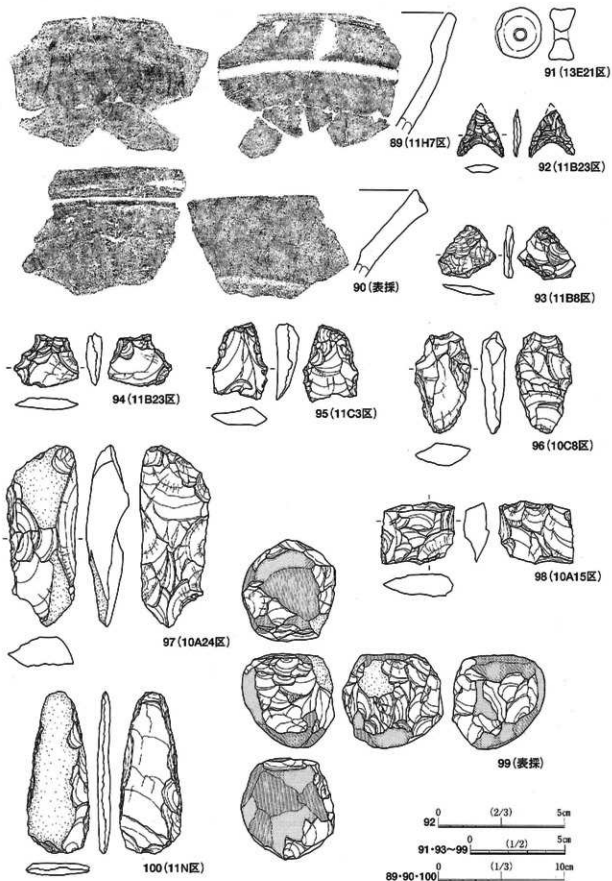
93～97は不定形石器である。93～96は、いずれも正裏面から二次加工が施されるが、明瞭な刃部の作出はみとめられない。93～95は石鏃未製品の可能性があり、97は、表皮付きの剥片を素材とし、左側縁を中心に両面から粗い不連続剥離が施される。サイド・スクレイパー的な機能が想定される。ほかに二次加工がみとめられる剥片が8点出土している。

98は楔形石器である。直交する二対の刃部をもち両側剥離痕がみとめられる。玉髄を素材とするもので、これ1点のみの出土である。

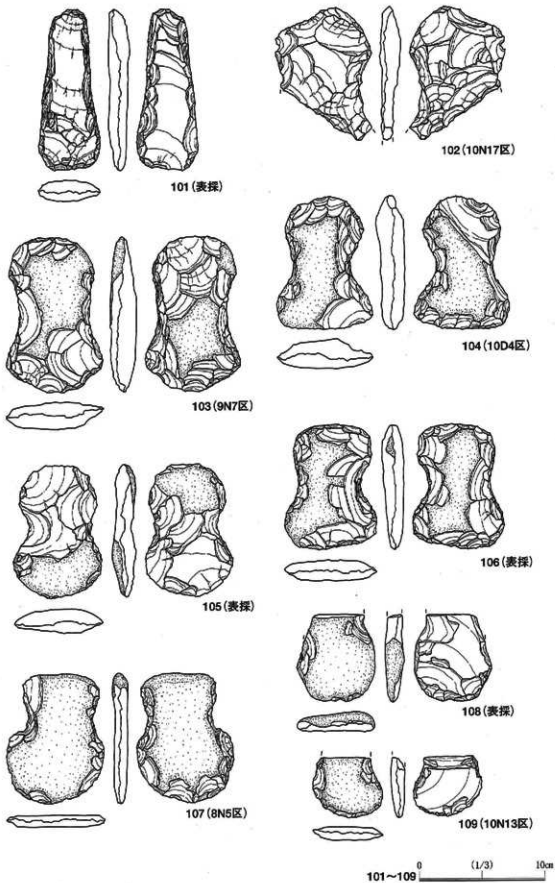
99は石核である。瑪瑙の丸い川原石を素材とする。素材剥片の剥離には至っておらず、表皮を除去しはじめた調整剥離段階のものと考えられる。この石器で注意されるのは、器体のほぼ全面が磨られていることである。複数の磨面により多面体的な形状をなすが、磨面の大半は、直線的な平行運動による平面ではなく、手首のスナップを効かせた円運動により生じたと思われる弱い曲面によって構成される。これらの磨面は、結果として一部打面として機能している状況もみえるが、打面調整のための研磨とは考えがたい。ほかにチャート製の石核が4点出土している。

100～109は打製石斧である。100・101は細身の撥形を呈する。石材はそれぞれ粘板岩と頁岩で、薄く板状に剥離した剥片を素材とする。使用状況は不明であるが、100の刃部には、顕著な摩耗とともに、刃縁とほぼ平行するかたちで横方向にはしる線状痕が観察できる。102から109は分銅形を呈する。103～108は正裏面の大部分に表皮を残すものである。平べったい川原石をそのまま素材として使用し、大まかな整形・刃部加工が施される。109も正面に大きく表皮をともなうが、前者とは異なり、剥片を素材としたものである。いずれも刃部には少～中程度の摩耗がみられ、観察可能なすべての個体に刃縁に直交するかたちで縦方向にはしる線状痕がみとめられた。なお、103と106は、摩耗の状況からみて、上下両端をそれぞれ刃部として使用している可能性がある。102は刃部、108は基部を欠損する。

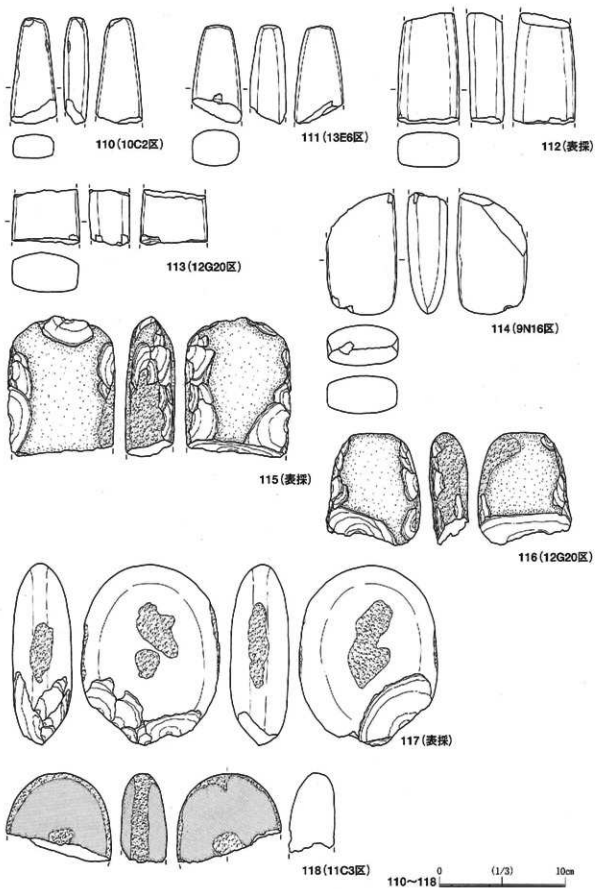
110～114は定角式の磨製石斧である。やや細身の110・111と、やや幅広の112～114に大別できる。114は刃部の摩滅が顕著である。110・111は刃部、112・113は刃・基部、114は基部を欠損する。



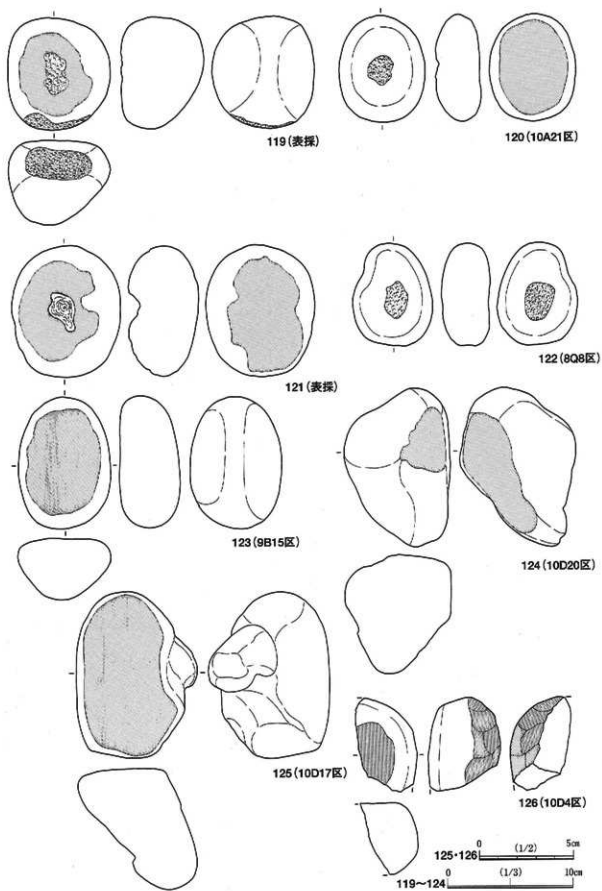
第50图 遺構外出土遺物(4)



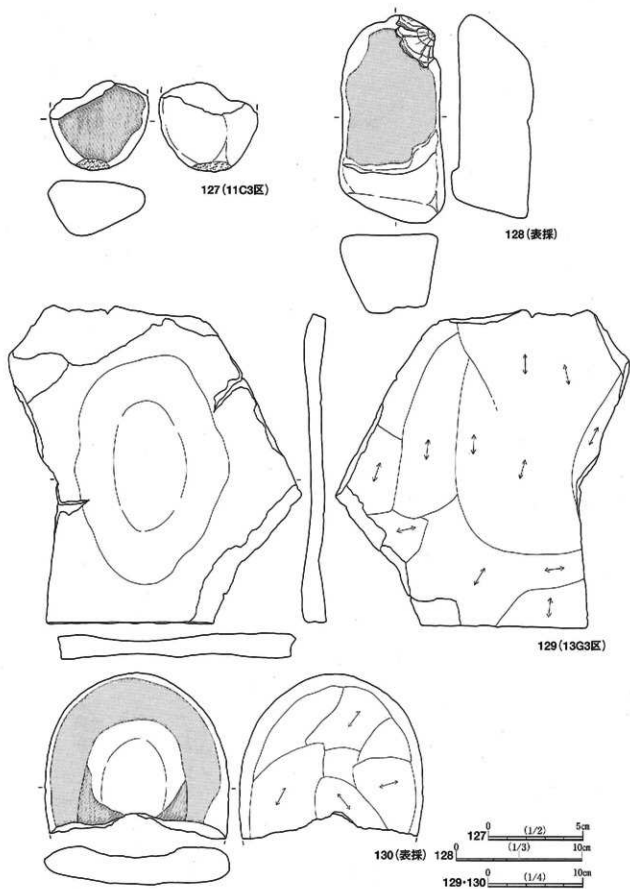
第51図 遺構外出土遺物(5)



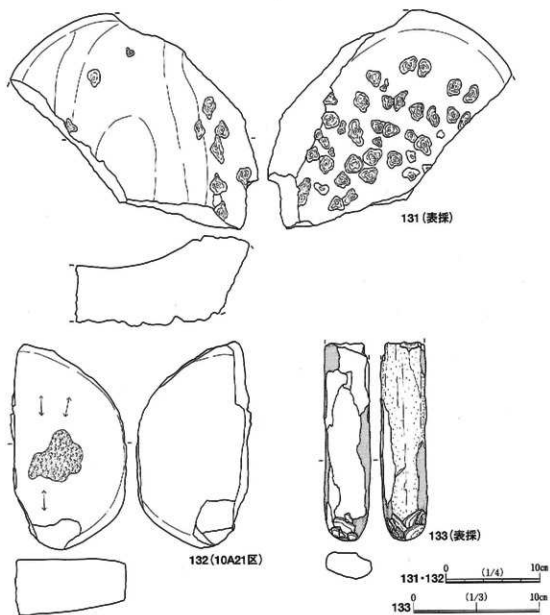
第52図 遺構外出土遺物(6)



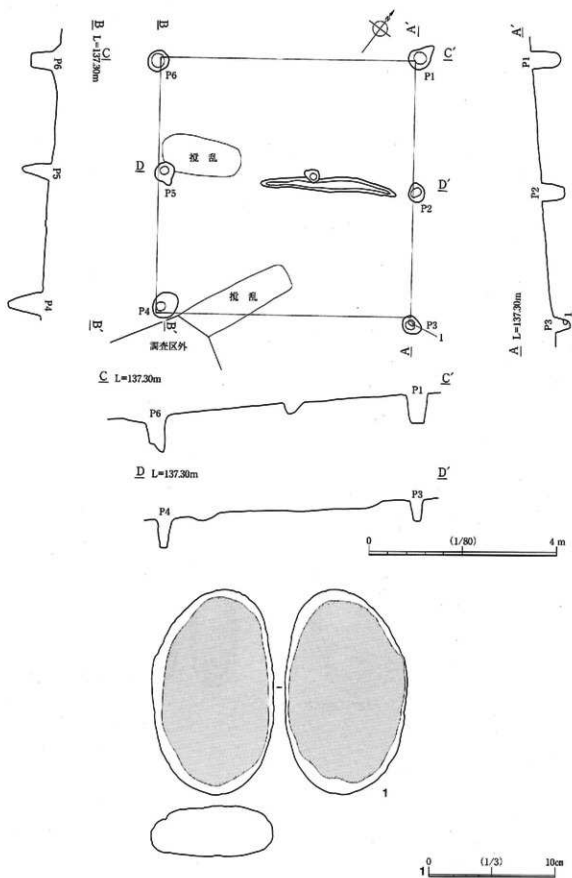
第53図 遺構外出土遺物(7)



第54図 遺構外出土遺物⑧



第55図 遺構外出土遺物(9)



第56図 SB01・同出土遺物

115～127は磨石および敲石類である。いずれも川原石を用いており、基本的に整形加工は施さずに素材の形状を生かしたかたちで使用している。機能的に複合した石器が多く、一般的な器種分類が困難であるため、ここでは各個に説明を加える。115・116は特殊な敲石である。ともに隅丸長方形形状を呈する川原石を素材とする。共通する要素として、まず、両側縁に顕著な敲打痕をもち、意図的な打ち欠きが部分的に両面から加えられていることがあげられる。打ち欠きの部位は、115が左側縁と上端、116が下端である。これらの剥離は、敲打にともなう事故的なものとは明らかに異なるが、その意図するところについては判然としない。石材は115が砂岩、116が片麻岩である。117は正裏面中央と両側縁に敲打痕をもつもので、下端には前述した115・116とほぼ同様の打ち欠きが施される。石材は安山岩である。118～120・127は磨痕と敲打痕をもつものである。118は正裏面に磨痕、正裏面中央と側縁全周に敲打痕、119は正面に磨痕、正面中央と下端に敲打痕、120は正面中央に敲打痕、裏面に磨痕、127は正面に磨痕、下端に敲打痕をもつ。118・127は約1/2を欠損する。121は正裏面に磨痕、正面中央に凹痕1か所をもつ。122は正裏面中央に敲打痕をもつ。123は正面に磨痕をもつ。124は不規則な多面体に似た形状を呈するもので、このうちの2面に平坦な磨痕がみとめられる。125は正面に磨痕をもち、全体の形状は握りやすい把手状を呈する。126は細片のため全貌は不明であるが、正面に平坦な磨痕、裏面には小規模で平坦な磨痕が多面的に複数存在する。ほかに磨石の破片が2点出土している。

128は砥石である。加工せずに川原石の平坦な自然面を利用しており、正面に平滑な磨面をもつ。

129～131は石皿である。いずれも砥石あるいは凹石として機能的に複合する。129は薄く板状節理した砂岩を素材とし、裏面は磨製石斧の砥石として利用される。130は全体を磨ることによって最終的な整形加工が施されるもので、磨痕は正面の皿部周縁に顕著である。裏面は砥石として利用されている。131は正面の一部と裏面に多数の凹痕がみとめられる。大半を欠損する。130・131は安山岩を素材とする。

132は台石である。両面とも弱い凸面をなす凝灰岩の破片を利用する。正面中央に敲打痕、ほぼ正面全体に一定方向にはしる線状痕がみとめられる。

133は石棒類と思われる。棒状の粘板岩を素材とするもので、断面形は偏平な楕円形を呈する。器体には部分的に磨痕がみとめられるほか、下端には垂直方向の端部直接打撃による剥離が生じている。

ほかに剥片類が17点出土している。

第2節 中・近世

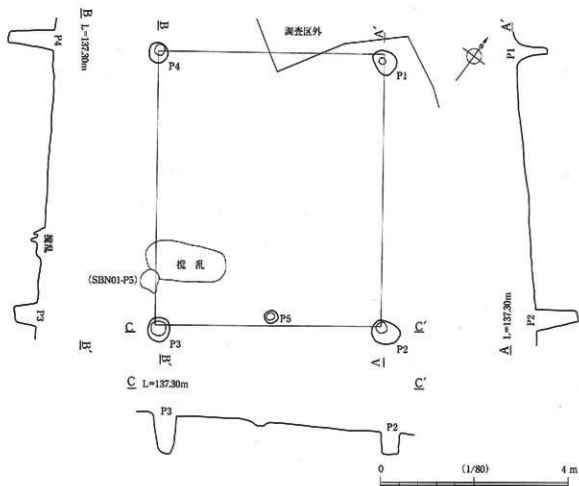
中・近世の遺構としたのは、台地裾部（南側調査区）を中心に検出された掘立柱建物跡2棟、溝跡7条、土坑3基である。概して出土遺物が少なく、遺構の時期や性格については明瞭でない。

A. 掘立柱建物跡

SB01（第56図、P.L13・35）

南側調査区の10N区に位置し、勾配7.0°の緩斜面上に構築される。東西1間（5.4m）×南北2間（5.4m）の掘立柱建物である。東西方向の柱間は5.4m、南北方向の柱間は2.7m等間である。主軸方位はN-37°-Wで、面積は29.16㎡である。柱穴は円形で、径0.40～0.60m、深さ0.36～0.61mである。P2とP5の間には、長さ2.86m、幅0.20～0.30m、深さ0.06～0.14mの細長い溝が存在する。奥方（山側）のP2寄りに位置していることから、間仕切りの機能を果たしていた可能性がある。遺物は、P3から縄文時代の磨石(1)が1点出土している。柱穴内の片側から直立気味に出土していることから、柱の根固めに用いられたものと思われる。

1は楕円形の扁平な川原石を利用した磨石で、正裏面に磨痕がみとめられる。安山岩製。



第57図 SB02

SB02 (第57図、P L 13)

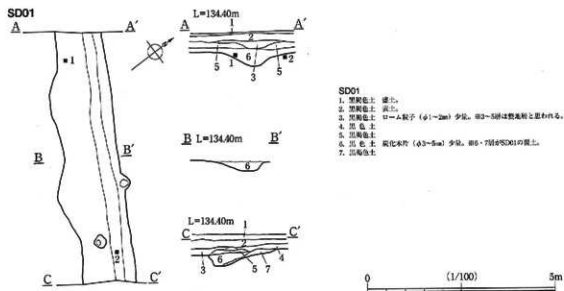
南側調査区の10N区に位置し、勾配7°の緩斜面上に構築される。東西1間(4.8m)×南北1間(5.7m)の側柱建物である。主軸方位はN-36°-Wで、面積は27.36㎡である。柱穴は円形で、径0.40~0.61m、深さ0.48~1.00mである。遺物は出土していない。

B. 溝跡

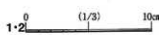
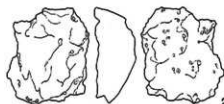
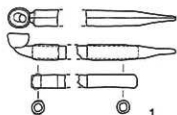
SD01 (第58図、P L 13・35)

南側調査区の8P・9Q区に位置し、後世になって整地されている可能性もあるが、ほぼ平坦地に構築されている。東西方向に直線的に延びる溝で、さらに調査区外へ延びる。中心軸方位はN-65°-Wを示し、山の傾斜に対してほぼ直交する位置関係となる。確認された規模は、長さ(6.60)m、幅1.23~1.80m、深さ0.21~0.41mである。底部の勾配は20°で西へわずかに傾斜する。遺物は、煙管(1)と鉄滓(2)が出土している。江戸時代の遺構と考えられる。

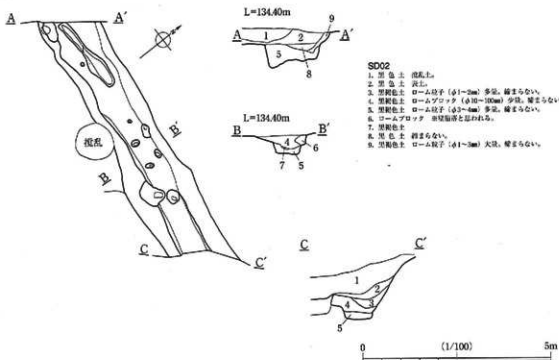
- 1は煙管である。羅字の雁首側端部には、気密性を高めるための工夫か和紙が薄く巻き付けられている。
- 2は鉄滓である。重さ220g。



- SD01
1. 埋藏土 盛土。
 2. 埋藏土 灰土。
 3. 埋藏土 ロ-ム粒子 (φ1~2m) 多量。埋2-5層は敷き層と認められる。
 4. 埋藏土 黒色土。
 5. 埋藏土 埋藏土。
 6. 埋藏土 炭化木材 (φ3~5m) 多量。埋5-7層はSD01の埋土。
 7. 埋藏土

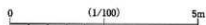
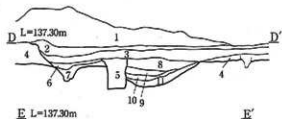
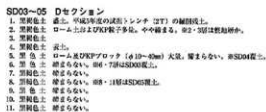
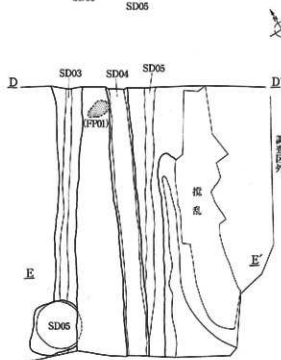
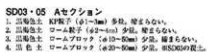
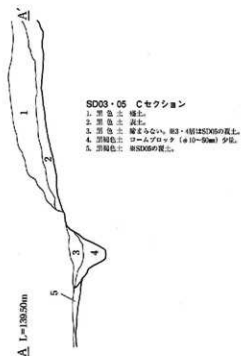
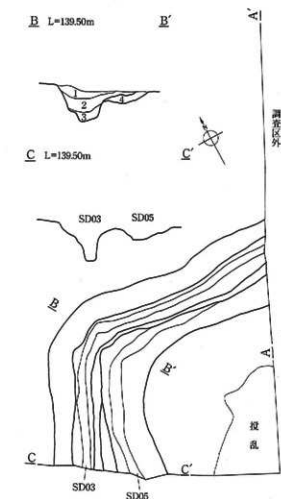


SD02



- SD02
1. 埋藏土 埋藏土。
 2. 埋藏土 灰土。
 3. 埋藏土 ロ-ム粒子 (φ1~2m) 多量。埋2層は敷き層と認められる。
 4. 埋藏土 ロ-ム粒子 (φ1~2m) 多量。埋2層は敷き層と認められる。
 5. 埋藏土 ロ-ム粒子 (φ3~4m) 多量。埋2層は敷き層と認められる。
 6. ロ-ムブロック 埋藏層と認められる。
 7. 埋藏土
 8. 埋藏土 埋藏土。
 9. 埋藏土 ロ-ム粒子 (φ1~5m) 多量。埋2層は敷き層と認められる。

第58図 SD01・同出土遺物、SD02



第59図 SD03、SD04、SD05

SD02 (第58図、P L 13)

南側調査区の90区に位置し、山側の斜面と平坦地の境に沿って構築されている。東西方向に延びる溝で、さらに調査区外へ延びている。検出部分の中心軸方位はN-84°-Wを示す。確認された規模は、長さ(8.20)m、幅1.24~1.46m、深さ0.41~1.28mである。底部の勾配は0.8°で西へわずかに傾斜するが、実質的にはほぼ水平である。溝内には木根跡が多数みとめられ、覆土は締まらない。出土遺物はないが、平坦地での畑作のために掘られた近・現代の根切り溝である可能性が考えられる。

SD03 (第59・60図、P L 13・14・35)

南側調査区の11N・110区から中央調査区の12M区にかけて検出されている。北側に位置するSD06の手前でL字状に屈曲するもので、後述するSD05を切って構築されている。南側と東側はさらに調査区外へ延びる。SD05のわずかに外側をめぐっており、一旦埋没したSD05をあらためて掘りなおしている可能性が高い。確認された規模は、東西長(6.20)m、南北長(23.20)m、幅0.46~1.50m、深さ0.41~1.05mである。南北方向の底部勾配は3.0°で南へ傾斜しており、中心軸方位はN-30°-Eを示す。覆土は締まらない。遺物は、縄文時代Ⅳ期の土器(1~4)と石器5が出土している。ほかに自然石16点(0.20kg)がある。

1は深鉢の口縁部で、2本一組となる結節沈線文、連続したC字爪形文、単独で刺突されたC字爪形文が施文される。2は細い隆帯によって文様が描出される。3は沈線による鋸歯状文が複数列垂下する。4は無文の口縁部片で、頸部には太い沈線が1条めぐる。3・4は胎土に雲母片を含む。

5は不定形石器である。左側縁を中心に両面調整による刃部を作出している。サイド・スクレイパー的な機能が想定される。また、上端にはバルブの高まりを利用して、部分的に正面から急角度の調整を加えてスクレイパー的な刃部を作り出している。頁岩製。

SD04 (第59図、P L 13・14・35)

南側調査区の11N・110区に位置する。南北方向に直線的に延びる溝で、SD03・05を切って構築される。断面形は壁がほぼ垂直に立ち上がる箱形を呈しており、ほかの溝とは形状が異なる。北側は中央調査区までは延びていない。確認された規模は、長さ(7.04)m、幅0.48~0.64m、深さ0.18~0.28mである。底部の勾配は2.0°で南へわずかに傾斜する。中心軸方位はN-26°-Eを示す。覆土は締まらない。遺物は、縄文時代Ⅳ期を主体とする土器(1~3)が出土している。

1は深鉢の口縁部で、口唇部直下には平行沈線が1条めぐる。2は隆帯が剥離して欠けているが、両側にD字爪形文をとまなう。沈線による鋸歯状文が併走する。3は無節縄文が施文される。

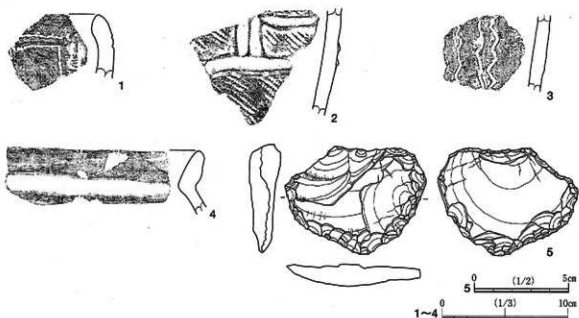
SD05 (第59・60図、P L 13・14・35)

南側調査区の11N・110区から中央調査区の12M区にかけて検出されている。北側に位置するSD06の手前でL字形に屈曲する溝で、前述したSD03によって切られる。南側と東側はさらに調査区外へ延びる。確認された規模は、東西長(5.00)m、南北長(22.40)m、幅(1.40)m、深さ0.22~0.64mである。南北方向の中心軸方位はN-25°-Eを示す。南北方向の底部勾配は5.0°で南へ傾斜する。また、南側は一段深く東側にL字状に掘りなおされた痕跡がみとめられる。遺物は、中・近世の土師器Ⅲ(1)、縄文時代Ⅰ期の土器(2)とⅣ期の土器(3~8)、石器(9~10)が出土している。ほかに自然石30点(1.82kg)がある。

1は土師器Ⅲである。境形を呈すると思われるが、細片のため詳細は不明である。

2は外面に貝殻条痕文が施されるもので、胎土に繊維を含む。3は縄文が施された隆帯によって口縁部の区画がなされ、区画内には平行沈線による鋸歯状文が施文される。4・6は複数並列した半隆起線、連続した

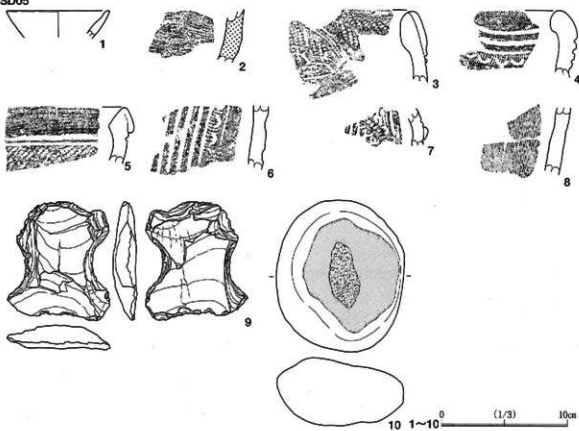
SD03



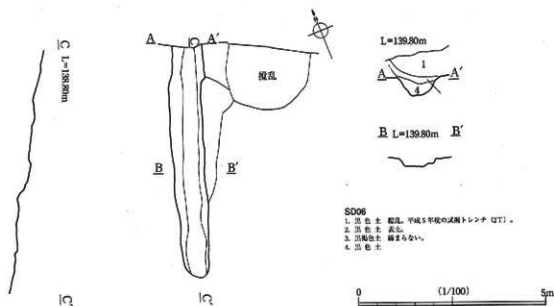
SD04



SD05



第60圖 SD03、SD04、SD05出土遺物



第61図 SD06

C字爪形文、単独で刺突されたC字爪形文列が施文される。5は口唇部直下に平行沈線が1条めぐり、7は単独で刺突されたC字爪形文列をともなう隆帯が施される。器面には複数並列した平行沈線が施文される。8は木口状工具による条痕文が施文される。

9は分銅形の打製石斧である。刃部は直線的で典型的な片刃となり、直刃斧的な形状を呈する。おそらくは刃部が欠損したものを再利用しているものと思われる。細粒砂岩製。10は磨石と敲石の複合したもので、正面中央に磨痕と敲打痕がみとめられる。凝灰岩製。

SD06 (第61図、P L14)

中央調査区の12L区に位置する。SD03・05の南北延長上にある溝で、北側はさらに調査区外へ延びる。確認された規模は、長さ(6.00)m、最大幅1.40m、深さ0.29mである。底部の勾配は 8.0° で南に傾斜する。中心軸方位はN- 17° -Eを示す。遺物は、頁岩の剥片1点、自然石2点(212kg)が出土している。

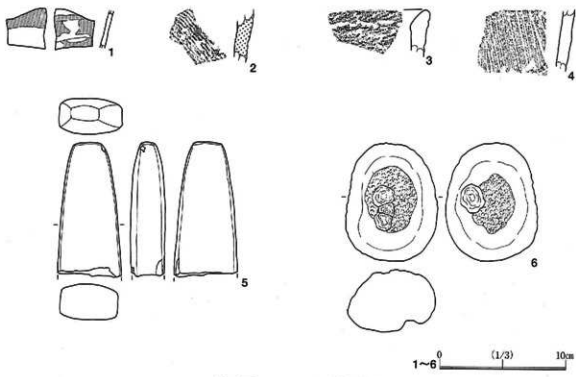
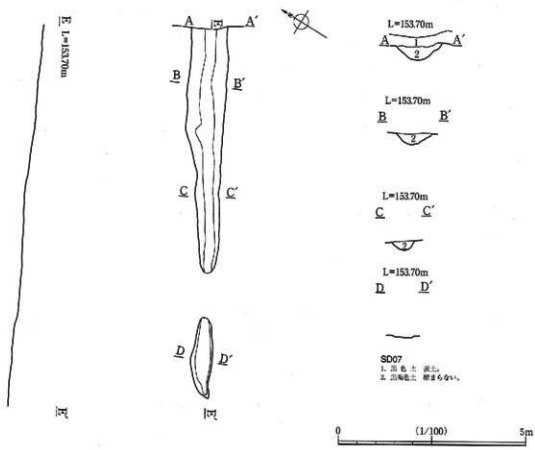
SD07 (第62図、P L14・36)

北側調査区の11C区に位置する。台地頂部から谷に向かって直線的に延びる溝で、北東側はさらに調査区外へ延びる。確認された規模は、長さ(9.75)m、最大幅1.03m、深さ0~0.32mである。底部の勾配は約 5.0° で南西側へ傾斜する。中心軸方位はN- 42° -Eを示す。遺物は、近世陶器(1)のほか、縄文時代Ⅱ期の土器(2)とⅣ期と思われる土器(3・4)、石器(5・6)が出土している。ほかに小粒の自然石117点(0.49kg)がある。

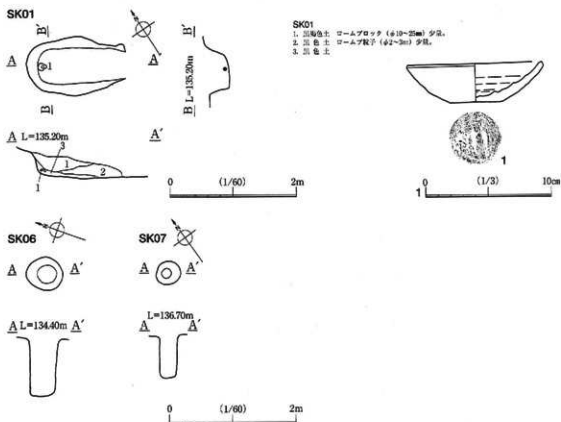
1は土瓶と思われる近世の陶器である。内面に顕著なロクロ目を残す薄手のもので、外面上部には緑色を呈する透明釉が掛かり、下部は露胎となる。露胎部には煤の付着がみとめられる。

2は捻糸文が施される。胎土に繊維を含む。3は口唇部直下に細い竹管状工具による不連続な押し引き文が施されるもので、単節縄文を地文とする。4は複数並列する平行沈線が施される。

5は定向式の磨製石斧で、刃部が欠損する。閃緑岩製。6は敲石と凹石の複合したもので、正裏面にそれ



第62図 SD07・同出土遺物



第63図 SK01・同出土遺物、SK06、SK07

それぞれ打痕と凹痕がみとめられる。安山岩製。

C. 土坑

SK01 (第63図、P L 12)

南側調査区の90区に位置する。平面形は指円形を呈する。長径(1.62)m×短径0.90m、深さ0.50mである。遺物は、北西側の覆土下層から土師器皿(1)が1点出土している。

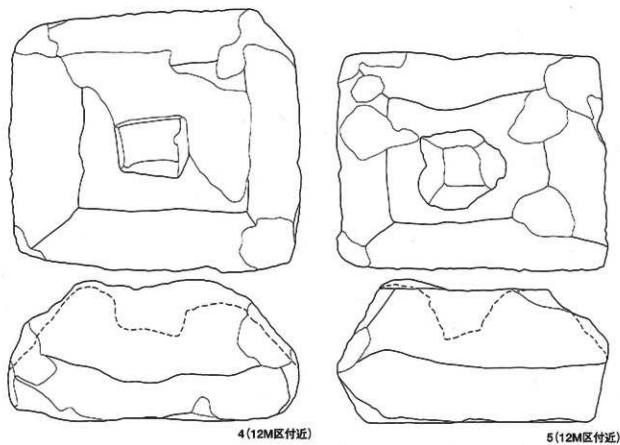
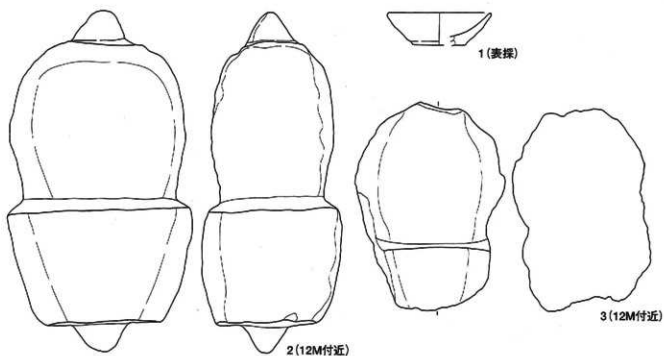
1は土師器皿で、いわゆる境形を呈する。外面はナデ、内面にはロクロ目が強く残る。口径(10.6)cm、器高3.2cm、底径4.0cmで、底部には回転糸切り痕を残す。浅黄褐色を呈し、胎土には径2～5mmの石英・長石粒を少量含む。体部2/3を欠損する。中世末から近世の所産と思われる。

SK06 (第63図)

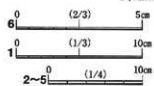
南側調査区の11N区に位置する。柱穴状を呈し、規模は長径0.58×短径0.52m、深さ0.92mである。遺物は出土していない。

SK07 (第63図)

南側調査区の11N区に位置する。柱穴状を呈し、規模は長径0.40×短径0.38m、深さ0.67mである。遺物は出土していない。



6 (10E14区)



第64図 遺構外出土遺物

D. 遺構外出土遺物 (第64図、P L36)

1は土師器皿で、いわゆる堦形を呈する。内外面にナデ調整が施される。口径(8.3)cm、器高(2.5)cm、底径(4.0)cmである。浅黄橙色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。小破片である。北側調査区から表採されている。

2～5は五輪塔である。2・3は一体整形された風・空輪である。横断面形は円形でなく楕円形を呈する。4・5は火輪である。いずれも中央調査区の12M区付近からばらばらに出土したものである。ほかに破損の著しい地輪1点、火輪1点、風・空輪1点があり、少なくとも3基の五輪塔が存在した可能性を示唆している。これらは上部の風・空輪(半月・団形)を一石でつくった四石五輪の形状であったと推測される。石材は凝灰岩で、現在の大谷産のものに比べると品質が悪い。風化により遺存状況が不良であるため、火輪(屋根・笠)の反り返りなど造立時期を示すような特徴に乏しい。出土地点の周囲では畑作や植林が行われており、原位置から移動されたものである可能性が高い。

6は寛永通宝である。背面に11波の波紋をもつ真鍮製の四文銭で、外径は28mmである。北側調査区の10E14区から出土した。真鍮製の四文銭は、1768年(明和5)に鑄造が開始され、最初は波紋が21波であったが、翌1769年(明和6)に11波に変更されている。その後、文政期(1818～1830)と安政期(1854～1860)にも鑄銭されている〔永井1996〕。

表2 石器観察表(1)

遺構番号	遺物番号	注記番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
S102	15	SI02-5	磨製石斧	細粒砂岩	(6.5)	(2.4)	1.3	(28.5)	小形品、刃部欠損
S102	16	SI02	磨製石斧	蛇紋岩	(5.9)	2.4	0.8	(18.1)	小形品、刃縁欠損
S102	17	SI02	磨石+敲石	デイサイト	7.1	6.7	5.7	3744	
S102	18	SI02-13	磨石	安山岩	8.3	5.3	5.8	304.8	
S104	4	SI04-PA	磨製石斧	砂岩	(9.9)	4.7	2.7	(216.9)	基部欠損
S104	5	SI04	磨石	石英	5.9	6.3	5.0	267.9	
S105	4	SI05	凹石	安山岩	(13.3)	(9.0)	(10.2)	(1,520.0)	大半欠損
S107	27	SI07-136	打製石斧	頁岩	11.4	6.5	3.4	211.9	撥形、未製品か
S107	28	SI07-61	磨製石斧	砂岩	8.0	3.3	1.9	60.3	小形品、未製品
S107	29	SI07-134	磨石	安山岩	11.1	8.1	6.2	830.6	
S107	30	SI07-147	磨石+敲石	安山岩	12.3	8.8	4.4	716.4	
S107	31	SI07-57	磨石+敲石	砂岩	9.7	6.6	3.5	349.2	
S107	32	SI07-130	磨石	砂岩	8.2	7.1	4.3	263.8	
S107	33	SI07-132	敲石	花崗岩	10.0	7.7	7.1	624.4	
S107	34	SI07-55	台石	凝灰岩	(17.9)	(25.2)	(10.2)	(6,050.0)	大半欠損
S108	6	SI08-7	磨石+敲石	砂岩	17.9	7.7	3.3	(780.8)	一部欠損
S109	20	SI09	不定形石器	頁岩	6.8	4.8	1.6	50.6	サイド・スクレイパー
S109	21	SI09-59	磨石+敲石	安山岩	11.2	9.2	3.9	573.3	
S109	22	SI09-11	磨石+敲石	輝石安山岩	(8.1)	8.7	5.0	(482.7)	1/2欠損
S109	23	SI09-1	磨石+敲石	花崗閃緑岩	13.1	13.0	4.7	963.8	
SK04	14	SK04	敲石	安山岩	13.2	7.9	4.1	681.2	
SK04	15	SK04	石種類	粘板岩	(14.2)	2.2	2.3	(97.0)	下端欠損
SK11	4	SK11-20	石皿+凹石	安山岩	(23.0)	(9.8)	9.8	(2,740.0)	大半欠損
SK14	2	SK14	磨製石斧	砂岩	(10.4)	5.3	3.5	(294.2)	基部欠損
SK15	5	SK15	敲石	安山岩	12.2	7.4	4.2	535.5	
SK20	7	SK20	磨製石斧	細粒砂岩	(4.2)	(1.5)	(1.3)	(11.9)	小形品、3/4欠損
SK20	8	SK20	不定形石器	頁岩	11.2	5.0	2.5	139.3	サイド・スクレイパーか
SK20	9	SK20-150	磨石+敲石	砂岩	(10.1)	(7.8)	(4.4)	(367.0)	大半欠損
SK20	10	SK20-132	磨石+敲石	圧砕岩	(9.0)	9.4	3.4	(544.9)	下端欠損
SK20	11	SK20	磨石+敲石	安山岩	13.2	8.9	3.9	(671.0)	8・10 接合
SK20	12	SK20-77	磨石+敲石	安山岩	11.7	10.3	4.2	(638.6)	
SK20	13	SK20-151	石皿+凹石	安山岩	(27.6)	(24.1)	(10.9)	(6,320.0)	
SK21	3	SK21-14	敲石	輝石安山岩	11.4	4.5	3.5	292.3	上下端部に敲打痕
SK21	4	SK21-19	台石	石英凝灰岩	(16.8)	(12.7)	(6.1)	(1,210.0)	大半欠損
SK23	8	SK23-5	敲石	安山岩	8.4	7.4	5.6	505.6	
SK23	9	SK23	磨石+敲石	安山岩	11.2	6.3	4.0	408.2	
SK23	10	SK23	磨石+敲石	安山岩	14.6	8.8	3.2	676.8	
SK23	11	SK23	磨石	安山岩	15.5	13.8	8.8	2,390.0	
SK23	12	SK23	石皿+凹石	安山岩	(11.7)	(14.7)	(6.1)	(890.2)	大半欠損
SK25	4	SK25	打製石斧	凝灰岩	11.7	6.5	3.3	298.1	分崩形
SK25	5	SK25	磨石	石英	6.7	6.9	3.7	267.9	
SK29	8	SK29	打製石斧	珪質頁岩	4.2	1.5	1.0	7.5	小形
SK29	9	SK29-9	磨石+敲石	砂岩	10.3	6.1	3.4	12.6	上下端部に両面から打ち欠き
10A区	16	10A区-20	打製石斧	頁岩	(5.3)	5.0	2.1	(62.1)	未製品、基部欠損
10A区	17	10A区-55	敲石	凝灰岩	12.3	9.9	2.3	308.7	表皮付き剥片を使用
遺構外	92	11B23区	石鏃	チャート	(1.8)	1.9	0.3	(0.6)	凹基無蒸籠、先端部欠損
遺構外	93	11B8区	不定形石器	黒曜石	2.7	3.1	0.5	3.6	石鏃未製品か
遺構外	94	11B23区	不定形石器	チャート	2.7	3.4	0.6	6.8	石鏃未製品か
遺構外	95	11C3区	不定形石器	チャート	4.0	2.9	1.0	11.9	サイド・スクレイパー
遺構外	96	10C8区	不定形石器	チャート	5.3	3.0	1.2	22.1	
遺構外	97	10A24区	不定形石器	頁岩	9.5	3.7	1.6	66.9	サイド・スクレイパー
遺構外	98	10A15区	楕形石器	玉髄	3.3	4.0	1.3	19.7	
遺構外	99	表探	石核	メノウ	5.0	4.9	5.4	170.9	全体に多面体的な磨痕あり
遺構外	100	11N区	打製石斧	粘板岩	12.6	5.1	0.9	82.3	撥形
遺構外	101	表探	打製石斧	頁岩	12.6	5.0	1.6	126.1	撥形
遺構外	102	10N17区	打製石斧	安山岩	(10.4)	7.7	1.6	(101.1)	分崩形、刃部欠損
遺構外	103	9N7区	打製石斧	デイサイト	12.1	7.6	2.1	212.9	分崩形

表3 石器観察表(2)

遺構 番号	遺物 番号	注記番号	器 種	石 材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (cm)	備 考
遺構外	104	10D4区	打製石斧	安山岩	10.4	7.6	2.3	173.7	分銅形
遺構外	105	表採	打製石斧	デイサイト	10.3	7.0	1.9	124.2	分銅形
遺構外	106	表採	打製石斧	デイサイト	9.9	7.3	1.7	152.6	分銅形
遺構外	107	8N5区	打製石斧	デイサイト	10.1	7.7	0.9	108.0	分銅形
遺構外	108	表採	打製石斧	デイサイト	(5.8)	6.2	1.5	(78.9)	分銅形、基部欠損
遺構外	109	10N13区	打製石斧	デイサイト	(4.6)	5.5	1.0	(36.0)	分銅形、基部欠損
遺構外	110	10C2区	磨製石斧	安山岩	(8.3)	(3.7)	1.9	(90.3)	定角式、刃部欠損
遺構外	111	13E6区	磨製石斧	砂岩	(7.6)	(3.9)	2.9	(140.1)	定角式、刃部欠損
遺構外	112	表採	磨製石斧	閃緑岩	(8.7)	(5.0)	2.9	(243.3)	定角式、刃・基部欠損
遺構外	113	12G20区	磨製石斧	砂岩	(4.3)	(5.3)	3.2	(146.1)	定角式、刃・基部欠損
遺構外	114	9N16区	磨製石斧	緑色岩	(9.5)	5.6	3.2	(291.3)	定角式、基部欠損
遺構外	115	表採	礫石	砂岩	(10.9)	8.4	4.0	(569.1)	下端欠損
遺構外	116	12G20区	礫石	片麻岩	8.8	7.5	3.1	275.5	
遺構外	117	表採	礫石	安山岩	14.2	10.9	4.7	805.3	
遺構外	118	11C3区	磨石+礫石	安山岩	(7.0)	(8.3)	(3.6)	(248.6)	1/2欠損
遺構外	119	表採	磨石+礫石	デイサイト	8.8	8.1	6.7	649.0	
遺構外	120	10A21区	磨石+礫石	安山岩	8.4	6.9	3.7	270.1	
遺構外	121	表採	磨石+四石	安山岩	10.3	8.7	5.6	700.9	
遺構外	122	8Q8区	礫石	デイサイト	8.0	6.4	3.9	285.0	
遺構外	123	9B15区	磨石	安山岩	10.3	7.4	4.3	537.1	
遺構外	124	10D20区	磨石	凝灰岩	12.5	8.5	9.3	(1,057.9)	
遺構外	125	10D17区	磨石	安山岩	8.8	6.4	6.4	342.7	
遺構外	126	10D4区	磨石	砂岩	(4.9)	(3.0)	(3.7)	(71.0)	多面体的な磨痕、大半欠損
遺構外	127	11C3区	磨石+礫石	砂岩	(4.7)	(5.3)	(2.9)	(75.7)	1/2欠損
遺構外	128	表採	礫石	砂岩	16.3	7.8	6.2	1,240.0	
遺構外	129	13G3区	石皿+礫石	砂岩	33.0	31.1	2.5	2,450.0	
遺構外	130	表採	石皿+礫石	安山岩	(17.3)	19.5	4.0	(1,270.0)	1/2欠損
遺構外	131	表採	石皿+四石	安山岩	(22.7)	(26.2)	9.3	(3,680.0)	大半欠損
遺構外	132	10A21区	白石	凝灰岩	21.5	12.2	5.8	2,380.0	敲打痕、擦痕
遺構外	133	表採	石杵類	粘板岩	15.5	3.7	2.0	197.2	上端欠損
S B 0 1	1	SB01-P3	磨石	安山岩	16.1	9.7	4.0	796.4	
S D 0 3	5	SD03-N11区	不定形石器	頁岩	5.7	7.5	1.2	63.3	サイド・スクレイパー
S D 0 5	9	SD05-N11区	打製石斧	細粒砂岩	9.3	8.1	1.9	154.8	分銅形
S D 0 5	10	SD05-M12区	磨石+礫石	凝灰岩	11.9	10.2	5.4	900.0	
S D 0 7	5	SD07	磨製石斧	閃緑岩	(10.5)	(5.0)	2.8	(253.7)	定角式、刃部欠損
S D 0 7	6	SD07	礫石+四石	安山岩	9.3	7.3	4.9	476.5	
遺構外	近2	12MR付近	五輪塔	凝灰岩	35.5	19.6	14.8	10,040.0	風・空輪
遺構外	近3	12MR付近	五輪塔	凝灰岩	(21.7)	16.0	14.7	(3,450.0)	風・空輪
遺構外	近4	12MR付近	五輪塔	凝灰岩	14.8	30.5	27.6	(7,000.0)	火輪
遺構外	近5	12MR付近	五輪塔	凝灰岩	15.1	28.6	23.1	(8,290.0)	火輪

第V章 まとめ

本遺跡は、宇都宮市西部を南北に貫流する姿川の右岸台地上に立地しており、縄文時代中期を主体に、中・近世の遺構と遺物が検出されている。以下、時代別に概略を述べてまとめる。

第1節 縄文時代

阿玉台IV式～加曾利E I式期の集落跡を主体に検出されている。遺構は、竪穴住居跡10軒、焼土跡1基、土坑3基、遺物集中地点1か所である。遺物は、断続的ながら早期前半から中期後葉にいたる資料が得られている。本遺跡は、出土した土器から以下の5時期（I～V期）に大別した。

I期：早期の土器をもって本期とした。本遺跡からは1点のみであるが、早期前半の稲荷原式に比定される土器が出土している（遺構外-64）。熱系文系土器群の終末期に位置付けられるもので、本遺跡の下限を示す資料である。ほかに条痕文系土器が3点出土している（遺構外-1・2、SD05-02）。数量的にはわずかであるが、前者は北側調査区（台地頂部付近）、後者は南側調査区（南西側裾部）から出土している。該期の遺構は検出されていないが、時期ごとに異なる分布を示す可能性がある。

II期：前期前半の羽状縄文系土器をもって本期とした。いずれも細片であるが、胎土に繊維を含有し、内外面に磨き調整が施されるもので、関山式と考えられる。北側調査区から2点（遺構外-3・11）、南側調査区から7点（遺構外-4～10）、西側調査区から1点（遺構外-8）出土しており、南西側裾部に偏在する傾向がみえる。該期の遺構は検出されていない。

III期：本期は中期前葉の時期を想定して設定した。このうち幅年の位置が明確に把握できるものとして、大木7b式に比定される土器が北側調査区から出土している（遺構外-15）。遺構は検出されていない。

IV期：阿玉台IV式を主体に、ほぼ併行関係にあると考えられる大木8a式中段階、中幹式の土器をもって本期とした。後続するV期とともに本遺跡の主体をなす時期であるが、出土した土器には、本県を取り巻くいくつものタイプが存在しており、交錯した様相を呈している。本期に帰属すると考えられる遺構は、SI01・02～04・08・10、SK02・04・05・08～10・12・13・18・23～25・29・30である。このうちSI01・02の2軒は、いわゆる「二段床構造住居址」（今橋1985）と考えられる。各遺構は、台地頂部を中心に南西側裾部まで広範な分布状況を示す。

V期：加曾利E I式を主体に、これと併行関係にある大木8a式新段階～大木8b式の土器をもって本期とした。これにわずかであるが極細文土器（浄法寺タイプ）、隆帯貼付文土器などが加わる。本期に帰属すると考えられる遺構は、SI07・09、SK11・15・19・20・22・26・33・34である。これらの遺構は、IV期とは異なり、台地頂部に密集して分布する。

石器類は、総数159点が出土している。その内訳は、石鏃1点（0.6%）、楔形石器1点（0.6%）、サイド・スクレイパー3点（1.9%）、不定形石器13点（8.2%）、石核5点（3.1%）、剥片50点（31.4%）、打製石斧15点（9.4%）、磨製石斧12点（7.5%）、砥石2点（1.3%）、磨石13点（8.2%）、磨石+砥石19点（11.9%）、砥石9点（5.7%）、砥石+凹石4点（2.5%）、凹石1点（0.6%）、石皿+凹石4点（2.5%）、石皿+砥石2点（1.3%）、台石3点（1.9%）、石棒類2点（1.3%）である。

本遺跡からは、石鏃など狩猟具としての石器、動物の解体や加工に必要なスクレイパー、サイド・スクレイパーなどの石器が極端に少ない。これに対して、磨石や砥石、凹石、石皿など植物にかかわる粉食や加工に使われたと考えられる石器は数多く出土している。姿川対岸の台地上に位置する御城田遺跡（芦澤・石橋

ほか1987)と同様、石器組成の面からみて植物依存の傾向が高かったことが窺われる。

また、これら石器類のほかにも、北側調査区からは多量の自然石が遺構内外から出土している。出土した自然石は、総個体数3,423点、総重量831kgである。大きさは拳大程度のものが多いが、もっとも大きなものは重量74kgあり、ほかに50kg以上の大石が少なからず存在する。これに対して中央・南側調査区から出土した自然石は、総個体数83点、総重量8kgと僅少であり、北側調査区とは状況が異なることがわかる。調査区内からは、石囲炉や配石遺構といった石を使った構築物は検出されていない。SI07やSK29など遺構内からの出土状況をみる限り、いずれも台地頂部から投棄されたようなかたちで出土している。これらの自然石は、台地上に礫層の露頭がないことから、いずれも姿川低地帯から台地頂部へ搬入されたものと考えられる。調査区外であるため状況は不明であるが、すべてが石器の原材料とは考えられず、何らかの理由で多量の自然石を必要としたものと思われる。

北側調査区の北東外側には、わずかながら台地頂部に平坦面が存在しており、IV・V期の集落は、ここを中心に営まれたものと推測される。今回の北側調査区で検出された遺構群は、同集落跡の西端にあたるものとする。

第2節 中・近世

中・近世の遺構としたものは、南西側裾部(中央・南側調査区)を中心に検出された掘立建物跡2棟、溝跡7条、土坑3基である。

掘立建物跡は、南側調査区から重複して2棟検出されており、主軸方位と規模がほぼ一致することから建て替えの可能性がある。機能年代を示すような出土遺物がなく、近接する溝跡とも平行関係にないことから、遺構の時期については特定できない。

溝跡は7条検出されており、南側調査区の谷側から検出されたSD01・02、南側調査区から中央調査区へかけて延びるSD03～05、これに関連して中央調査区から検出されたSD06、北側調査区から単独で検出されたSD07がある。いずれも江戸時代以降の所産と思われるが、概して出土遺物が少なく、詳細な時期については不明である。

このうち南側調査区および中央調査区から検出されたSD03～06は、前述した安生家屋敷跡の周囲をめぐる溝である可能性が考えられる。調査区の南東側に位置する同屋敷跡部分は、斜面を削平して整地を行っている。整地面は3段からなり、このうち調査区に含まれるのは上・中段である。上段と中段の段差は約1mあり、この上段面をめぐる溝がSD06、中段面をめぐる溝がSD03～05である。このうちSD03・06の外側には、それぞれ掘削された残土がそのまま積み上げられており、一見して低い土塁状を呈するが、全体に締まりがなく脆弱である。現況では、これらの溝は完全には埋没しきっておらず、地表面上にわずかな凹みとして確認できた。屋敷が建っていたとされる中段面は、特に削平による整地が顕著であり、全体に平坦面をなしている。最近まで畑として利用されていたことを考えると、後世の削平がおよんでいる可能性も否定できない。同屋敷跡部分の試掘調査(平成11年度1T・2T)では、溝跡以外の遺構、遺物は検出されていない。

土坑は、南側調査区から3基検出されている。このうちSK01からは、中世末から近世の所産と思われる土師器重が1点出土している。ほか2基は柱穴状を呈するもので、時期・性格ともに不明である。

引用・参考文献

- 赤山容造・小宮俊久 1990 『三原田遺跡』第2巻 群馬県企業局
- 赤石澤亮・神野安伸 1991 『竹下遺跡Ⅱ』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第27集 宇都宮市教育委員会
- 芦澤清八 1982 『栃木県における阿玉台式土器の細分』『栃木県考古学会誌』第7集 栃木県考古学会
- 芦澤清八・石橋知明ほか 1987 『御城田遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第68集 栃木県文化振興事業団
- 芦澤清八 1994 『御城田遺跡』『縄文時代研究事典』東京堂出版
- 五十嵐利勝 1984 『栃木県奥川流域の考古学調査①』『下総考古学』7 下総考古学研究会
- 今橋浩一 1985 『阿玉台文化の一側面—二段床構造住居址の検討—』
『古代探叢Ⅱ—早稲田大学考古学会創立35周年記念考古学論集—』早稲田大学出版部
- 宇都宮市教育委員会 1983 『宇都宮の遺跡』宇都宮市埋蔵文化財等詳細分布調査報告書 宇都宮市教育委員会
- 宇都宮市教育委員会 1997 『宇都宮市遺跡地図(改訂版)』宇都宮市教育委員会
- 大村裕 1998 『中時式土器の再検討』『中時中葉から後葉の諸様相』第11回縄文セミナー 縄文セミナーの会
- 大和久良平・堀部夫 1972 『栃木県の考古学』郷土考古学叢書7 吉川弘文館
- 北関東興発株 1999 『(仮称)宗教法人大蓮寺移設新築工事に伴う地質調査報告書』
- 子和清水貝塚発掘調査団 1978 『子和清水貝塚 遺物図版編1』松戸市文化財調査報告第8集 松戸市教育委員会
- 下総考古学研究会 1976 『下総考古学』6 下総考古学研究会
- 下総考古学研究会 1985 『<特集>勝坂式土器の研究』『下総考古学』8 下総考古学研究会
- 下総考古学研究会 1998 『<特集>中時式土器の再検討』『下総考古学』15 下総考古学研究会
- 篠原正 1978 『新橋遺跡出土の阿玉台式土器の施文について』『新橋遺跡発掘調査報告』富里村史編纂委員会
- 鈴木裕芳ほか 1980 『諏訪遺跡発掘調査報告書』日立市文化財報告第7集 日立市教育委員会
- 高橋保・高橋保雄ほか 1992 『関越自動車道関係発掘調査報告書 五丁歩遺跡・十二木遺跡』
新潟県埋蔵文化財調査報告書第57集 新潟県教育委員会
- 塚本節也 1992 『品川台遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第128集 栃木県教育委員会・栃木県文化振興事業団
- 塚本節也 1993 『食料貯蔵』『季刊 考古学』第44号 雄山閣出版
- 栃木県教育委員会 1968 『栃木県遺跡目録集成』栃木県教育委員会
- 永井久美男 1996 『日本出土総覧』1996年版 兵庫県埋蔵財調査会
- 服部敬史 1998 『土器器皿からみる中世後半期の東国』『橋崎彰一先生古稀記念論文集』(別刷)
- 堀部夫 1964 『栃木県の縄文遺跡(其の一)』『作新学院考古学資料室調査報告』1 作新学院
- 森孝彦 1998 『福島県内の大木&式土器について』『中時中葉から後葉の諸様相』第11回縄文セミナー 縄文セミナーの会
- 湯原勝美 1993 『八幡平遺跡発掘調査報告書』日立市文化財調査報告第33集 日立市教育委員会
- 赤石澤亮・神野安伸 1991 『竹下遺跡Ⅱ』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第27集 宇都宮市教育委員会

写真図版



1. 遺跡遠景（南より）



2. 北側調査区全景（北西より）

PL2



1. 中央調査区全景（南より）



2. 中央調査区全景（南東より）



3. 南側調査区南側全景（北より）



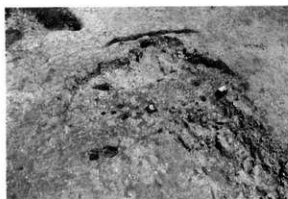
4. 西側調査区全景（南より）



5. 南側調査区全景（東より）



1. SI02全景 (北西より)



2. SI01全景 (南西より)



3. SI03全景 (南より)



4. SI04全景 (南西より)

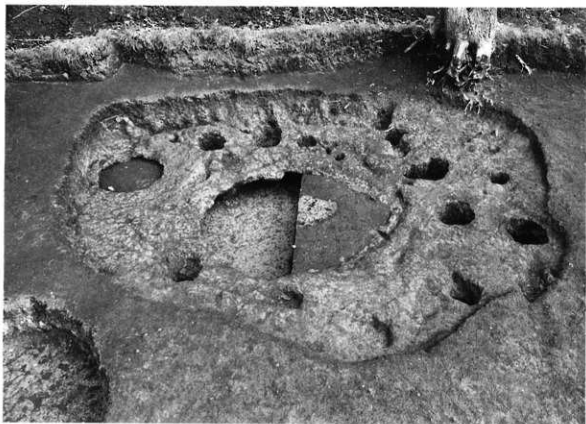


5. SI05全景 (北西より)

PL4



1. SI06全景 (西より)



2. SI07全景 (南西より)



1. SI07遺物出土状況（西より）



2. SI07遺物出土状況（北より）



3. SI08全景（西より）



4. SI08遺物出土状況（北より）



5. SI09全景（西より）

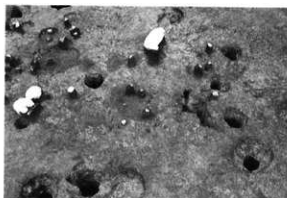
PL6



1. SI09遺物出土状況（南西より）



2. SI09遺物出土状況



3. SI10遺物出土状況（南西より）



4. SI09・10セクション（南より）



5. SI10全景（西より）



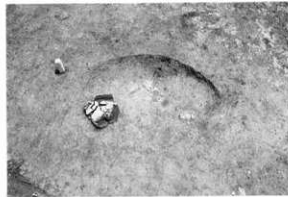
1. FP01全景 (南西より)



2. SK02全景 (南より)



3. SK02遺物出土状況 (西より)



4. SK03全景 (北西より)



5. SK03遺物出土状況 (北西より)



6. SK04全景 (南東より)



7. SK05全景 (北より)



8. SK08全景 (西より)

PL8



1. SK09全景 (北東より)



2. SK10全景 (南西より)



3. SK11・12セクション (南東より)



4. SK11全景 (北より)



5. SK12全景 (西より)



6. SK13全景 (南西より)



7. SK14全景 (南西より)



8. SK15・16全景 (西より)



1. SK17全景 (南西より)



2. SK18・26全景 (南西より)



3. SK19全景 (南西より)



4. SK20全景 (北東より)



5. SK21全景



6. SK22全景 (北より)



7. SK23全景 (北西より)

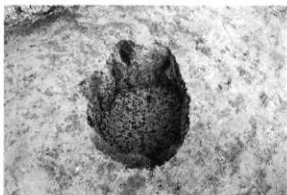


8. SK23遺物出土状況 (北西より)

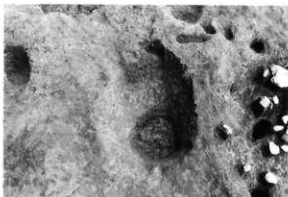
PL10



1. SK24全景 (北より)



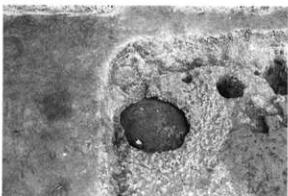
2. SK25全景 (西より)



3. SK27全景 (西より)



4. SK28全景 (西より)



5. SK29検出状況 (西より)



6. SK29全景 (南西より)



7. SK29セクション (南より)



8. SK29セクション (南西より)



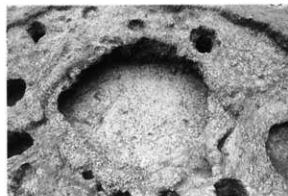
1. SK29セクション (南より)



2. SK29完掘 (西より)



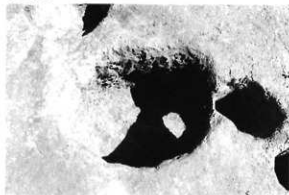
3. SK29遺物出土状況 (西より)



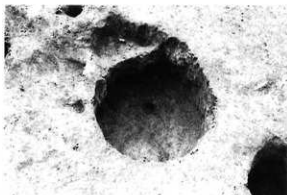
4. SK30全景 (北東より)



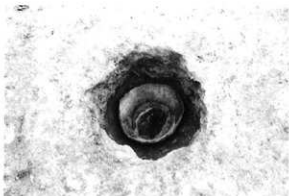
5. SK31全景 (西より)



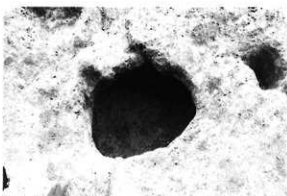
1. SK32全景 (西より)



2. SK33全景 (北東より)



3. SK34全景 (北西より)



4. SK35全景 (北東より)



5. 遺物集中地点 (10A区) 遺物出土状況 (南西より)



6. 遺物集中地点 (10A区) 全景 (南西より)



7. SK01全景 (南東より)



8. SK01遺物出土状況 (南東より)



1. SB01・02全景 (北西より)



2. SD01全景 (西より)



3. SD01セクション (西より)



4. SD01遺物出土状況



5. SD01遺物出土状況



6. SD02全景 (西より)



7. SD02セクション (西より)



8. SD03~05全景 (北東より)

PL14



2. SD03~04セクション (西より)



2. SD03・05全景 (南より)



3. 古屋敷全景 (北西より)



4. SD03・05検出状況 (南西より)



5. SD06検出状況 (南より)



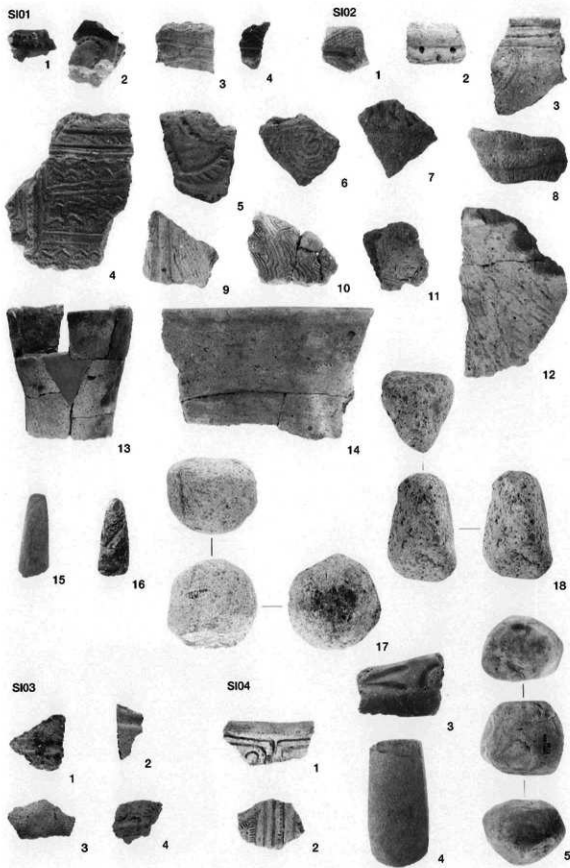
6. SD06全景 (南より)



7. SD07全景 (南西より)



8. 作業風景



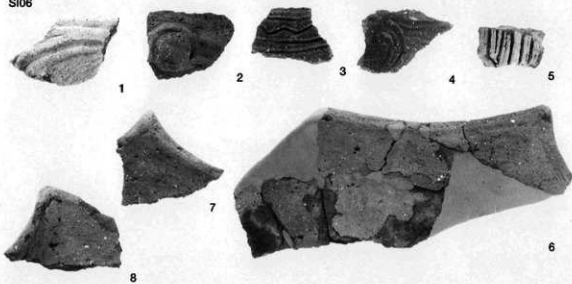
SI01・02・03・04出土遺物

PL16

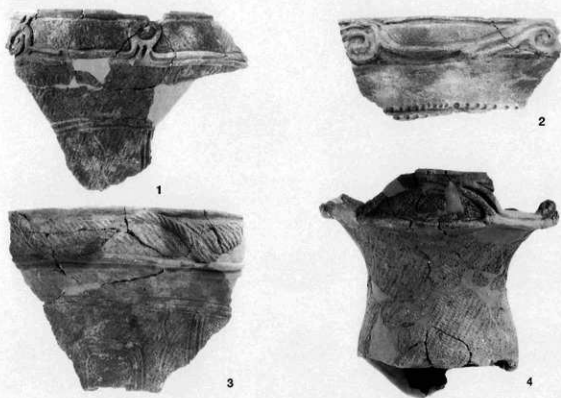
SI05



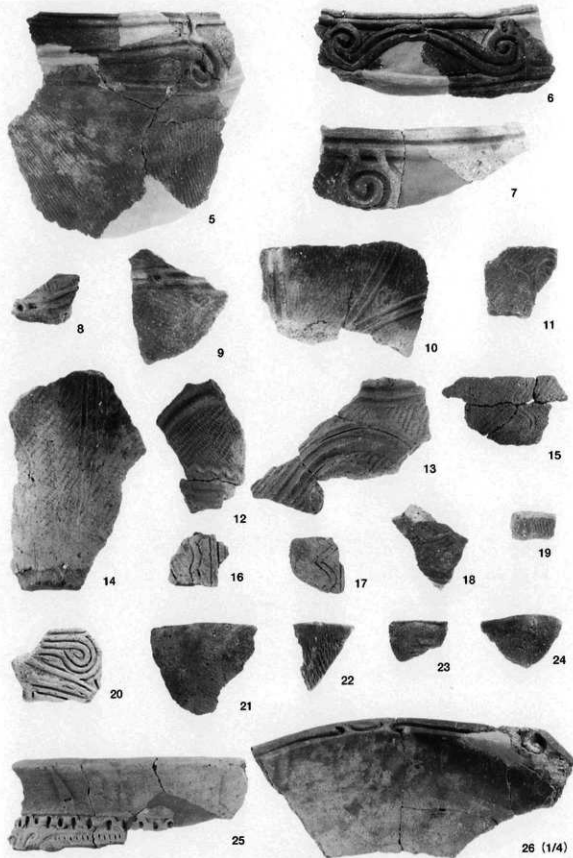
SI06



SI07

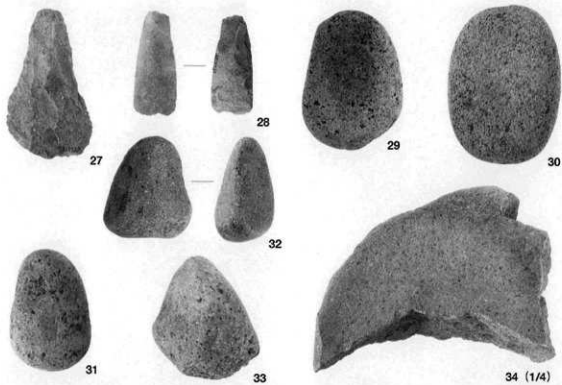


SI05・06・07出土遺物

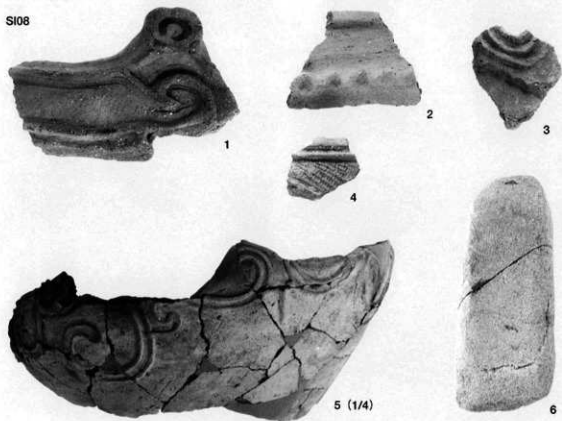


SI07出土遺物

PL18

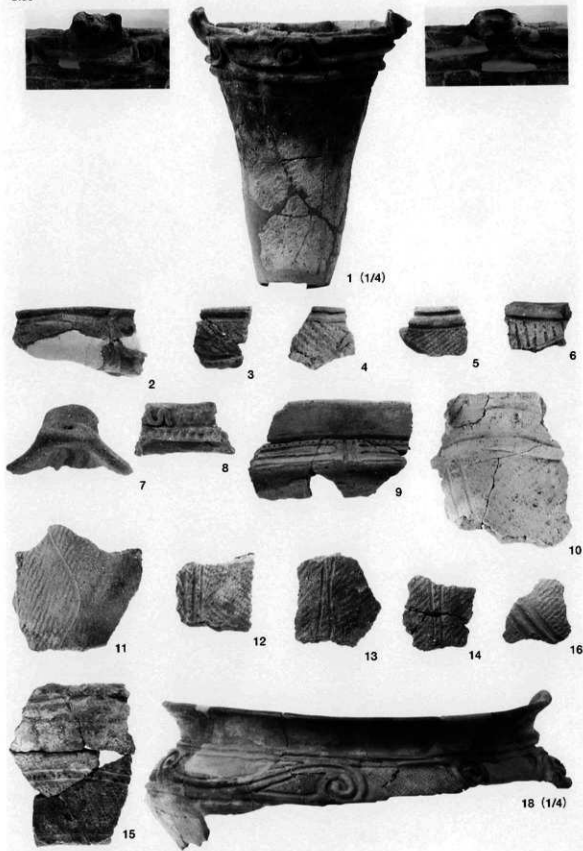


SI08



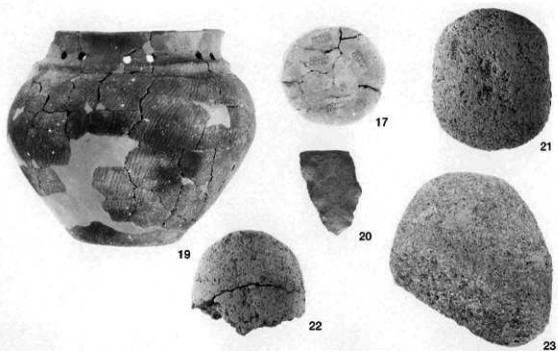
SI07・08出土遺物

SI09



SI09出土遺物

PL20



SI10



SK02

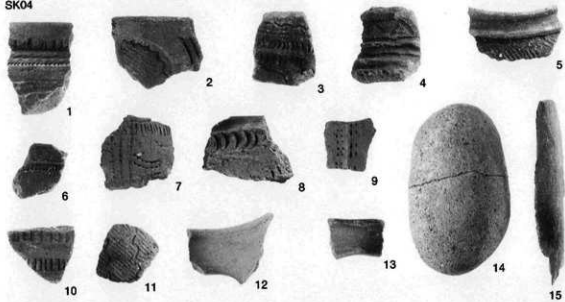


SK03



SI09・10、SK02・03出土遺物

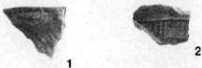
SK04



SK05



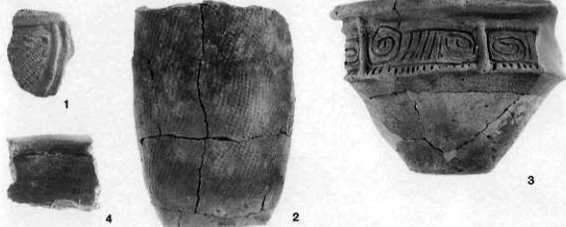
SK08



SK10

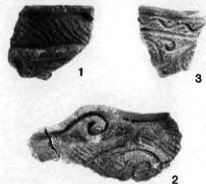


SK09

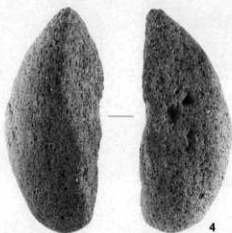


PL22

SK11



SK12



SK13



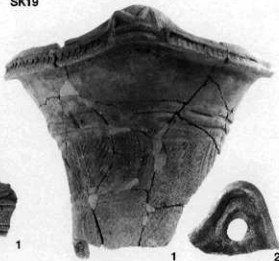
SK14



SK15



SK19



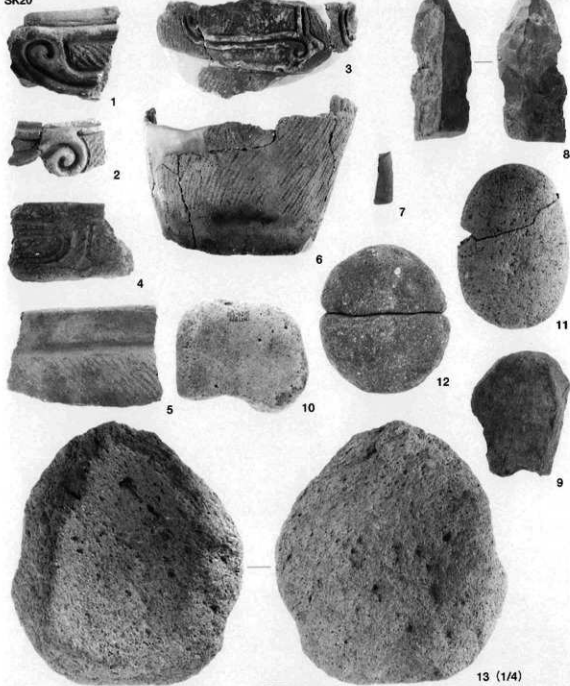
SK18



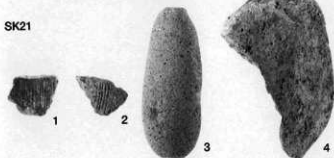
SK11・12・13・14・15・18・19出土遺物

PL23

SK20



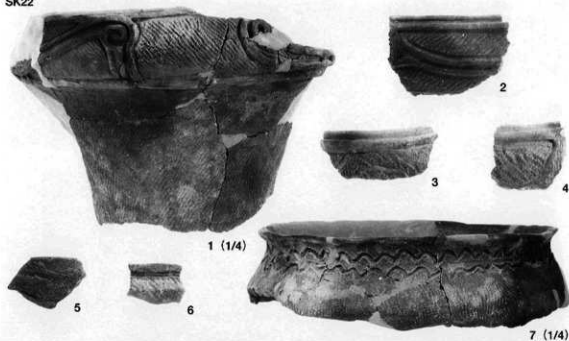
SK21



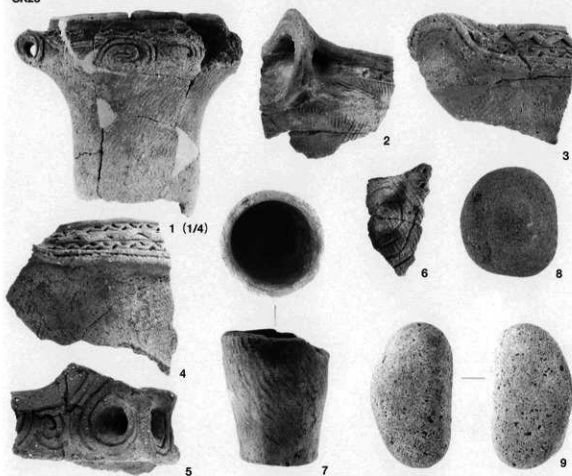
SK20・21出土遺物

PL24

SK22



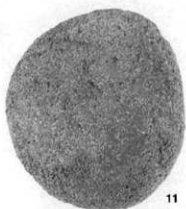
SK23



SK22・23出土遺物



10



11



12

SK24



1



2



3



4

SK25



1



2



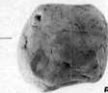
3



4



5



SK26



1



2



2



3



4



5



7



8



9



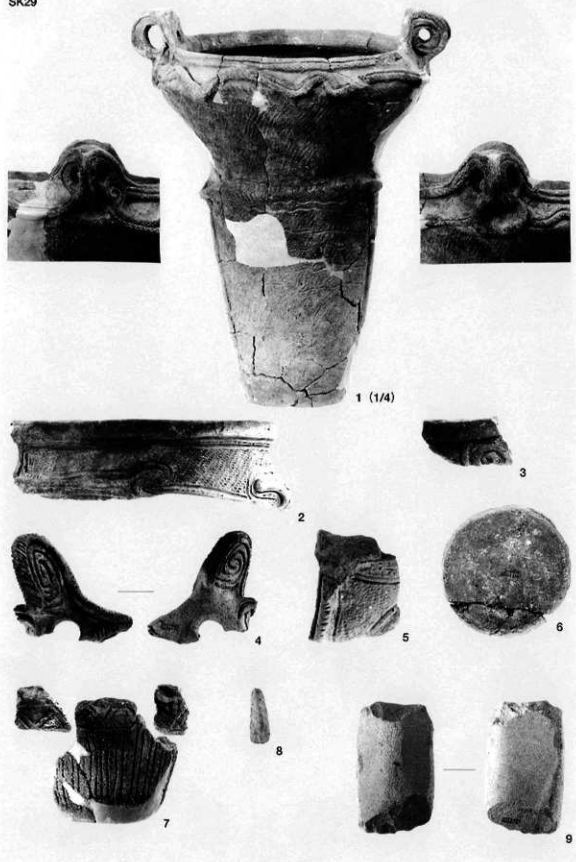
10



11

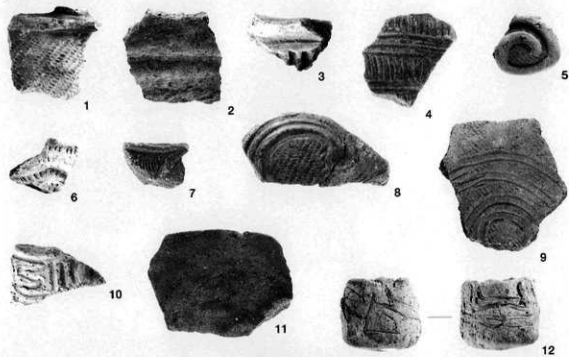
PL26

SK29



SK29出土遺物

SK30



SK31



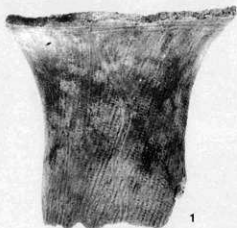
SK33



SK32

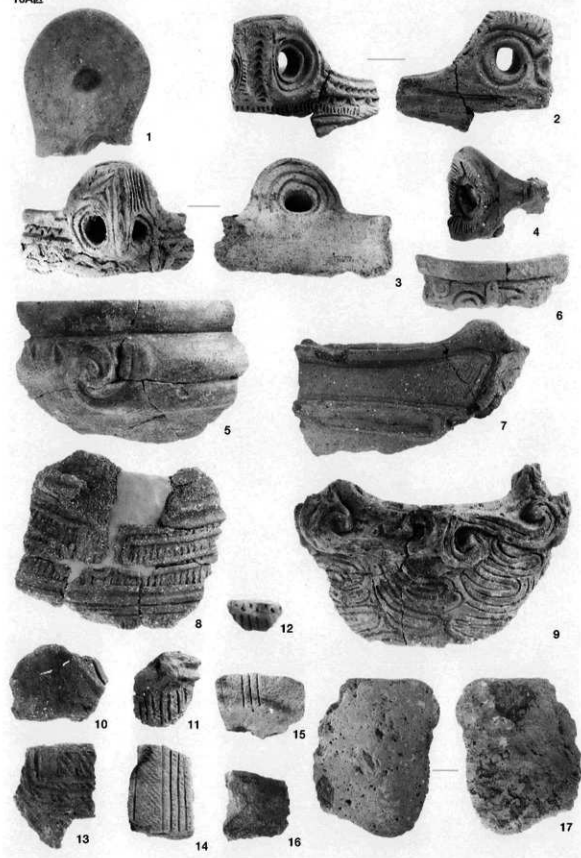


SK34

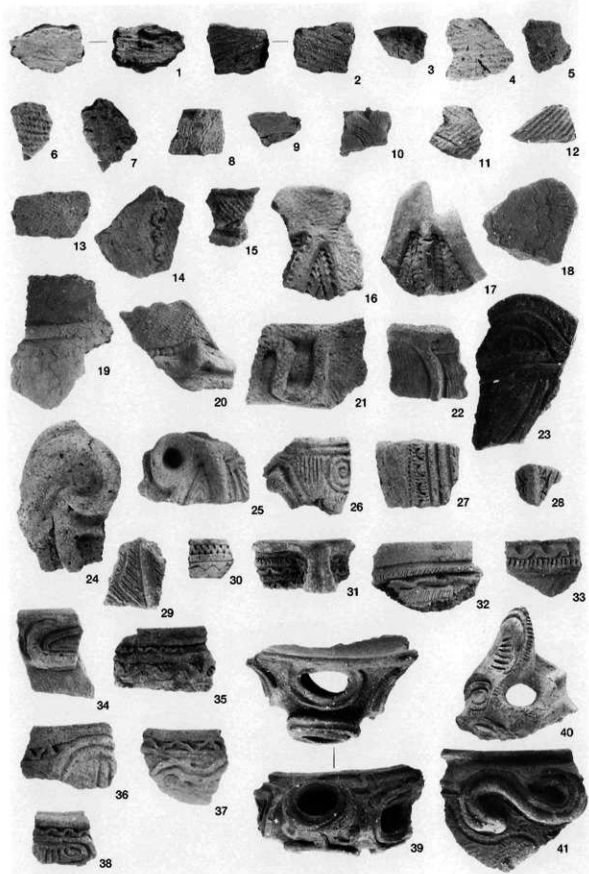


PL28

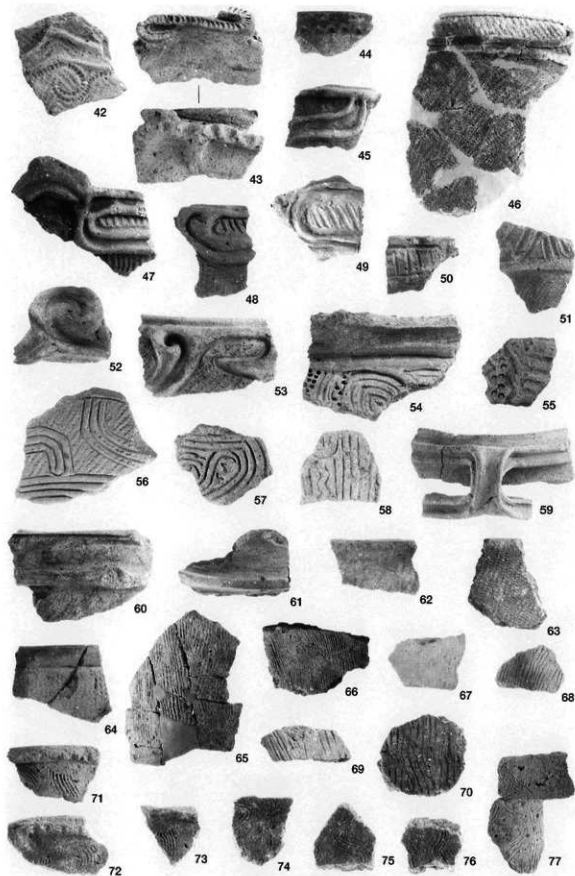
10A区



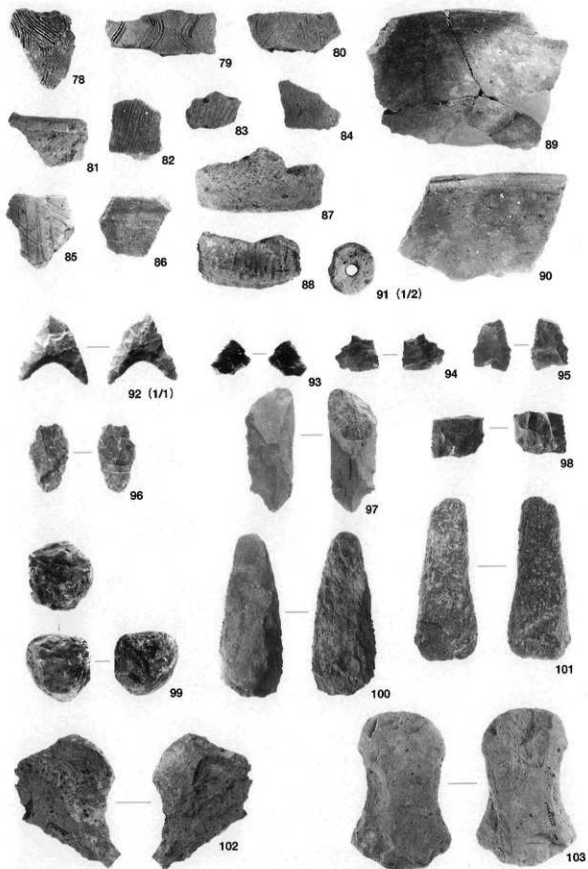
遺物集中地点（10A区）出土遺物



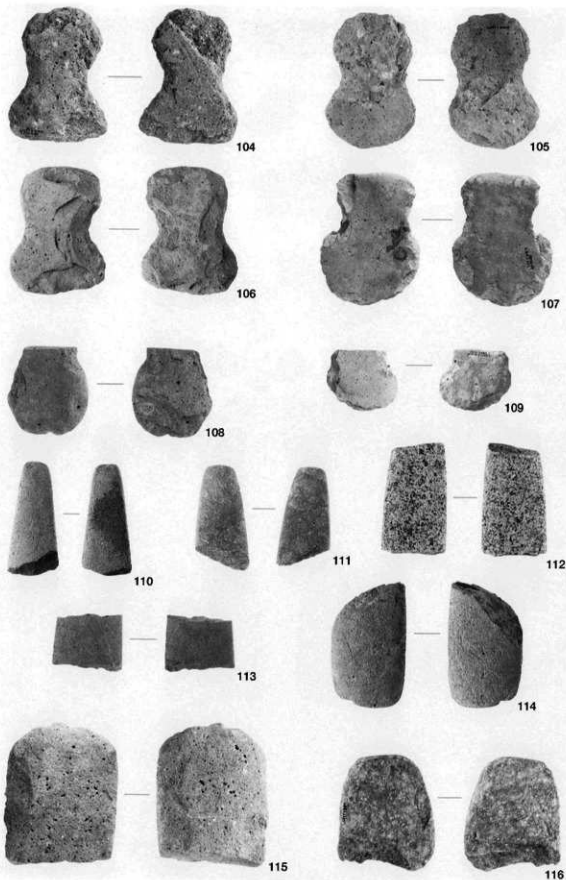
遺構外出土遺物(1)



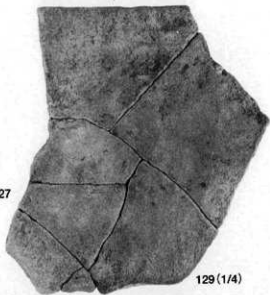
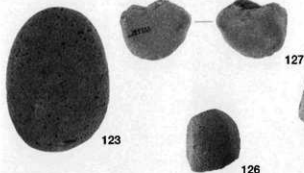
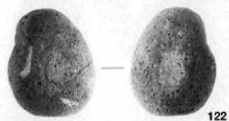
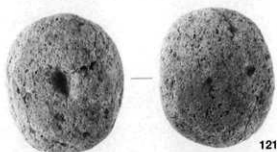
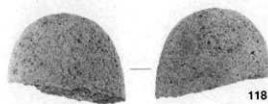
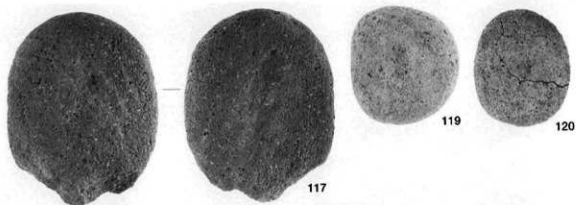
遺構外出土遺物(2)



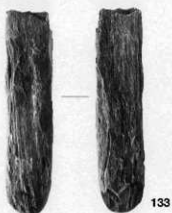
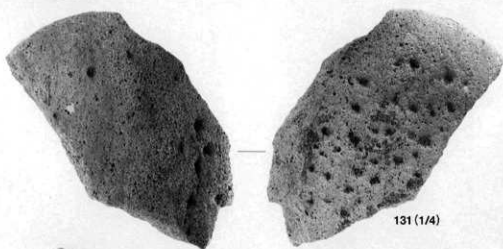
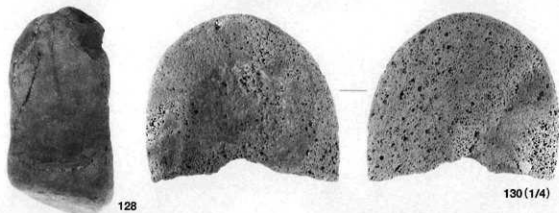
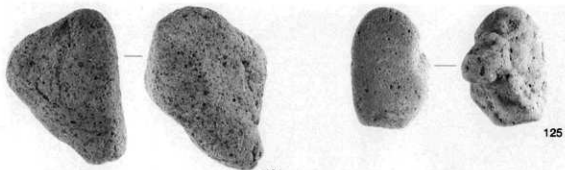
遺構外出土遺物(3)



遺構外出土遺物(4)

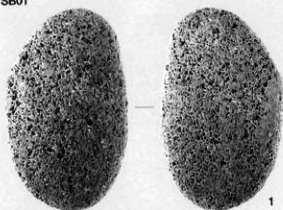


PL34

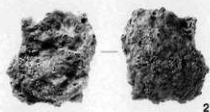


遺構外出土遺物(6)

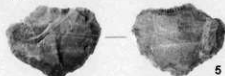
SB01



SD01



SD03



SD04



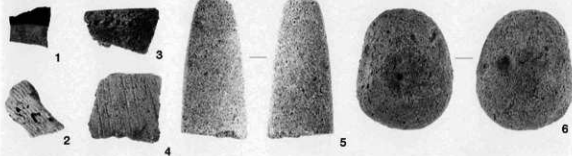
SD05



SB01、SD01・03・04・05出土遺物

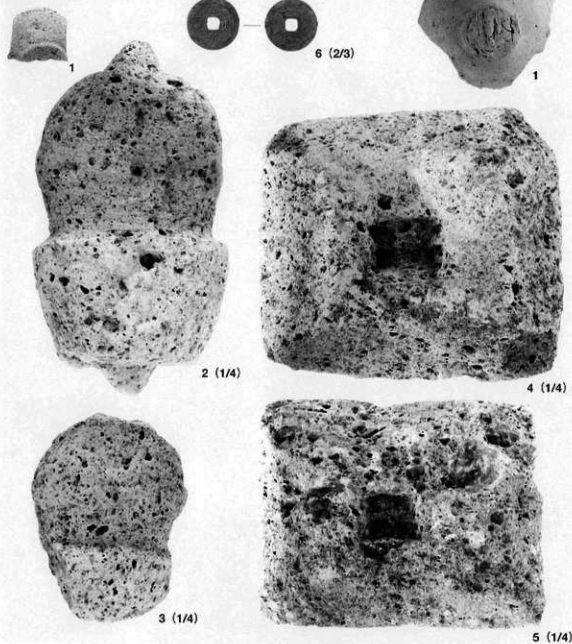
PL36

SD07



SK01

遺構外



SD07、SK01、遺構外出土遺物（中・近世）

報告書抄録

ふりがな	ながさかてんのうじいせき							
書名	長坂天王寺遺跡							
副書名								
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第45集							
編著者名	湯原勝美、梁木 誠							
編集機関	山武考古学研究所							
所在地	〒286-0045 千葉県成田市並木町221番地 TEL 0476-24-0536							
発行機関	宇都宮市教育委員会							
所在地	〒320-8540 栃木県宇都宮市旭一丁目1番5号 TEL 028-632-2764							
発行年月日	西暦2001年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながさかてんのうじいせき 長坂天王寺	栃木県宇都宮市 下荒針町3,925-1 外	09201	156	36° 33′ 45″	139° 49′ 56″	19990614～ 19991019	3,054㎡	宗教法人大 運寺移転新 築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
長坂天王寺	集落跡	縄文時代 中期	竪穴住居跡 10軒 焼土跡 1基 土坑 32基 遺物集中地点1か所	土器（早期、前期前半、中期 前葉～後葉）、ミニチュア土器、 耳栓、石鏃、サイドスクレイ パー、打製石斧、磨製石斧、 砥石、磨石、叢石、石皿、台 石、石棒		阿玉台Ⅳ式 ～加曾利E Ⅰ式期の集 落跡		
	集落跡	中・近世	掘立柱建物跡 2棟 溝跡 7条 土坑 3基	土師器皿、近世陶器、寛永通 宝、煙管、鉄滓、五輪塔				

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第45集

長坂天王寺遺跡

平成13年3月25日 印刷

平成13年3月31日 発行

- 編集 山武考古学研究所
〒286-0045 千葉県成田市並木町221番地
TEL 0476-24-0536代、FAX 0476-24-3657
- 発行 宇都宮市教育委員会
〒320-8540 栃木県宇都宮市旭一丁目1番5号
TEL 028-632-2764、FAX 028-632-2765
- 印刷 株式会社 文化総合企画
〒286-0201 千葉県印旛郡富里町日吉台1-23-12
TEL 0476-93-0593
-